松山市文化財調査報告書 160

# 福角2号墳
# 永塚古墳
# 御産所権現山古墳

2013

松山市教育委員会

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

# 福角２号墳
# 永塚古墳
# 御産所権現山古墳

２０１３

松山市教育委員会
公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

# 序　　言

本書は昭和の終わりから平成の初めにかけて、道後平野北部において実施された３遺跡、主に古墳の調査成果をまとめた報告書です。

福角２号墳では、丘陵稜線や斜面に群集する円墳のうち、中期の１基を調査しました。送電線鉄塔建設部分だけの狭小な範囲でしたが、墳丘・周溝の一部から須恵器・埴輪の出土がみられています。

永塚古墳は、低丘陵の先端付近に築造された後期の前方後円墳で、古くからその存在は知られていましたが、永年風雨等で荒廃し、ついには開発により消滅することになったため調査が行われたものです。松山では数少ない前方後円墳の発掘調査例として重要です。

御産所権現山古墳は、後期の小規模な古墳ですが、横穴式石室が比較的よい状態で残っていたため、この時期の小型石室の構造がよくわかる一例となりました。また、副葬された土器のなかには、蓋付子持壺のように他に類例をみない形態のものがあるなど、大きな成果が得られています。

このような成果をあげることができましたのも関係各位のご協力のたまものと、心より感謝申し上げます。本書を地域の古墳や歴史研究の資料として役立てていただければ幸いに存じます。

平成25年３月

松　山　市　教　育　長

山　本　昭　弘

# 例　　言

1．本報告書は、松山市教育委員会が1984（昭和59）年に松山市福角町および衣山で実施した、「福角２号墳」・「永塚古墳」、1989（平成元）年～1990（平成２）年に松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが山西町において実施した、「御産所権現山古墳群」の発掘調査報告書である。

2．福角２号墳の調査は送電線鉄塔建設に伴う調査として四国電力株式会社の協力のもとに、永塚古墳の調査は宅地造成に伴う調査として曽我部攀、小川泰夫、田上新一氏の協力を得て実施された。
　また、御産所権現山古墳群の調査は農地形状変更に伴い、日野開発株式会社の協力のもと実施された。

3．遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、丹生谷道代、多知川富美子、築山知子、矢野久子、矢鋪妙子が行った。

4．遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物図は、土器を１／４に、土製品、鉄器・鉄製品、石器・石製品を１／２で掲載することを原則としているが、埴輪の大型品については１／６に、また、鉄器のうち直刀のみを１／４で掲載した。

6．使用した方位は磁北である。

7．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

8．本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

# 目　　次

**第１章　はじめに** …… **1**
第１節　環　境 …… 1
第２節　刊行組織 …… 4

**第２章　福角２号墳** …… **5**
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　調査組織 …… 6
第３節　遺構と遺物 …… 9
第４節　まとめ …… 15

**第３章　永塚古墳** …… **17**
第１節　調査に至る経緯 …… 17
第２節　調査組織 …… 18
第３節　遺構と遺物 …… 18
第４節　まとめ …… 55

**第４章　御産所権現山古墳** …… **59**
第１節　調査に至る経緯 …… 59
第２節　調査組織 …… 60
第３節　調査の成果 …… 63
第４節　まとめ …… 98

# 挿　図　目　次

**第１章はじめに**

第１図　調査地と周辺の主要遺跡　…… 3

**第２章　福角２号墳**

第２図　福角２号墳と周辺の主な古墳　…… 6
第３図　調査地と近隣で確認された墳丘　… 7
第４図　調査地の調査後コンター図　…… 9
第５図　周溝内遺物出土状況図　…… 10
第６図　調査地西壁周溝土層断面図　…… 11
第７図　周溝出土遺物（１）…… 12
第８図　周溝出土遺物（２）…… 13
第９図　周溝出土遺物（３）…… 14
第10図　周溝出土遺物（４）…… 15

**第３章　永塚古墳**

第11図　永塚古墳の位置　…… 17
第12図　調査前墳丘コンターと
　　トレンチの配置　…… 19
第13図　ＳＸ１・２検出状況　…… 21
第14図　ＳＸ１出土遺物（１）…… 23
第15図　ＳＸ１出土遺物（２）…… 25
第16図　ＳＸ１出土遺物（３）…… 26
第17図　ＳＸ１出土遺物（４）…… 27
第18図　ＳＸ１出土遺物（５）…… 28
第19図　ＳＸ２出土遺物（１）…… 29
第20図　ＳＸ２出土遺物（２）…… 30
第21図　ＳＸ２出土遺物（３）…… 32
第22図　ＳＸ２出土遺物（４）…… 33
第23図　ＳＸ２出土遺物（５）…… 34
第24図　ＳＸ２出土遺物（６）…… 35
第25図　ＳＸ２出土遺物（７）…… 36
第26図　ＳＸ２出土遺物（８）…… 37
第27図　ＳＸ２出土遺物（９）…… 38
第28図　ＳＸ２出土遺物（10）…… 39
第29図　ＳＸ２出土遺物（11）…… 40
第30図　ＳＸ２出土遺物（12）…… 41
第31図　ＳＸ２出土遺物（13）…… 42
第32図　ＳＸ２出土遺物（14）…… 43
第33図　ＳＸ２出土遺物（15）…… 44
第34図　ＳＸ２出土遺物（16）…… 45
第35図　ＳＸ２出土遺物（17）…… 46
第36図　出土地点不明の遺物　…… 47
第37図　墳丘長軸ライン土層断面図　…… 49
第38図　前方部横断土層図　…… 51
第39図　くびれ部横断土層図　…… 52
第40図　主体部測量図（１）…… 53
第41図　主体部測量図（２）…… 54
第42図　墳丘想定復元図　…… 56

**第４章　御産所権現山古墳**

第43図　調査地位置図　…… 59
第44図　申請地の現況　…… 61
第45図　調査区とトレンチの配置および
　　確認された古墳　…… 62
第46図　Ｂ区Ｔ１出土遺物　…… 63
第47図　Ｄ区Ｔ２拡張区出土遺物　…… 65
第48図　Ｄ区Ｔ５出土遺物　…… 66
第49図　Ｄ区Ｔ８・９出土遺物（１）…… 67
第50図　Ｄ区Ｔ８・９出土遺物（２）…… 68
第51図　Ｇ区採集弥生土器　…… 69
第52図　御産所古墳群分布図（松山市
　　文化財報告書９　1976より）…… 70

第53図　１号墳調査前墳丘測量図　…… 71
第54図　１号墳墳丘断面土層図　…… 72
第55図　１号墳調査後墳丘測量図　…… 73
第56図　１号墳丘出土遺物　…… 75
第57図　１号墳周溝出土遺物（１）…… 76
第58図　１号墳周溝出土遺物（２）…… 77
第59図　１号墳横穴式石室測量図（１）…… 78
第60図　１号墳横穴式石室測量図（２）…… 79
第61図　１墳横穴式石室閉塞部測量図　…… 80
第62図　１号墳横穴式石室床面測量図　…… 81
第63図　１号墳横穴式石室遺物出土状況　… 83
第64図　１号墳横穴式石室出土遺物（１）… 84
第65図　１号墳横穴式石室出土遺物（２）… 85
第66図　１号墳横穴式石室出土遺物（３）… 88
第67図　１号墳横穴式石室出土遺物（４）… 89
第68図　１号墳横穴式石室出土遺物（５）… 90
第69図　１号墳横穴式石室出土遺物（６）… 91
第70図　試掘調査３号墳出土遺物　…… 92
第71図　３号墳調査後墳丘測量図（１）…… 93
第72図　３号墳調査後墳丘測量図（２）…… 94
第73図　３号墳横穴式石室測量図（１）…… 95
第74図　３号墳横穴式石室測量図（２）…… 96
第75図　３号墳出土遺物　…… 97

## 写真図版目次

**福角２号墳**

図版１　調査前の調査地遠景（東より）
調査前近景（西より）
果樹伐採後の調査地近景（西より）
図版２　調査作業風景（西より）
周溝検出状況（１）（西より）
周溝検出状況（２）（東より）
図版３　周溝遺物検出状況（１）（西より）
周溝遺物検出状況（２）（南西より）
周溝遺物出土状況（３）（南より）
図版４　周溝遺物出土状況近景
周溝完掘状況（東より）
完掘状況全景（西より）
図版５　周溝出土遺物

**永塚古墳**

図版６　調査前墳丘伐採作業風景（西より）
伐採・清掃前の後円部の状況（南より）
伐採・清掃前の主体部の状況（南より）
図版７　伐採・清掃後の墳丘遠景（北東より）
伐採・清掃後の墳丘（１）（南より）
伐採・清掃後の墳丘（２）（南西より）
図版８　主体部遺存状況（１）
主体部遺存状況（２）（南東より）
主体部床面の状況
図版９　南側くびれ部地山整形痕
ＳＸ１検出状況（南より）
ＳＸ１遺物出土状況（１）（南西より）
ＳＸ１遺物出土状況（２）
図版10　ＳＸ１遺物出土状況
近景（１）（北より）
ＳＸ１遺物出土状況
近景（２）（北より）
ＳＸ１遺物出土状況近景（３）
図版11　ＳＸ１完掘状況（北西より）
北側くびれ部地山整形痕ＳＸ２
調査作業風景（南より）
ＳＸ２遺物出土状況（１）（北より）
図版12　ＳＸ２遺物出土状況（２）（北より）
ＳＸ２遺物出土状況（３）（東より）
ＳＸ２完掘状況（１）（西より）

図版13　ＳＸ２完掘状況近景（１）（東南より）
ＳＸ２完掘状況近景（２）（西北より）
前方部横断土層（南東より）
図版14　前方部縦断土層（南西より）
前方部～くびれ部縦断土層（南西より）
後円部～くびれ部縦断土層（南西より）
図版15　ＳＸ１出土遺物（１）
図版16　ＳＸ１出土遺物（２）
ＳＸ２出土遺物（１）
図版17　ＳＸ２出土遺物（２）
図版18　ＳＸ２出土遺物（３）
図版19　ＳＸ２出土遺物（４）

**御産所権現山古墳**

図版20　Ｅ区１・２号墳遠景（北西より）
２号墳丘より望む
伐採前の１号墳丘（北より）
伐採後の１号墳丘（１）（東より）
図版21　伐採後の１号墳丘（２）（南より）
１号墳丘上石材集積状況（南より）
１号墳横穴式石室の検出（西より）
図版22　１号墳横穴式石室閉塞状況（東より）
１号墳横穴式石室左袖部副葬状況（北東より）
図版23　１号墳横穴式石室副葬状況（西より）
１号墳横穴式石室奥壁部副葬状況（西より）
図版24　１号墳横穴式石室床面馬具検出状況
１号墳横穴式石室奥壁（西より）
１号墳横穴式石室開口部（東より）
図版25　１号墳横穴式石室全景（１）（西より）
１号墳横穴式石室全景（２）（西より）
図版26　１号墳横穴式石室墓壙掘り方検出状況（西より）
左袖石基底部貝殻付着状況
左袖石基底部貝殻付着状況近景
図版27　試掘調査３号墳横穴式石室および東側周溝検出状況（南東より）
試掘調査３号墳横穴式石室検出状況（南東より）
試掘調査東側周溝須恵器平瓶出土状況（南東より）
図版28　３号墳北側周溝遺物出土状況（西より）
３号墳横穴式石室鉄鏃出土状況
３号墳横穴式石室棺台石配置状況（南より）
図版29　３号墳横穴式石室完掘状況（西南より）
３号墳横穴式石室完掘状況（東南より）
３号墳横穴式石室完掘状況（南より）
図版30　試掘調査Ｂ区・Ｄ区出土遺物
図版31　１号墳丘・周溝出土遺物
図版32　１号墳横穴式石室出土遺物（１）
図版33　１号墳横穴式石室出土遺物（２）
図版34　１号墳横穴式石室出土遺物（３）
図版35　１号墳横穴式石室出土遺物（４）
図版36　１号墳横穴式石室出土遺物（５）
３号墳出土遺物

# 第１章　はじめに

## 第１節　遺跡をめぐる環境

### （１）地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約４㎞の通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。そのうち、平野北方の沖積低地は、東方の高縄山系南西面と、西方の太山寺山塊東面との間の、東西幅約２～４㎞、南北長約７㎞にわたってひろがる地溝性の低地となっている。本書で報告される古墳のうち、永塚古墳はこの沖積低地西方に位置する松山市衣山町の低丘陵上、また御産所権現山古墳は同じく低地西方の山西町、永塚古墳の南西1.3㎞の丘陵上にある。一方、福角２号墳は低地の東側、福角町にあって低地北端を西眼下にする丘陵上に所在する。その北から北西１㎞には堀江海岸、斎灘が広がっている。

### （２）歴史的環境

古墳が分布する道後平野北部域における環境を概観してみる。このエリアでの遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るものは縄文時代後期の遺物群で、馬木町所在の蓬莱寺遺跡や、太山寺町の大渕遺跡において、包含層資料として後期中葉から後葉までの遺物の出土がみられている。遺構として人間の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代晩期中葉以降のことである。船ケ谷町所在の船ケ谷遺跡では晩期突帯文を遡る時期の河川、杭列、住居址が多量の土器、石製品、木製品とともに検出されている。大渕遺跡では、後期に引き続き、晩期前葉から晩期末までの遺物の出土があり、晩期後半の遺物を出土する土坑群が調査されている。また、晩期後半の遺物を出土する包含層からは大量のイネ花粉や炭化籾の検出とともに、丹塗り壺、カジ紋壺や石庖丁、石鎌などの大陸系磨製石器の出土もあり、当平野における稲作関連の最も古い例として注目されている。これらの遺跡は先述の沖積低地に立地する遺跡であるが、例が少なかったこの低地上での発掘調査例も少しずつ増加しており、弥生時代に関しては注目される調査例もみられはじめている。太山寺町の市営三光団地内、大渕遺跡３次調査では中～後期の土器が流路内から出土している。また、西長門の船ケ谷遺跡４次調査の流路からは前期から後期の遺物が出土したほか、前期から後期まで各期の井戸が検出されている。これらの井戸のう

ち、前期の１基は壺形土器の底部を抜いたものを井戸側として利用していて注目された。この低地周辺で弥生時代の遺構・遺物が多く確認されているのは低地を臨む周辺の丘陵麓、あるいは麓から低地にいたる緩斜面上である。主な遺跡を挙げておくと、溝から前期中葉の土器とともに板鍬、柳葉形磨製石鏃などを出土した山越遺跡２次調査、弥生時代各期の遺物の出土のうち前期突帯文系甕の出土が特徴的な谷町座拝坂（ざわいざか）遺跡、中～後期の溝を多く検出し、なかでも後期の円形周溝状遺構の検出で注目される姫原遺跡などがある。

古墳時代の集落そのものの確認例はさほど多いものではないが、先述の大渕遺跡３次調査で前期の竪穴建物数棟と古式土師器を多量に出土する流路や後期の掘立柱建物数棟が検出されている。また、西長戸で行われた船ケ谷遺跡２次調査では、４世紀末から６世紀前半の祭祀土坑を伴う集落遺構が調査された。同じく、船ケ谷遺跡４次調査では、古墳時代初頭から後期の集落や流路の検出があり、陶質土器や軟質土器、非陶邑系須恵器など多量の遺物の出土がみられている。これらの集落に対して古墳そのものは周辺の丘陵上に数多く分布している。太山寺山塊北面の勝岡町高月山古墳群の７基の古墳のうち２号墳は、箱式石棺を主体部とする小長方墳で、周溝内より布留Ⅰ式期併行の土師器壺や銅鏃を出土しており、この地域のみならず平野内でも古い段階の古墳のひとつである。この古墳群の周辺には同様に箱式石棺を主体部とする古墳群、赤子谷古墳群、坂浪古墳群などが分布しており、この坂浪古墳群中の塔ノ口山古墳では長宜子孫銘内行花文鏡、画像鏡の２面の舶載鏡片が出土し、古い段階の首長墳ともいわれているが、墳形・主体部とともにその実態については不明な部分が多い。当平野における出現期の前方後円墳として、平野北西部松山市朝日ヶ丘にかつて所在した朝日谷２号墳がある。標高133mの独立丘陵北西側中腹71m付近の稜線を切断して設けられたもので、全長29mを測る。後円部の２基の木棺のうち１基から２面の後漢鏡、鉄剣、鉄鏃、銅鏃などを出土しており、その海を意識した立地から海上交通権を掌握していた３世紀後半代の首長の墓とみられている。その他平野北部域の前方後円墳としては、船ケ谷町の低丘陵上にかつて存在した船ケ谷向山古墳がある。帆立貝形の前方後円墳と考えられており、後円部およびくびれ部と考えられる部分の調査で出土した樹立列状態での円筒埴輪や、馬、鶏、蓋などの形象埴輪から５世紀末頃の年代を与えられている。本書で報告される永塚古墳は、この船ケ谷向山古墳とともに平野北部域に所在する後期の前方後円墳であり、これら朝日谷２号墳、船ケ谷向山古墳、永塚古墳の３基が現在知られている平野北部域における前方後円墳のすべてである。

福角２号墳が立地する沖積低地東方の高縄山系南西麓にも多くの古墳群が分布している。そのなかでも福角町所在の市指定文化財北谷古墳や権現町所在の塚本１号墳など、大型石材を用いた横穴式石室を主体部とする６世紀末から７世紀前半代の円墳・方墳がこのエリアでの首長系譜に連なる古墳としてよく知られている。また、潮見古墳群内に属する谷町室岡山蓮華寺境内には、阿蘇溶結凝灰岩を刳り抜いた舟形石棺の身部がある。出土地、出土状況等の詳細は不明だが、県内唯一の刳り抜き式石棺の例である。縄文時代晩期の大渕遺跡での初期農耕に始まり、船ケ谷遺跡４次調査の陶質土器や軟質土器の出土例などあわせ、各時代を通じて瀬戸内海上交通ルートの要衝の一角を道後平野北西部が担っていたことがしのばれる。

古代以降のこの地域については不明な部分が多いが、永塚古墳の南約200mの丘陵緩斜面には衣山瓦窯が存在したといわれ、付近での採集瓦から奈良時代後半から平安時代後半までの操業を考えられている。集落では、座拝坂遺跡の奈良～平安時代の２棟の掘立柱建物、あるいは姫原遺跡の溝、また、

1．塔の口山古墳　7．大渕遺跡　13．船ケ谷遺跡３次調査　19．衣山瓦窯
2．高月山２号墳　8．大渕遺跡３次調査　14．船ケ谷遺跡４次調査　**20．御産所権現山古墳**
**3．福角２号墳**　9．蓮花寺舟形石棺　15．船ケ谷向山遺跡　21．朝日谷２号墳
4．北谷古墳　10．座拝坂遺跡　16．姫原遺跡
5．塚本古墳　11．船ケ谷遺跡　17．山越遺跡２次調査
6．蓬莱寺遺跡　12．船ケ谷遺跡２次調査　**18．永塚古墳**

**第１図　調査地と周辺の主要遺跡**（S＝1：50,000）

船ケ谷遺跡３次調査の掘立柱建物、柵列、井戸等で構成された中世村落遺構などが遺跡として知られている主なものである。

**文　献**

藤田憲司　「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報 第12号』倉敷考古館 1976
岡野　保　『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会 1980
長井数秋　「農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代 Ⅰ』愛媛県教育委員会 1982
阪本安光　『松山市・船ケ谷遺跡』愛媛県教育委員会 1984
西尾幸則　「鶴が峠遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
吉本　拡　「衣山窯址」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
『松山市史料集 第２巻 考古編 Ⅱ』　松山市教育委員会 1987
宮崎泰好　『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会 1988
池田学・宮崎泰好　「船ケ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報 Ⅱ』松山市教育委員会
松山市埋蔵文化財センター 1989　『愛媛県内古墳－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1991
栗田茂敏　『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
相原浩二　「姫原遺跡」『和気・堀江の遺跡 Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
松村　淳 ほか　「座拝坂遺跡」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
梅木謙一・武正良浩　「山越遺跡－２次調査－」『山越・久万ノ台の遺跡』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
梅木謙一 ほか　『朝日谷２号墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
高尾和長　『船ケ谷遺跡－２次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
加島次郎　『船ケ谷遺跡－３次調査地－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
栗田茂敏・武正良浩　『大渕遺跡－１・２次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
吉岡和哉　『大渕遺跡－３次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
山之内志郎・高尾和長　『船ケ谷遺跡－４次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002

## 第２節　刊行組織

松山市教育委員会

| | | |
|---|---|---|
| | 教育長 | 山本　昭弘（10／２～） |
| | 教育長 | 山内　　泰（前任、～10／１） |
| 事務局 | 局　長 | 嶋　　啓吾 |
| | 企画官 | 渡部　満重 |
| | 〃 | 前田　昌一 |
| 文化財課 | 課　長 | 駒澤　正憲 |
| | 主　幹 | 篠原　昭二 |
| | 主　査 | 楠　　寛樹 |

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

| | | |
|---|---|---|
| | 理事長 | 一色　哲昭 |
| | 事務局長 | 松澤　史夫 |
| | 事務局次長 | 近藤　　正 |
| 施設利用推進部 | 部　長 | 玉井　弘幸 |
| 埋蔵文化財センター | 所　長 | 田城　武志 |
| | 担当主査 | 栗田　茂敏 |

# 第２章　福角２号墳

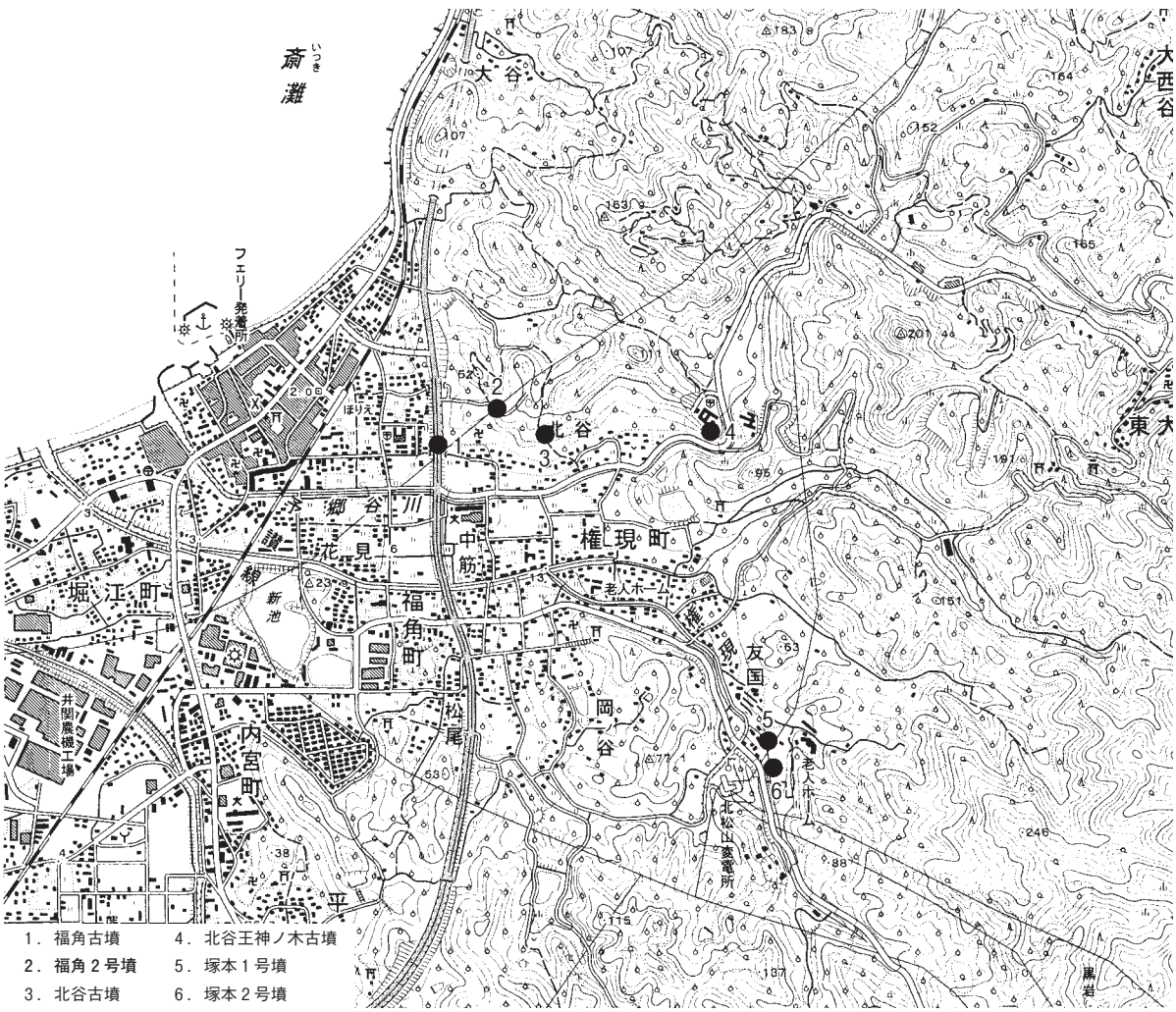
## 第１節　調査に至る経緯

1982（昭和57）年10月および11月の２回、特別高圧送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財確認願が四国電力株式会社より松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に提出された。松山市北部の北条線一部増設、区間変更によるものである。15号から始まり南から北東の21号まで延びる路線と、この路線の20号鉄塔から南東に分岐して20－７から20－１号まで続く路線の２路線からなり、その一部は周知の埋蔵文化財包蔵地「№38 北谷・権現山遺物包含地・古墳群」に該当していた。また、鉄塔用地ということもあり、包蔵地外であってもすべての用地について踏査をかけることとし、市教委は計画された路線沿線の鉄塔用地14地点についての踏査を1983（昭和58）年度中に行った。その結果、古墳である可能性が高い２地点についてトレンチを設定し確認調査を行うこととなった。調査は16号鉄塔用地を1984（昭和59）年４月２日～12日の間､20－６号鉄塔用地を同年４月13日～17日の間で実施した。その結果、20－６号鉄塔用地については、既に破壊・削平された古墳の痕跡である可能性が高いとし、建設に影響なしと判断されたが、16号鉄塔用地では埴輪や須恵器の出土が認められたため、可能な限りトレンチ周辺の拡張掘削を行い、遺構・遺物の検出、記録を行った。調査は「四電16号鉄塔用地」として行われたが、これを遡る1977（昭和52）年、岡野保氏を中心とする松山商科大学史跡研究会によって行われた史跡北谷古墳周辺の分布調査の際、この地点周辺に数多くのドットが落とされていることが後にわかった。この調査の対象範囲は、旧松山市北部域の福角、権現、平田、谷、吉藤の丘陵上と広範囲にわたり、調査によって落とされたドットは古墳70数ヶ所、散布地とあわせて80地点に及んでいる。本墳の所在する丘陵上にも１～27までのドットが落とされており、1991（平成３）年愛媛県教育委員会編集･発行の「愛媛県内古墳-分布調査報告書-」ではこの分布調査の成果を取り込み、１～27までの番号をそのまま踏襲、新たに「堀江大谷」という古墳名を付与して堀江大谷１号墳～27号墳が登録されている。これらの古墳の多くは丘陵稜線上に近接して営まれており、図上の位置関係からのみでみると調査された古墳は22号墳、あるいは23号墳に相当する可能性があるが、確証が得られていない。一方、同丘陵上における近隣の調査には、南西およそ100m、標高23mの丘陵麓近くでの「福角古墳」の調査がある。上述の古墳分布報告では把握されていなかった古墳で､国道196号松山･北条バイパス建設に伴い、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センターによって1992（平成４）年に発掘調査が行われた。以上のように、登録済み古墳として特定できないという事情から、今回調査された古墳については、この福角古墳に引き続き報告される調査であるので「福角２号墳」として報告する。なお、愛媛県の分布報告によれば、１～27号墳の所在地はすべて堀江町大谷となっているが、申請された当該地の地番は松山市福角町乙６番２である。

## 第２節　調査組織

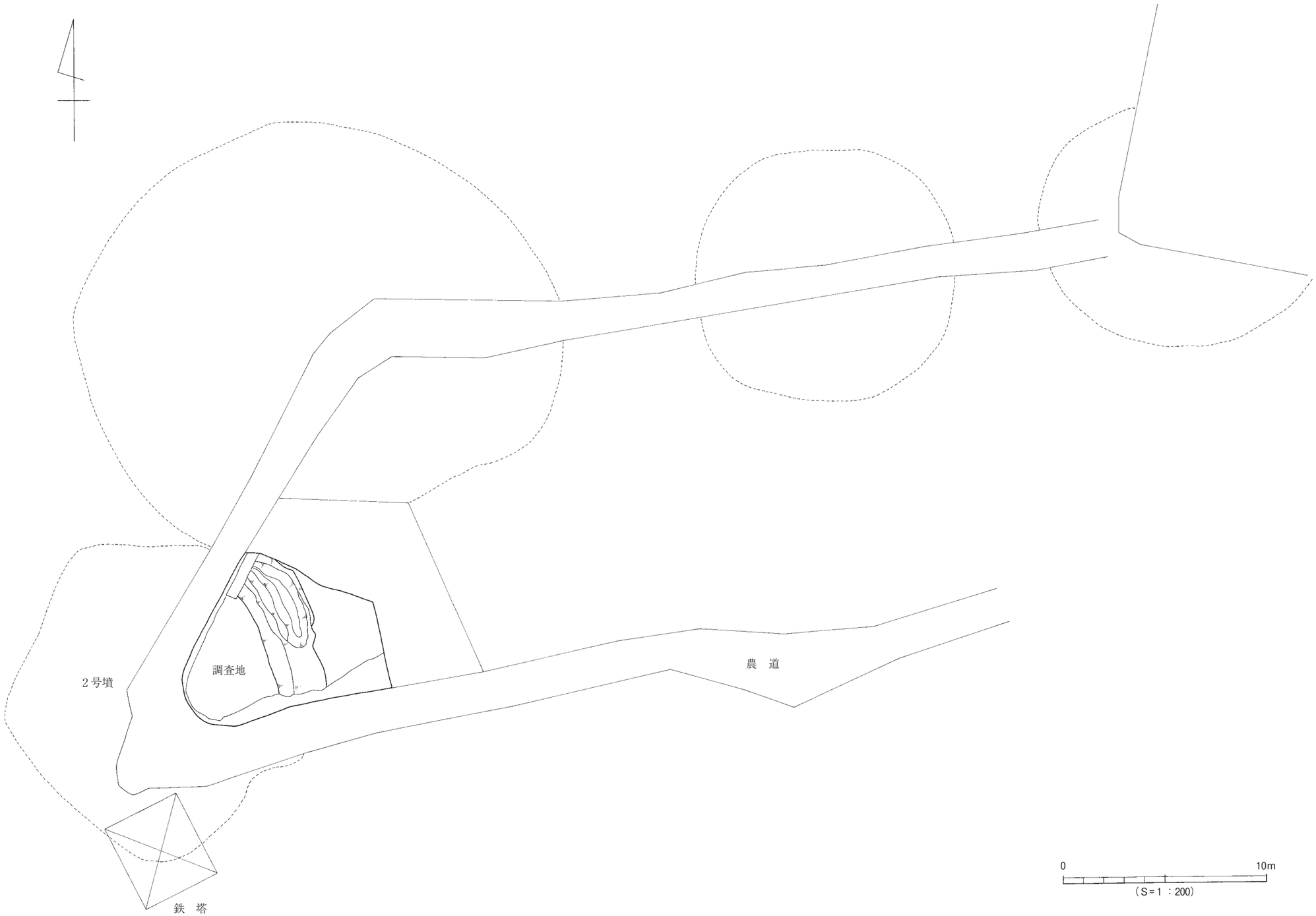
松山市教育委員会　教 育 長　西原多喜男
　　文化教育課　課　　長　藤原　　渉
　　課長補佐　坪内　晃幸
　　岸　　郁男
　　第二係長　大西　輝昭
　　主　　任　西尾　幸則
　　調 査 員　松村　　淳
　　栗田　茂敏

調 査 地　愛媛県松山市福角町乙６番２
調査期間　1984（昭和59）年４月２日～1984（昭和59年）４月17日
調査面積　179.55㎡




１．福角古墳　　４．北谷王神ノ木古墳
２．福角２号墳　　５．塚本１号墳
３．北谷古墳　　６．塚本２号墳

**第２図　福角２号墳と周辺の主な古墳**（S＝1：50,000）



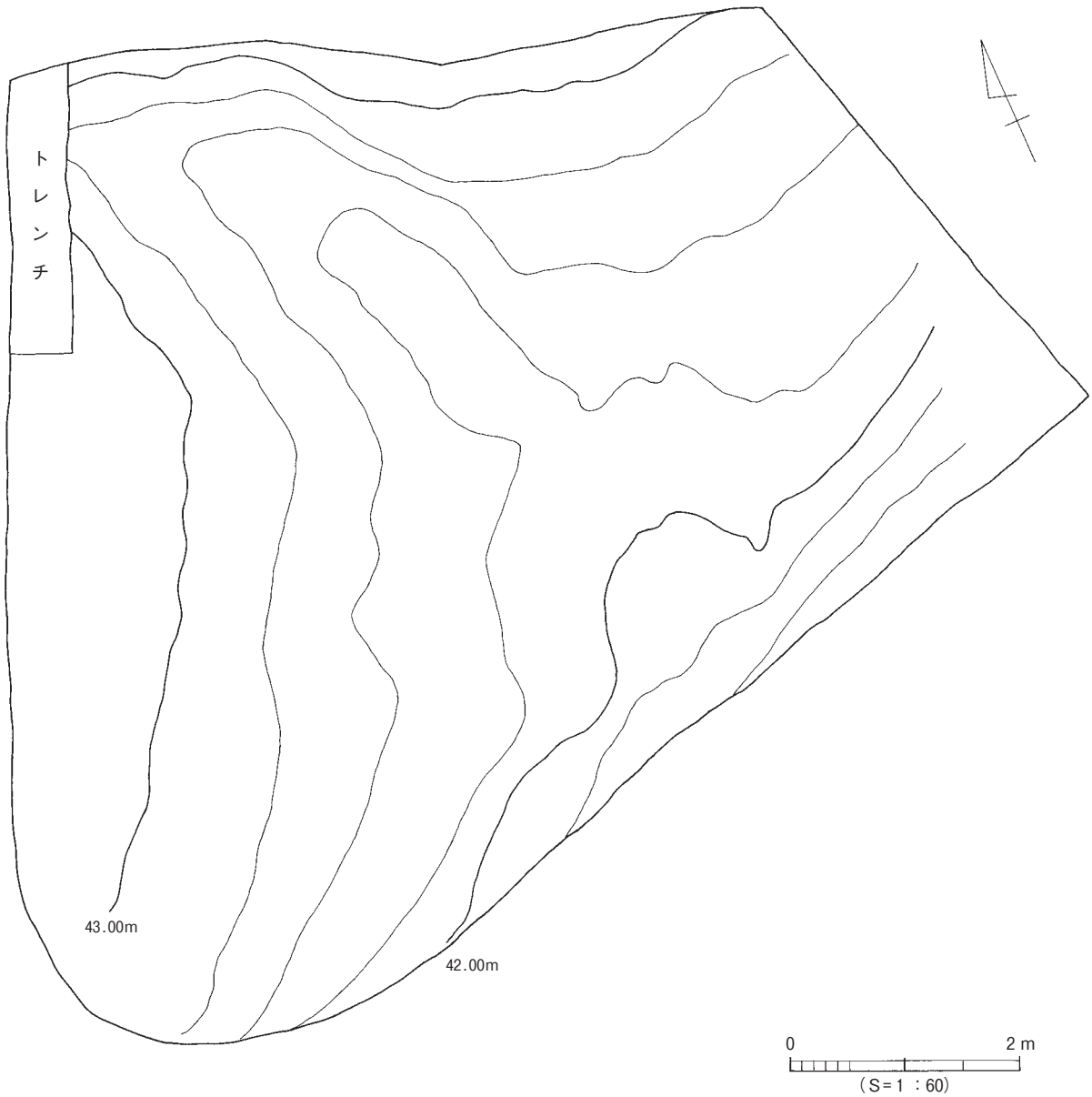

第３図　調査地と近隣で確認された墳丘

# 第３節　遺構と遺物（第３～６図）

## （１）墳丘・周溝

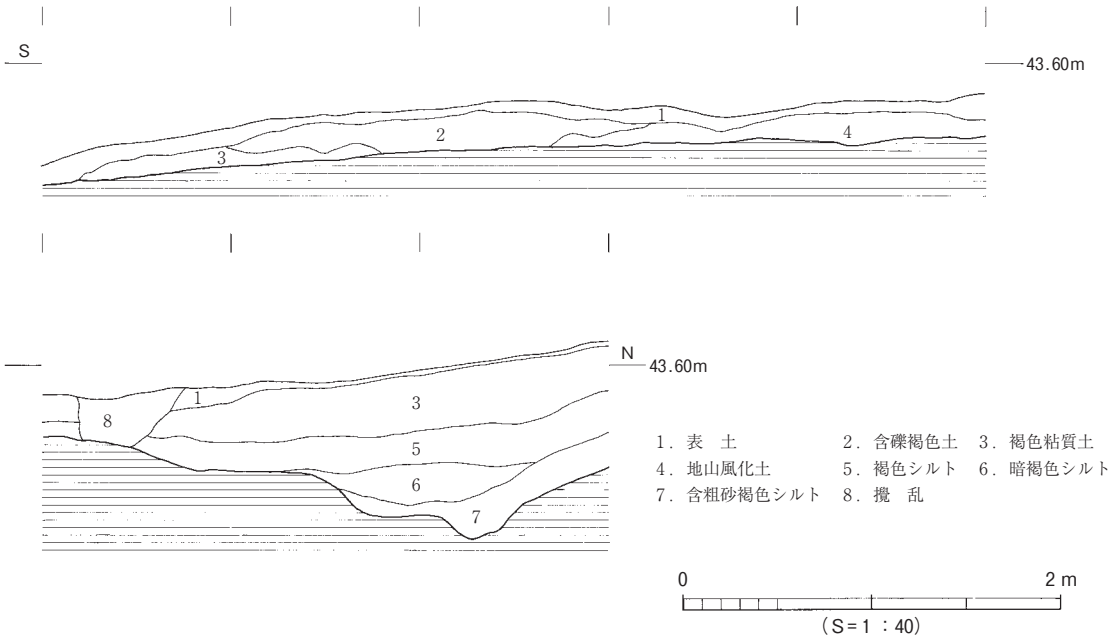
古墳は、北東から南西へ延びる稜線の先端付近、北から南へ下る緩斜面に築造されている。墳丘は、外面観察上は僅かな盛り上がりとしてとらえられたが、稜線状をＵ字状に走るコンクリート舗装の農道によって切られた状態であった。近隣では、調査された古墳の北東から東方向の稜線沿いに、同じく農道に切られたかたちでさらに３基の円墳と思われる盛り上がりが隣り合うように連続して存在しているのが確認されている。

調査では、古墳東側地山面に掘削された周溝の一部が6.5mの長さで検出された。花崗岩風化土の




**第４図　調査地の調査後コンター図**

**第５図　周溝内遺物出土状況図**




**第６図　調査地西壁周溝土層断面図**

地山を掘削した断面Ｕ字状の溝で、幅２～2.4m、深さ0.5m程度の遺存である。墳丘盛土は残存していない。この溝と現況の表面地形とをあわせて考えると、先の踏査で推定されたように直径10～12m前後の円墳である可能性が高い。出土した遺物には須恵器・埴輪があるが、これらはすべて周溝からの出土である。

## （２）周溝出土遺物（第７～10図）

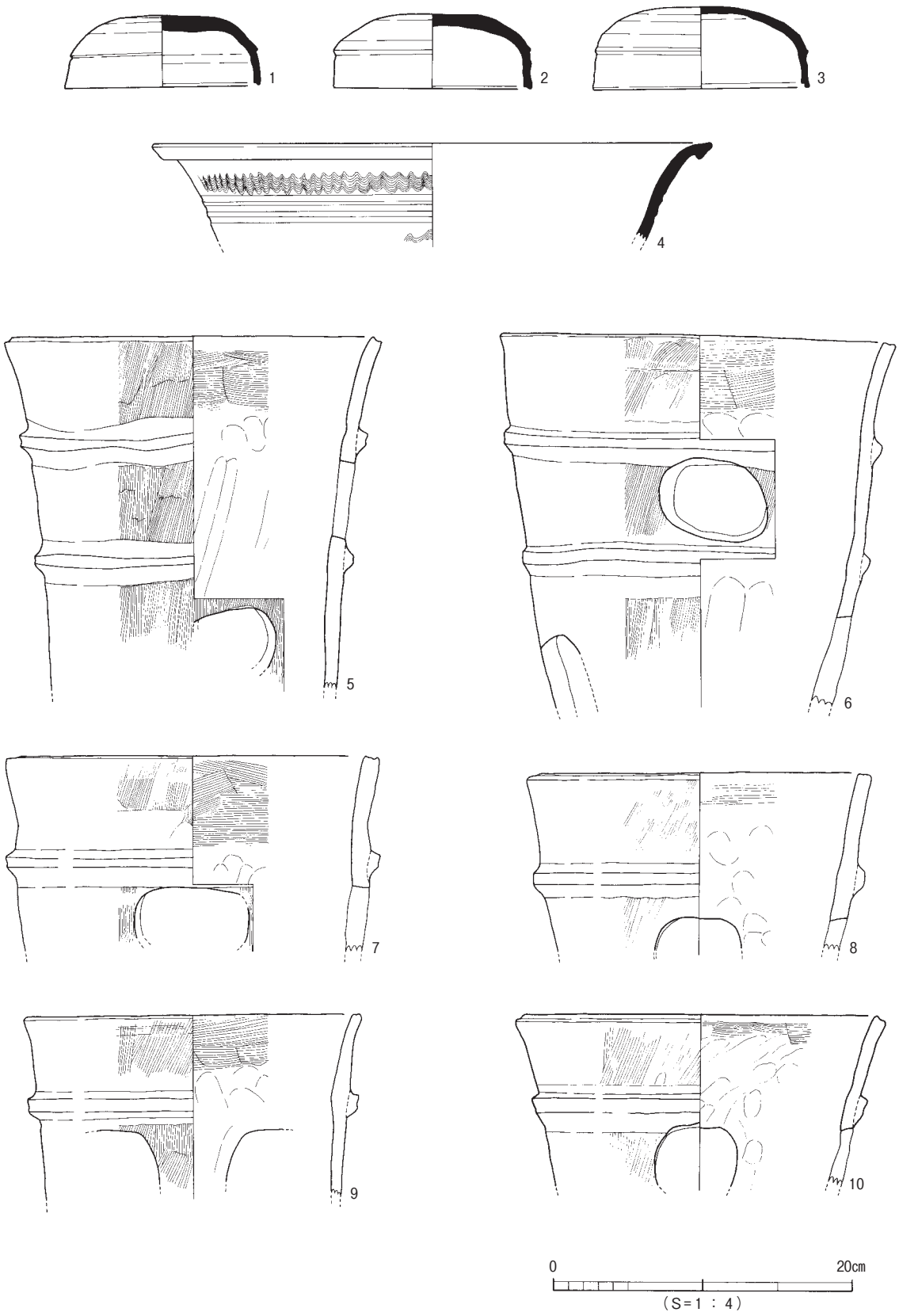
**須恵器**

坏蓋（１～３）　いずれも蓋で、１は器高4.8㎝、口径13.0㎝、２で器高5.0㎝、口径は１と同じく13.0㎝を測る。天井部と口縁部の境には段のような稜を持つ。口端面は中窪みの傾いた面をなし、外端部で接地する。３は口端部を僅かに欠くが、ほぼ復元完形になるもので、器高5.5㎝、口径14.4㎝と前二者よりひとまわり大きい。天井部と口縁部境の稜は細い突帯のような形状をなし、口端部には段を持つ。天井部の３/２程度の範囲を反時計方向に削られている。

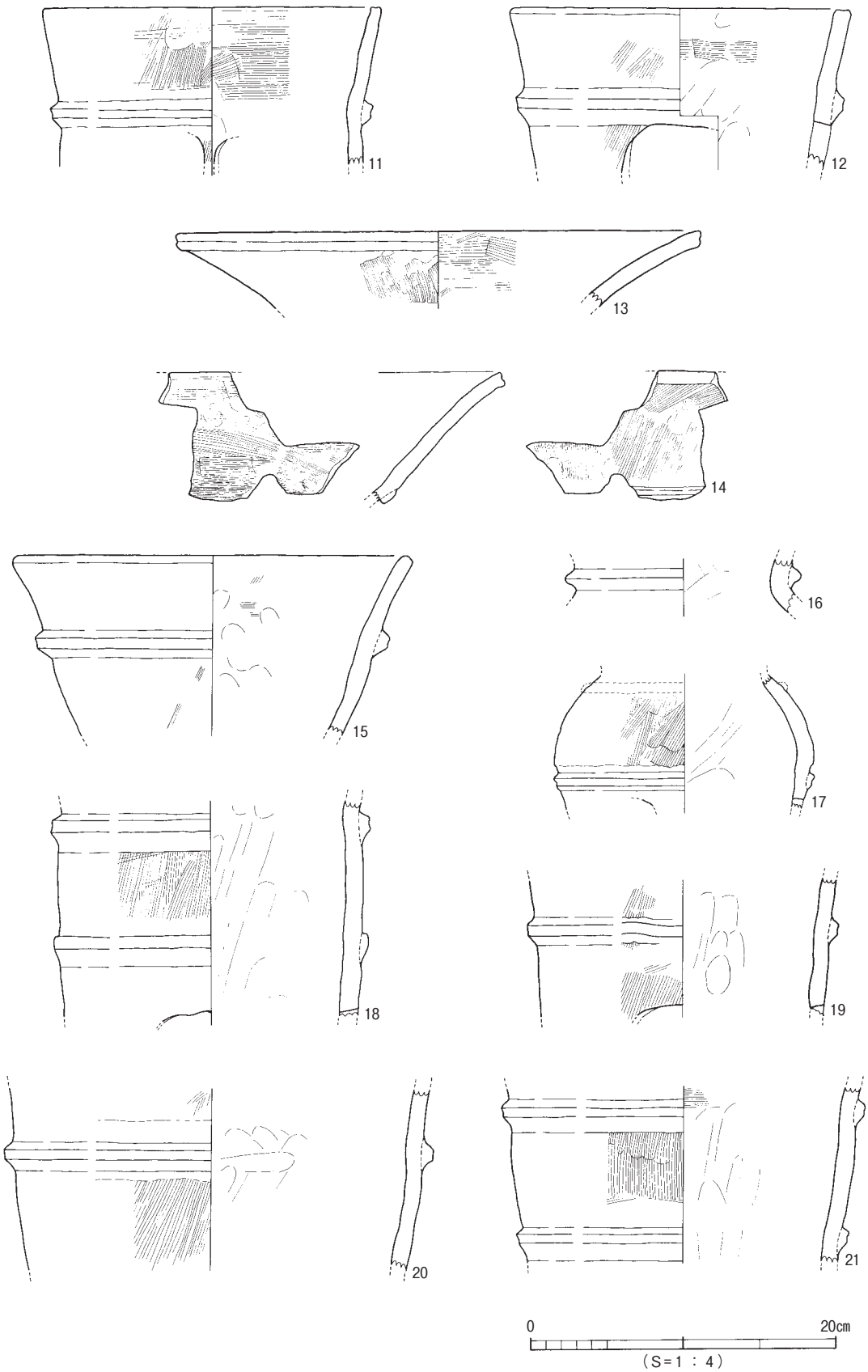
器台（４）　復元口径37.2㎝を測る高坏形器台の受部である。外反する口縁部外面、端部に接して断面三角形の突帯を貼り付け、その直下をカキ目調整する。受部上位に３条の凹線を施すことにより２条の凸線を成形し、口端部直下のカキ目調整と凹線文帯との間の施文帯に９条単位の櫛描波状文を描く。また凹線文帯下位にも波状文が施されているところまでが部分的に確認できる。

**埴輪**（５～25）

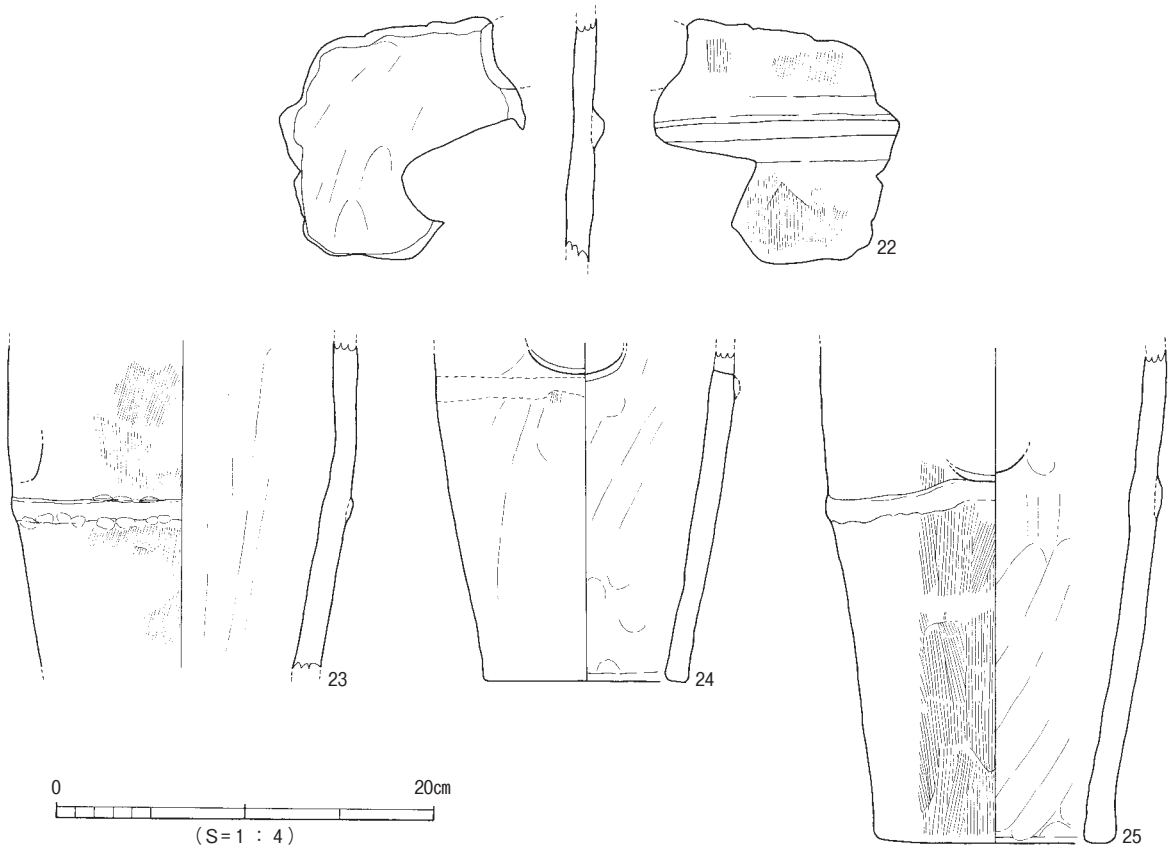
口縁部まで遺存し、円筒と識別できるもの８点、口頸部の形状により朝顔と識別できるもの５点があり、その他はいずれかの体部および基底部である。５は口径25.3㎝、緩く外反する口縁部は端部に中窪みの外斜した面を持つ。突帯断面は台形で端面が撫でによる窪みを持つ。突帯は２条まで確認でき、区画された突帯間と下段の突帯以下の区画のそれぞれ対向する位置に、２個の透かし孔が段ごと




**第７図　周溝出土遺物（１）**




**第8図　周溝出土遺物（2）**




**第９図　周溝出土遺物（３）**

に90°の配置で施されている。透かし孔の形状は円ないし楕円形である。外面の調整は斜め方向のハケ目、内面口縁部にはＢ種ヨコハケが施される。口端部付近は内外面ともに撫でられている。６は口径26.3㎝、５と同様の特徴を持つが、突帯端面の窪みが一様ではなく台形状、あるいは三角形状になる部分がある。口端部外面にみられる沈線状はヨコナデの際の疵で施文を意図したものではない。その他の円筒埴輪も基本的にはこれら２点と同様である。

13～17は朝顔形埴輪の口縁部や頸部の片である。口縁部形態には大きく開く13・14と、立ち上がり気味に開く15のようなものとの２種がある。前者は口端面の形状や内外面の調整において円筒に準ずる特徴を持つ。ただし、内面のヨコハケの範囲は広く、また14のようにＡ種のヨコハケが用いられるところが異なる。14は、ちょうど突帯貼り付けの上位ヨコナデの部分で欠損している。これに比べると15は突帯の位置がかなり口縁部に寄っている。突帯断面形状がやや中窪みの台形というところは円筒と同様である。調整や口端部の形態は、器面の荒れにより詳細はつかめない。16は断面三角形の突帯を貼り付けられた頸部片、17は肩部片で破片の上端外面は頸部突帯の剥離面である。やや華奢なつくりで、突帯は中窪みの細く薄い台形状、その下位には透かし孔が僅かに確認できる。

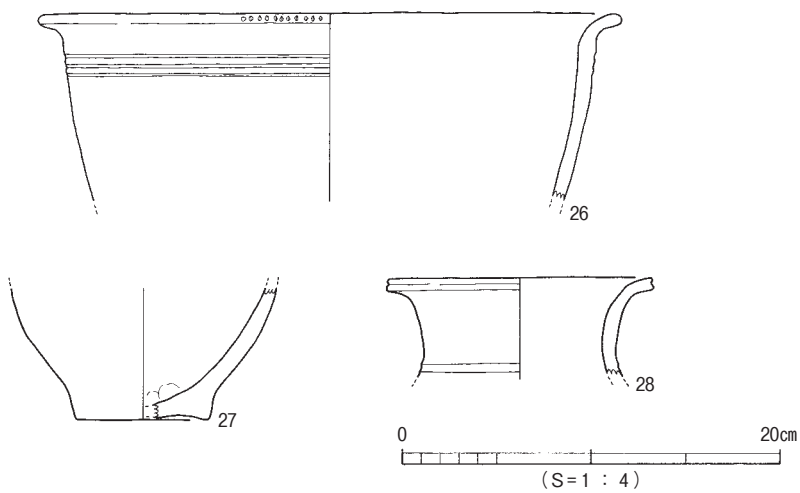
18～22は体部、23～25は基底部あるいはその直近の片である。最下段の突帯はいずれも低平で、非常に薄い粘土帯を粗雑に貼り付けただけのものとなっている。最下段に透かし孔はなく、外面調整は23、25のような縦もしくは斜め方向のハケ目によるものと、24のようなナデによるものがある。基底面が平坦な面をなしているところからすると最終的に削り取って成形したものと思われる。基底面全体が遺存している25でみてみると基底面全体でバランスよく接地している。

これらを総合すると、当古墳の円筒埴輪は３条突帯４段構成で、突帯間の２段の部分に対向２ヶ所の円（楕円）孔を配置するのが基本的な形態と考えられる。

弥生土器

甕（26）　復元口径30.8㎝の口縁部折り曲げによるものである。丸く仕上げた口端部に軽い刻み目を施す。頸部直下には３本のヘラ描沈線が巡る。胎土には多量の砂礫が含まれている。

壺（27・28）　27は僅かな窪み底の底部、28は頸部に削り出し突帯を持つ口頸部である。筒状の頸部から外反して開いた口縁部は外側に面を持ち、端面に１条の沈線が巡る。頸部には薄い突帯を削り出し、この突帯上に施された沈線が２条まで確認できる。上述の甕とともに、これらの弥生土器は前期後半のものである。




**第10図　周溝出土遺物（４）**

# 第４節　まとめ

調査では、本墳を含め４基の円墳の存在を確認した。これらのうちには1977（昭和52）年の分布調査により既に確認済みの堀江大谷古墳群の一部に該当するものが存在すると思われる。今回、鉄塔用地にあたる部分についての発掘調査を行ったところ、墳丘盛土は既に削平され遺存しておらず、また主体部やその痕跡は調査された範囲では検出することができなかった。検出されたのは古墳北東側の周溝で、これにより墳丘径10～12m程度の円墳であることが確認された。周溝からの出土遺物には須恵器・埴輪がある。須恵器によると５世紀末頃の特徴を備えたものであった。埴輪には円筒・朝顔があり、調査された範囲では形象埴輪は認められなかった。埴輪の特徴をみると、円筒埴輪では山内編年の円筒６類に、朝顔形埴輪は朝顔３類に属するもので須恵器の年代観と整合するものである。

さて、冒頭でも述べたように同丘陵上における近隣の調査には、南西およそ100m、標高23mの丘陵麓近くでの福角古墳の調査がある。調査では横穴式石室床面付近の痕跡と須恵器や馬具、工具などの鉄製品が出土しているが、墳丘形態・規模等は不明である。出土した須恵器には５世紀末～７世紀初頭のものがあり、遅くとも６世紀初頭には築造され、７世紀初頭まで追葬期間があったと考えられている。本墳はこれを遡る５世紀末段階のものである。当平野では遅くとも５世紀末には横穴式石室

が導入されているので、福角古墳に先んじてやや高所に築造された横穴式石室墳ということもあり得る。出土遺物の様相からすると単葬であったものと思われる。しかし、５世紀末段階での横穴式石室は、平野でも数基しか確認されていないということからすると可能性はそれほど高いものではない。松山平野でのこの時期の群集墳を取り上げると、代表的なものとして、石風呂町所在の鶴が峠古墳群がある。本古墳群同様、海岸線近くの低丘陵稜線上に存在する円墳群で、複数の丘陵支線上で17基の該期の古墳が調査された。その多くは、切りあうことなく稜線上に連続して営まれた円墳群であるが、盛土や主体部の検出はなく、地山面に掘り込まれた周溝とその埋土中の須恵器や埴輪類の検出のみであった。また、これらの古墳が集中する丘陵尾根を下った低い位置、あるいは隔絶した高所に６～７世紀代の横穴式石室墳が営まれていた。立地も似かよっているところから、本古墳群もこれと同様の例であるかもしれない。鶴が峠古墳群の該期の墳丘に伴う主体部としては、単葬で痕跡の残りにくい木棺直葬あるいは箱式石棺もしくは小さな竪穴式石室といったところが考えられている。本古墳群の場合、分布調査で主体部が確認されたものでは、箱式石棺と６世紀以降と考えられる横穴式石室が数としては拮抗している。このような状況から、本墳および周辺で確認されている墳丘に伴う主体部としては同段階の箱式石棺を想定しておくのが適当ではないかと思われる。

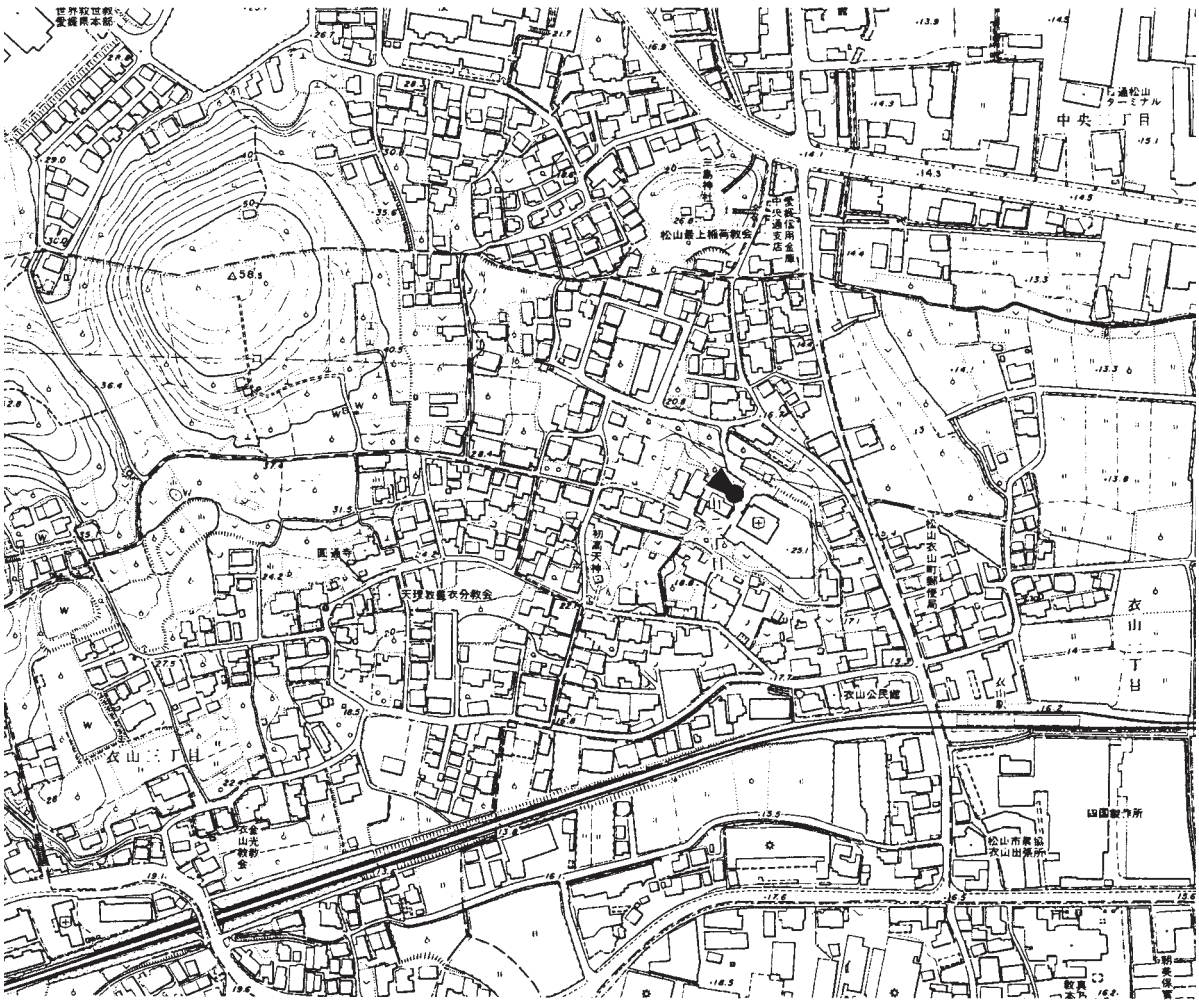
## 文　献

岡野　保　『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会 1980
『愛媛県内古墳－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1991
山内英樹　「伊予の埴輪編年」『紀要愛媛第８号』愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008
栗田茂敏　『鶴が峠遺跡Ⅰ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2007
栗田茂敏　『鶴が峠遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2008
阪本安光　『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会 1979
森　光晴　「東野お茶屋台古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
吉岡和哉　『東野お茶屋台遺跡６次調査地』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2006
西尾幸則　「畑寺竹ケ谷古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986

# 第３章　永塚古墳

## 第１節　調査に至る経緯

永塚古墳は、松山市衣山２丁目の低丘陵上に所在する前方後円墳である。古墳は、最高所で標高58ｍを測る丘陵から東に伸びる緩斜面の突端、標高30ｍ付近に立地しており、丘陵全体が周知の埋蔵文化財包蔵地「№.２　永塚古墳」に指定されている。古墳としてのその存在は古くより知られていたが、第２次世界大戦中の防空壕による主体部の破壊を伴う墳丘掘削や、その後の畑地としての開墾といった要因により荒廃の一途をたどっていた。その双丘状を呈する墳丘の現況から前方後円形の墳形もある程度推定はされていたが、これを確実なものとしたのが、十亀幸雄氏を中心として実施された遺跡発行会による測量調査である。その成果は、1982（昭和57）年の「遺跡 第22号」誌上に略報として掲載されており、採集された須恵器や埴輪片から６世紀後半の年代を推定されている。




**第11図　永塚古墳の位置**（Ｓ＝１：25,000）

1984（昭和59）年９月、この古墳の墳丘が残存する民有地における住宅建設に伴う造成計画が持ち上がり、墳丘部分175㎡についての周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等に関する届出が松山市教育委員会文化教育課に提出された。現地保存のための協議が何度か持たれたが、最終的に保存は困難との結論に至ったため、発掘調査を実施し記録保存することとなった。当初の申請は、墳丘遺存部分のみの175㎡となっていたが、調査が進むにしたがい周囲に濠状の遺構が存在し、この部分に埴輪をはじめ古墳に関わる遺物が認められたため、拡張掘削・トレンチ等、古墳の全容把握のための可能な範囲での調査を行った。その結果、最終的な調査面積は660㎡ということになった。

## 第２節　調査組織

| | | |
|---|---|---|
| 松山市教育委員会 | 教 育 長 | 西原多喜男 |
| 文化教育課 | 課　　長 | 秀野　静章 |
| | 課長補佐 | 坪内　晃幸 |
| | | 岸　　郁男 |
| | 第二係長 | 大西　輝昭 |
| | 主　　任 | 西尾　幸則 |
| | 調 査 員 | 松村　　淳 |
| | | 栗田　茂敏 |

調 査 地　愛媛県松山市衣山二丁目529番１、531番２
調査期間　1985（昭和60）年１月８日～1985（昭和60）年２月６日
調査面積　660㎡

## 第３節　遺構と遺物

### （１）墳 丘（第12・13図）

#### ａ．現 況

墳丘の現況は、耕作や造成による破壊により四周を段状にカットされ、取り残された残丘のような状況となっている。段カットは北東側の果樹園を除いた部分で特に著しく、残丘法面にはカットされた地山が露出し、これを囲む平坦面もほぼ地山露出の状態であった。現状では南東から北西に連なる長さ20～23mの双丘状を呈しており、この状態で前方後円形の墳丘形状となる可能性が高いことは推察できた。過去の測量調査でも前方後円墳と認定されていることは冒頭でも述べたとおりである。この際の報告では、全長22m、後円部直径12m、同高2.3m、前方部長10m、幅６m、同高1.6m、主軸方位北40°西と現況の規模・形状を反映し、前方部の狭長な形態とされた。残丘上での傾斜の変換点を墳端とし、そのレベルラインでの後円部を復元した結果である。主体部の存在する後円部は、第二次世界大戦中に掘削された防空壕や造成による破壊が著しく、主体部石室の側壁と床面の一部が僅かに残存して露出しているような状況である。

第12図　調査前墳丘コンターとトレンチの配置

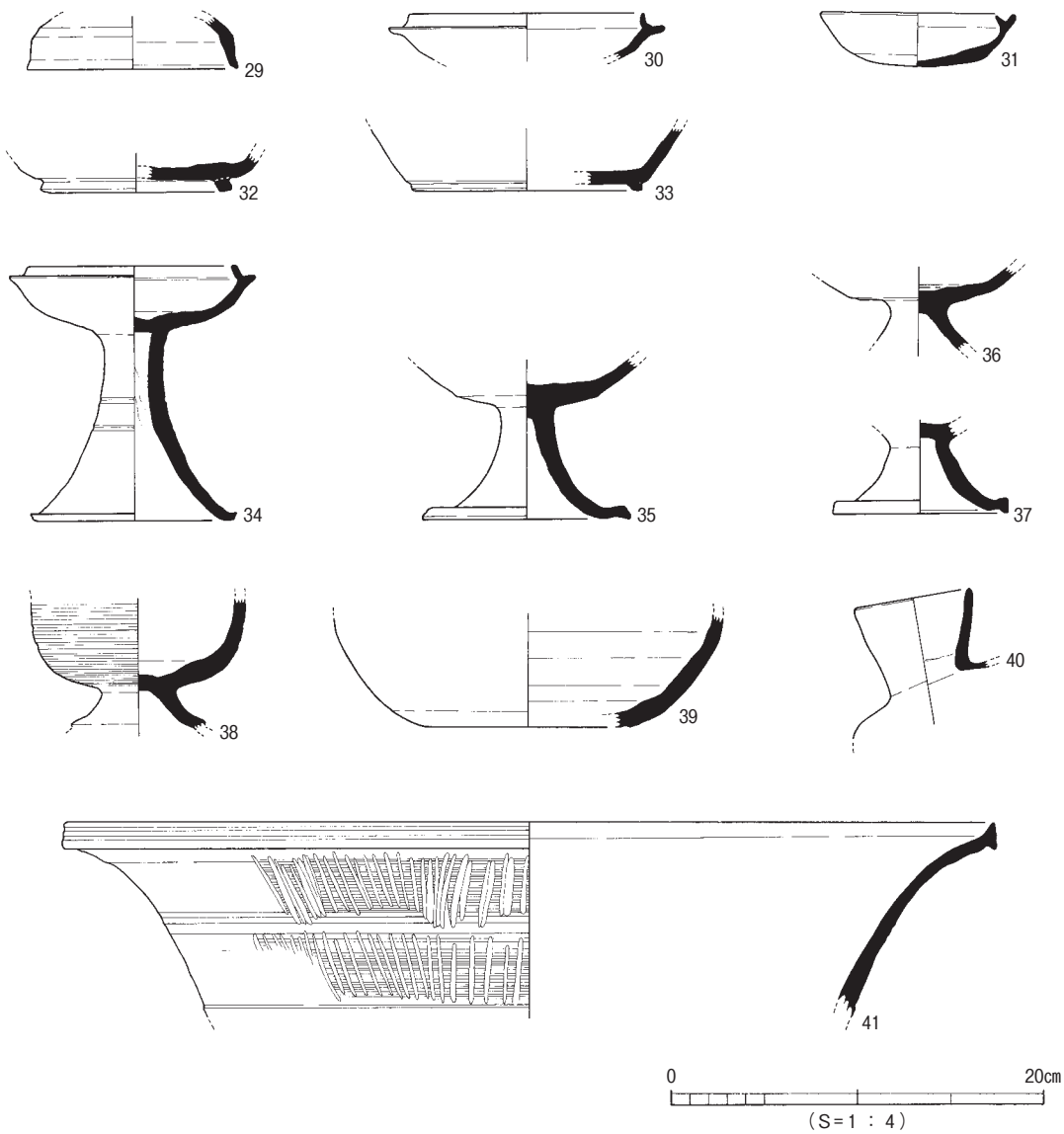
第13図　ＳＸ１・２検出状況

### b．調査の方法

調査は、墳丘の現況を測量しながら、北東の果樹園、南西の平坦にカットされた部分に第12図のようなトレンチを設定し、遺物や遺構の検出にしたがってこれを拡張するような方法で、まず墳丘が現況の残丘の範囲でおさまるものかどうかを確認するところから初めるとともに、現況コンター測量完了後に墳丘断ち割りをかけて行っている。最終的な調査区の形状は、北東側は果樹園の植栽に規制されたため第13図のように、南西側はほぼ地山露出であったため全面精査に近い状況になった。

### c．南西側くびれ部地山整形痕ＳＸ１

南西側の平坦面を精査したところ、残丘南東端から４ｍ付近で第13図のように弧状に回る掘り込みの肩を検出した。最終的に南側で収束する窪みで、深さは最深部で0.5ｍ程度である。暗褐色のシルトで埋まっており、この層から埴輪や須恵器の出土がみられた。この弧状のラインは残丘のくびれ相当の位置に対応しており、後述する北東側の成形痕とともに本来のくびれを形成していた地山整形痕と判断した。なお基底面近くの暗緑褐色土層から弥生後期の土器が出土しており、この層を掘り下げ




**第14図　ＳＸ１出土遺物（１）**

たところ10基あまりの柱穴の検出があり、これらの弥生遺物に伴う遺構と考えられるが、ＳＸ１下層以外の部分での弥生遺構は確認されなかった。造成により削平されたものであろうか。

### ｄ．ＳＸ１出土遺物（第14～18図）

**須恵器**

坏（29～33）　29は復元口径11.2cmの蓋、天井部と口縁部境に鈍い稜を持ちながら屈曲し、口縁部が外反する。30は復元口径12.4cmの身で、短い立ち上がりと浅めの体部という器型である。31は身・蓋の区別が判然としないが一応身で扱っておく。径8.4cmのきわめて短い立ち上がりは大きく内傾している。底部はヘラ切り未調整。32・33は貼り付け輪高台を持つ底部。33では底体部境に高台が貼り付けられている。

高坏（34～37）　34は長脚の有蓋高坏、坏部立ち上がりの径12.0cm、脚高10.0cm、脚裾径10.6cmを測る。脚部に透かしは持たず、その中位に２条の沈線が巡る。35は坏口縁部を欠く灰白色の甘い焼きのものである。36・37は短脚のもので、37の裾端部形状および焼成は35に似る。

台付椀（38）　台付椀、台裾端部に生きている部分が僅かにある。椀体部に沈線が２条巡っている。

鉢（39）　おそらく鉢になると思われる平底の底部付近の片である。

平瓶（40）　口径6.0cmを測る内湾気味の口頸部片で、端部を丸く収めている。

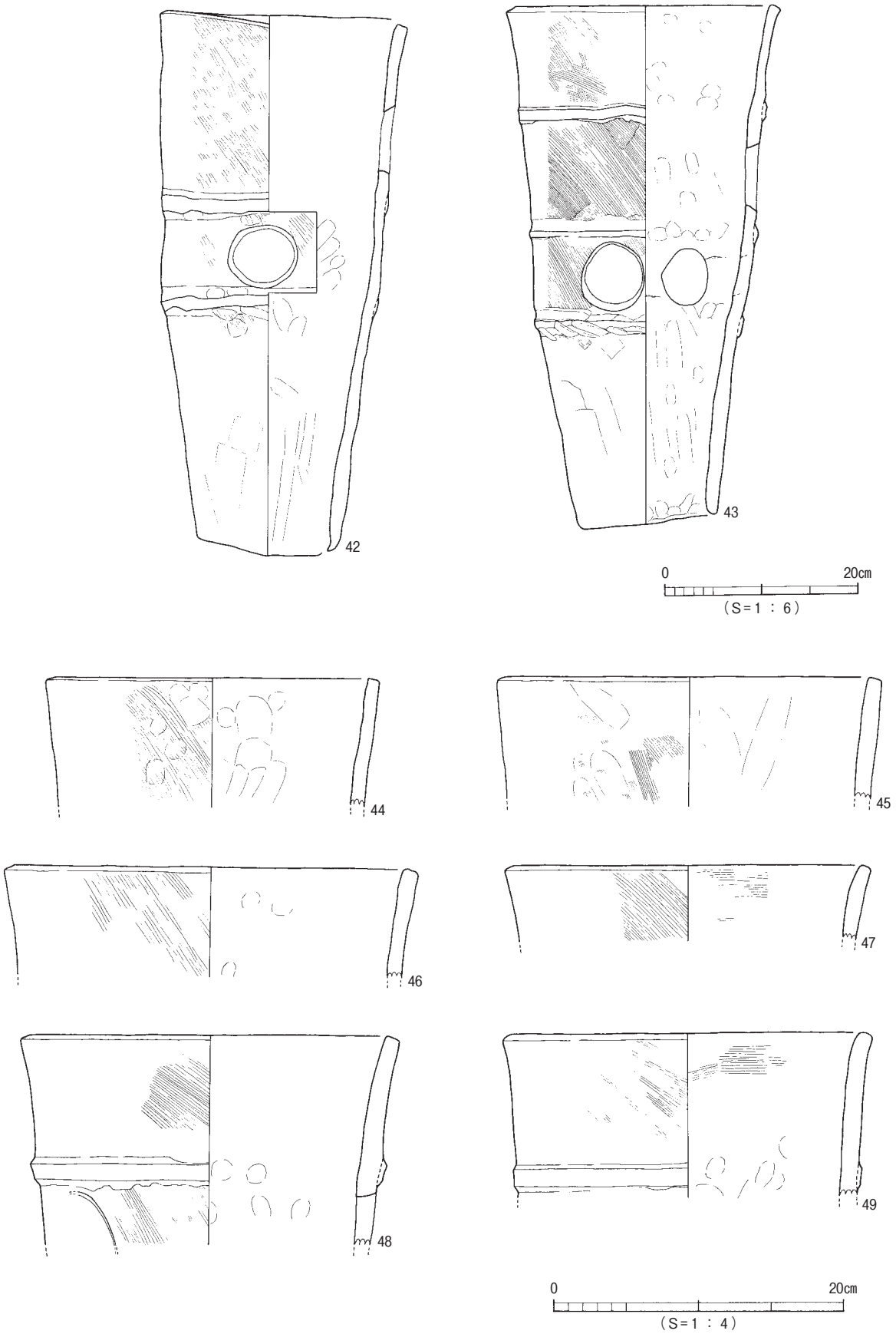
甕（41）　復元口径49.6cmを測る大型甕の口頸部片である。上下に拡張した口端部外面に沈線を２条施す。外面は沈線により３段に区画されているところまでは確認できる。カキ目調整された最上位とその下段は２条の沈線で区画され、区画された部分には縦方向のヘラ描直線文を施文している。２段目と３段目との間には現況で沈線が１条確認できる。

**埴輪**

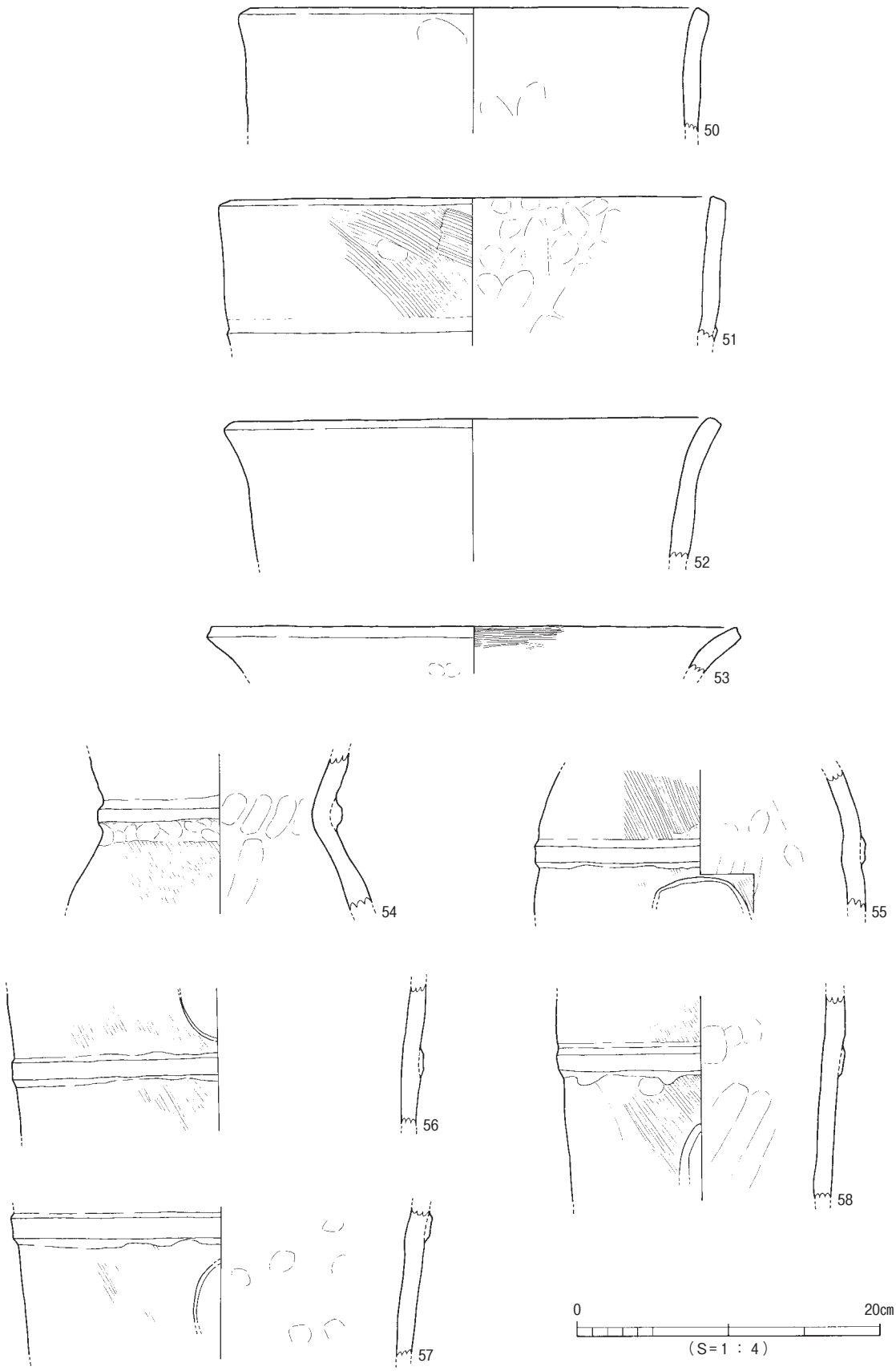
円筒・朝顔形埴輪（42～62）　口縁部等の遺存により円筒と識別できるもの11点、朝顔形と判定できるもの３点がある。円筒埴輪のうち全容が把握できるものには42・43がある。42は器高57.0cm、口径25.9cm、底径13.0cm、ほとんど反りを持たずに外上方に広がる形態である。器高の中位に２条の突帯を貼り付け器体を３段に区画し、最上位と２段目の区画にそれぞれ対向方向に２個の円孔を段ごとに90°ずらせて設けている。突帯は低平な幅広、上位２段の外面を斜めハケ目調整し、最下段外面を板状工具で押圧している。２次調整はみられない。基端部は自重による潰れを修正し、尖り気味に収めている。端部を切り取ったりして高さを調整するようなことは行われていない。43は器高53.8cm、口径26.4cm、底径13.7cm、低平な突帯３条で器体を４区画し、中位の２段に２個ずつの円孔を施している。配置は42と同様である。最下段の突帯貼り付けには部分的に断続ナデの痕跡が残っている。外面調整は42に同じで、基底部調整も同様の板状工具による押圧によっている。44～52の口縁部の突帯形状や外面調整は上記の２点同様であるが、47、49の口端部付近の内面調整にヨコハケが用いられているところが異なるところである。

朝顔形には53～55の３点がある。53は口縁部の小片、内面にヨコハケ調整がみられる。54は頸部片、断面台形の低い突帯を貼り付けられている。55は須恵質に焼成された肩部の片。断面中窪みの低い突帯とその下位に円孔が設けられている。

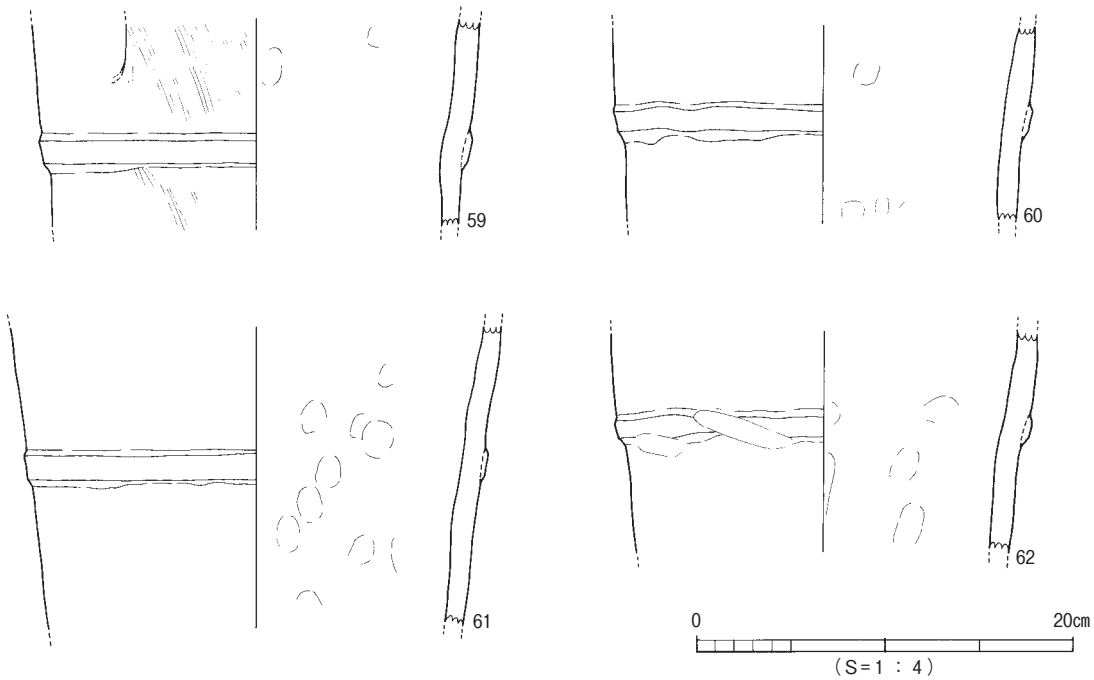
体部片は７点を掲載した。いずれも突帯は低平な台形状断面を呈する。62は最下段の片で、断続ナデによる突帯の貼り付けが行われている。




**第15図　ＳＸ１出土遺物（２）**




**第16図　ＳＸ１出土遺物（３）**



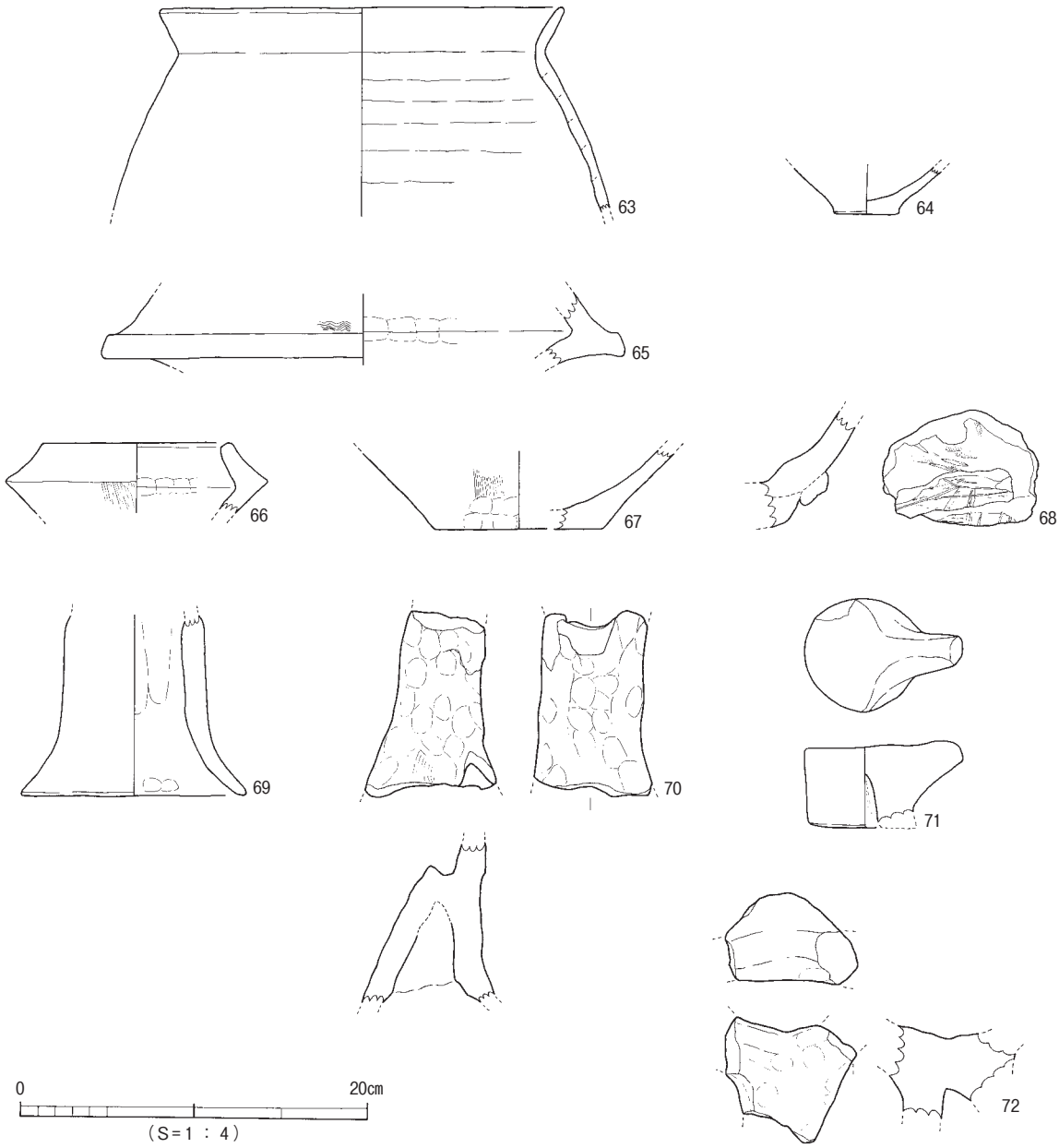

**第17図　ＳＸ１出土遺物（４）**

**弥生土器**

甕（63・64）　63は折り曲げ口縁の上半部片。緩く折り曲げられた口縁部は端部を丸く収める。全体的に器壁は薄く成形されている。器面の荒れのため調整は不詳であるが、内面に輪積みの痕跡が明瞭に観察できる。中期中葉のもの。64はやや突出した平底で後期のものである。

壺（65～68）　65・66は後期の複合口縁の屈曲部片である。65の屈曲部断面はコの字状を呈する。屈曲部以上の外面に櫛描波状文が施されていることがわずかに看取できる。66では屈曲部外面に面を持たず、口縁部は無文である。67は平底の底部、68は外底面が剥離した破片と思われるもので接合のためにヘラによる刻みを持った粘土塊が外面に貼り付いている。

支脚（69～72）　各形態のものが４点ある。69は裾広がりの筒状を呈するもので比較的器壁が薄く仕上げられている。70は裾部のみ中空で、上端受け部の片側に切り欠きがあるもので、受け部が欠損しているため不明だが短い指を持つものと思われる。全体的に指頭痕跡が顕著である。71は底面が部分的に剥離しているが、器高4.8㎝のほぼ完形品である。底部から小指大の穴を器高の中位よりやや上まで空けられた円柱状で、上端の一方に角状突起を持つ。72は２本の指とその背面に突起を持つ形態になるものの破損品である。




**第18図　ＳＸ１出土遺物（５）**

### ｅ．北東側くびれ部地山整形痕ＳＸ２

北東側に設けた調査区のうち５・６区において、やはり残丘のくびれに対応する位置でくびれ状の地山整形痕を検出した。その平面位置は、ほとんど現況残丘のくびれ相当位置と重なっている。このくびれを経て、前方部側に大きく開き、また後円部にかけての３・４区においてはくびれに引き続き円形に巡る様相をみせているので、北東側の調査区で検出された地山の形状は本来の墳丘形状に近い状況を反映しているものと思われる。

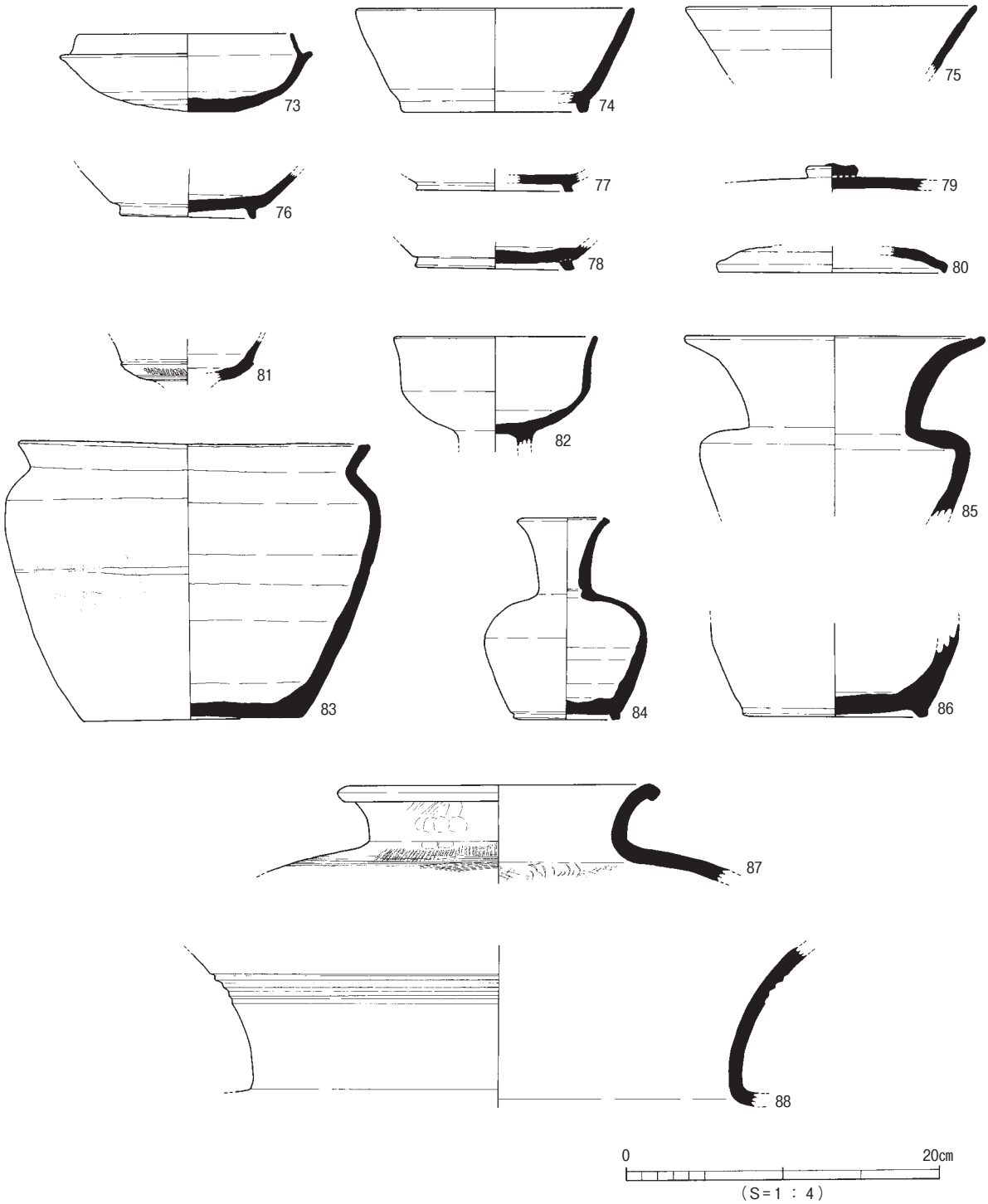
### ｆ．ＳＸ２出土遺物（第19～35図）

**須恵器**

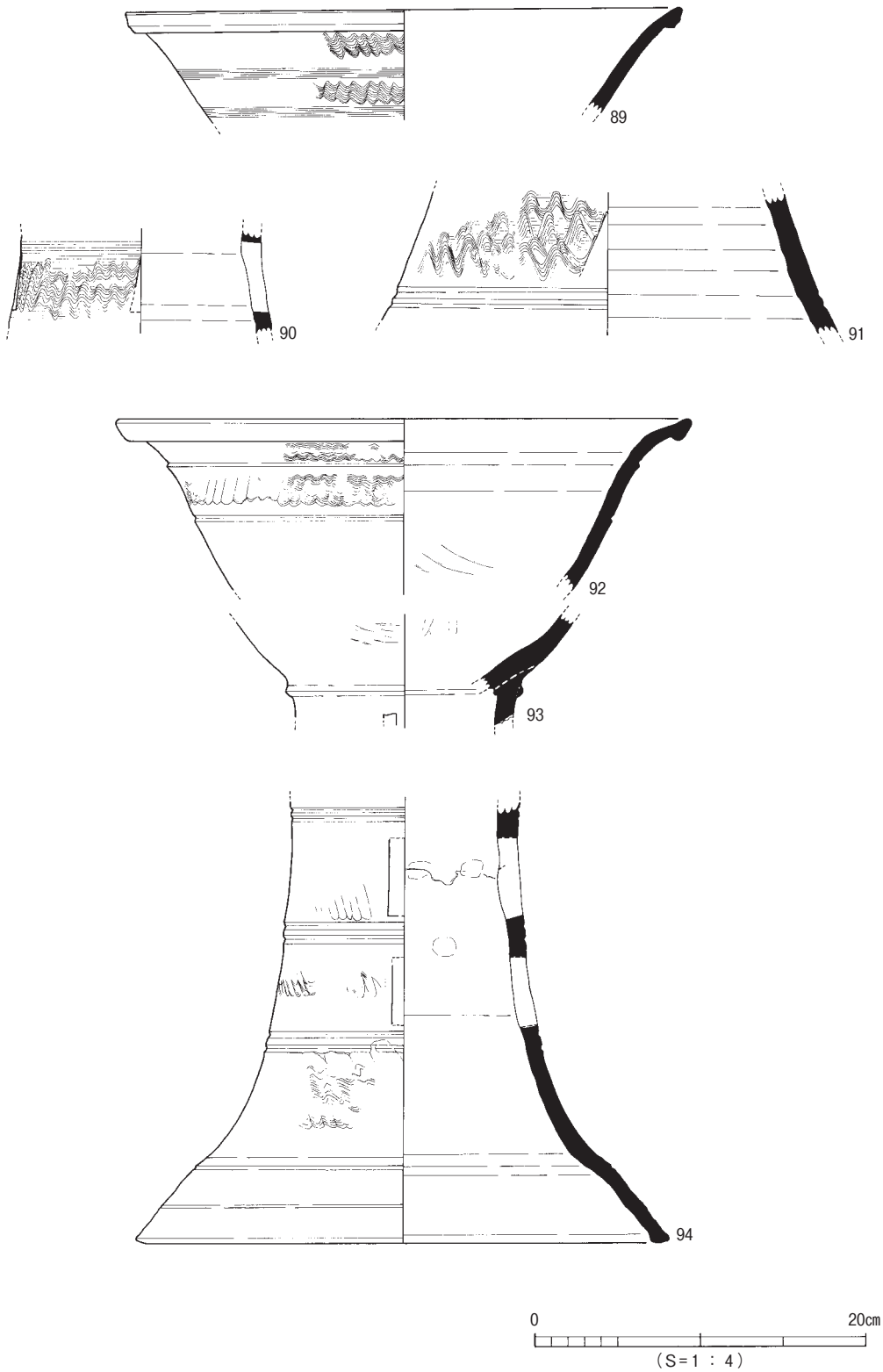
坏（73～80）　73は器高5.0cm、口径13.8cmを測る古墳時代タイプの身である。薄く成形された立ち

上がりが内傾する。底部から体部の２/３程度の範囲を回転ヘラケズリされている。74～78は古代タイプの貼り付け高台を持つ身である。74、77、78の高台は断面方形でしっかりしているのに対し、76はやや焼成も甘く高台も薄いやや華奢なつくりになっている。79・80は蓋、79は扁平な宝珠形つまみを持つ。80の口端部は鈍い稜を持って下方に短く屈曲する。

高坏（81）　坏部の小片で、底部と口縁部境に鋭い稜を持ち、その下位に櫛描列点文を施されている。




**第19図　ＳＸ２出土遺物（１）**




**第20図　ＳＸ２出土遺物（２）**

脚付椀（82）　口縁部が外反して開く形態の椀に脚台を取り付けたもの。

鉢（83）　器高18.0㎝、口径16.9㎝、底径14.1㎝と径の大きい平底になるもので、強めにくびれる頸部から、短い口縁部が開き上端部に面を持って収めている。くすんだ乳白色の焼成である。

壺（84～86）　84は器高13.0㎝、口径5.1㎝を測る小型の長頸瓶で、直径6.2㎝の低い貼り付け高台を持つ。筒状の頸部から口縁部が外上方に開き、口端部は外に傾いた面をなしている。高台は断面方形、底部の外周一杯の部分に貼り付けられている。高台内側の外底面にはヘラ切り離しの痕跡が残っている。自然釉と思われる灰釉が口頸部内外面と底部を除く外面にかかっているが、肩部と口頸部内面には特に厚くオリーブ色にかかっている。底部の内面の口縁部直下の位置にのみ降灰釉の痕跡がある。胎土には長石粒が多く含まれている。85・86は同一個体と思われる広口壺の口縁～胴部と底部付近である。頸部や上胴部に焼け歪みや膨らみ、破裂痕がみられ、最終的には焼成段階で破裂した破損品であったものと思われる。大きく開いた口縁端部内面には１条の浅い凹線が巡っている。

甕（87・88）　87は短い頸部に玉縁状に丸く収めた口端部を持つ口頸部片で、無文のもの。88は大型品で頸部に４条の沈線を持つ。

器台（89～94）　89～91は焼成・施文が似かよった、同一個体と考えられる高坏形の器台である。89は坏部の片、外面を横走するカキ目によって３区画された施文帯に櫛描波状文を描いている。90は脚部上位の片で、89同様カキ目による区画と櫛描波状文がある。確認される透かしは三角形である。脚部片91は裾近くの部位で、２条単位の凹線とその上位の櫛描波状文および、三角形透かしの一部が確認できる。92～94も同一個体と考えられるもので、全体的にオリーブ系の自然釉がかかった焼成となっている。92・93の坏部はやや深め、口縁部が外反して外へ開く。口端部外面に突帯を貼り付けて断面三角形状に肥厚する。外面に凹線１条ずつを施した区画帯を設け、櫛描波状文を描いている。93の坏底部近くの外面はナデ消しが行われているが、外面に格子、内面には当て具痕が残っている。坏底部と脚部の境には断面蒲鉾形の細い突帯が１条巡る。94は脚部で、裾近くには１条ずつの凹線で２区画に、それ以上の部位には２条単位の凹線を用いて４区画まで区画していることが確認できる。裾近くの２区画を除いた柱部の３区画には櫛描波状文を施している。柱部最上位の区画施文は不明だが、この区画と波状文区画帯のうちの２区画に長方形透かしがあることが確認できる。

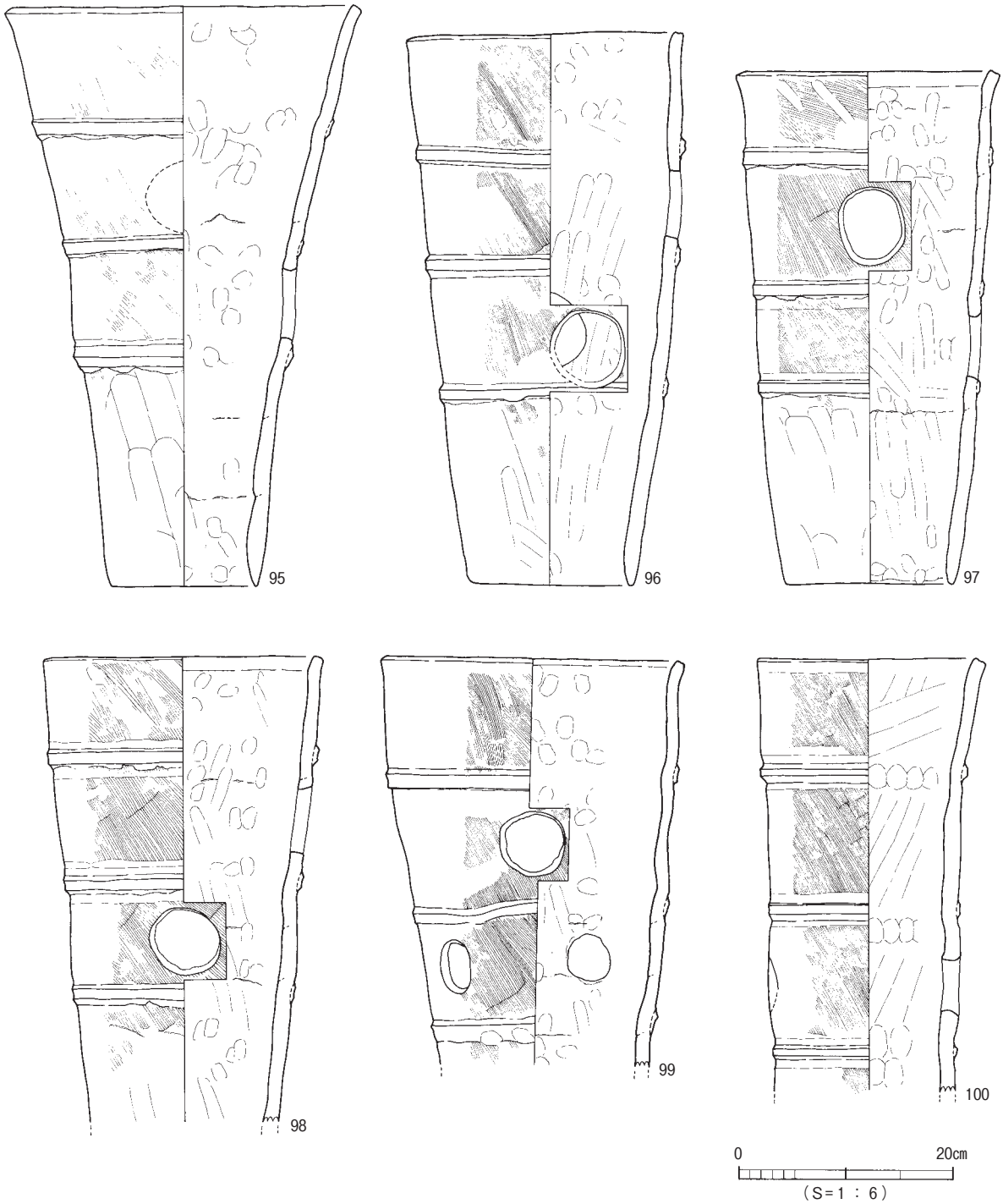
**埴輪**

円筒・朝顔形埴輪（95～202）　口縁部の遺存で円筒と確定できるものは95～126までの32点、口縁部や頸部形態で朝顔形と判別できるものは127～136の10点、その他は体部、底部の片でいずれとも特定できないものである。

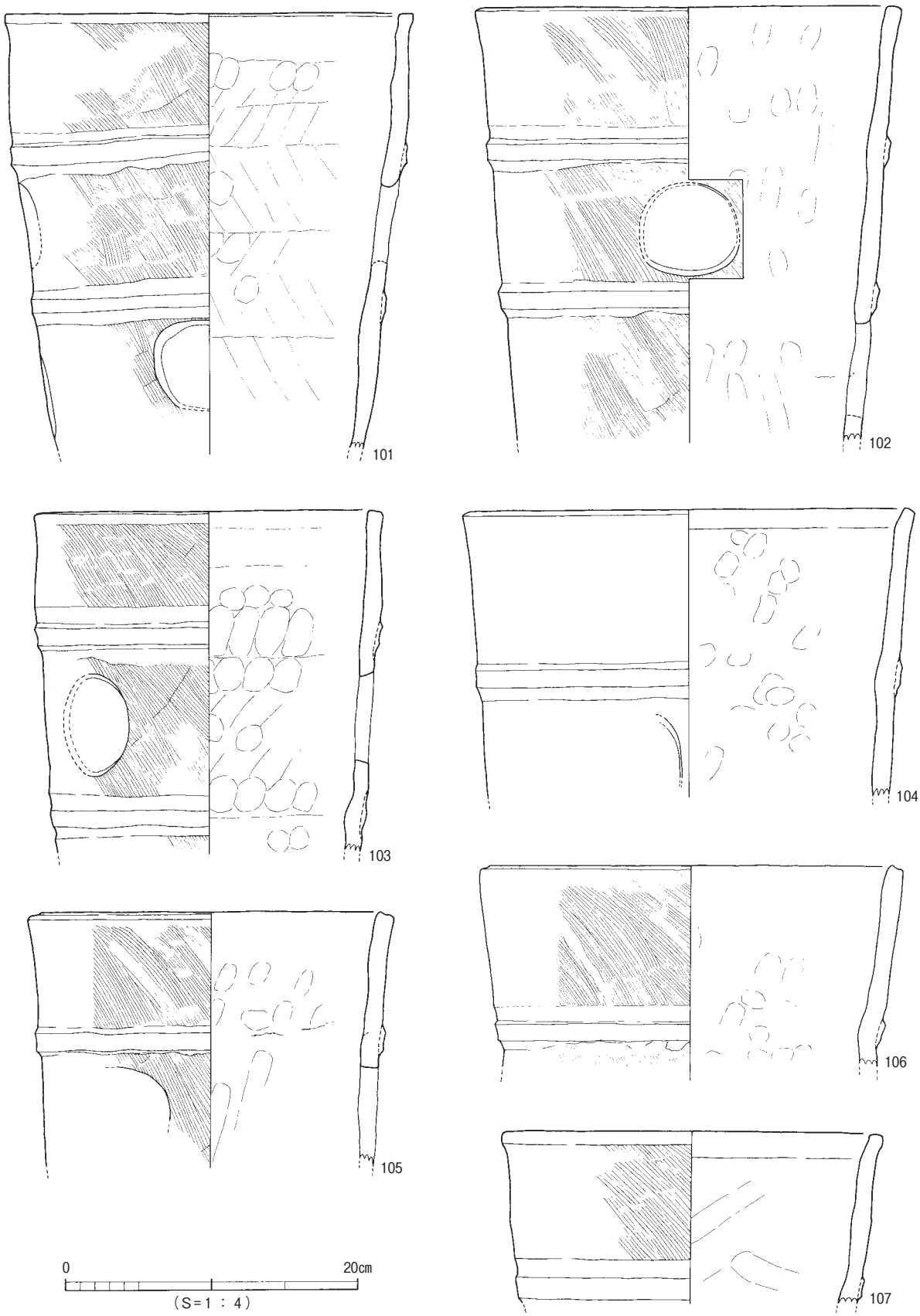
円筒埴輪のうち口縁部から底部までの復元可能な個体は95～97の３点で、順に器高54.3㎝、51.1㎝、47.8㎝とやや大きさにバラツキがある。器型も95のように口縁部が大きく開く形態のものと96・97のようにあまり大きく開かない形態のものがあるが、その他の円筒埴輪片の形態をみてみると、むしろ95のように開くものが若干特異な形態であると思われる。いずれにしても開きの大小にかかわらず口縁部は大きくは外反せず、体部から口縁部まで直線的に開くのが基本で、口端部は上方を向いた平坦な面をなしている。突帯は低平な蒲鉾形もしくは僅かな中窪みのM字状をなすものが多く、突帯３条の４区画構成が基本である。96の突帯にはヨコナデに用いられた布目の痕跡が部分的に確認できる。透かしは円形で、口縁部から２段目、３段目のそれぞれ対向する２ヶ所に直交配置で設けられている。これらからみると、南側周溝出土の42のような突帯２条３段構成のようなものは例外的な形態といえる。外面の調整

は最下段を除いて斜め方向のハケメ、口縁部を軽くヨコナデすることもある。１次調整のみで２次調整は行われない。最下段の突帯に断続ナデのような痕跡を残したものはない。最下段基底部外面には板状工具によるナデもしくは圧痕を残すものが多く、底部下端の自重による潰れを外面板押圧、内面指オサエで修正して端部が尖るものと、面を持つものがあるが、端部は切り取ったようには整っていない。

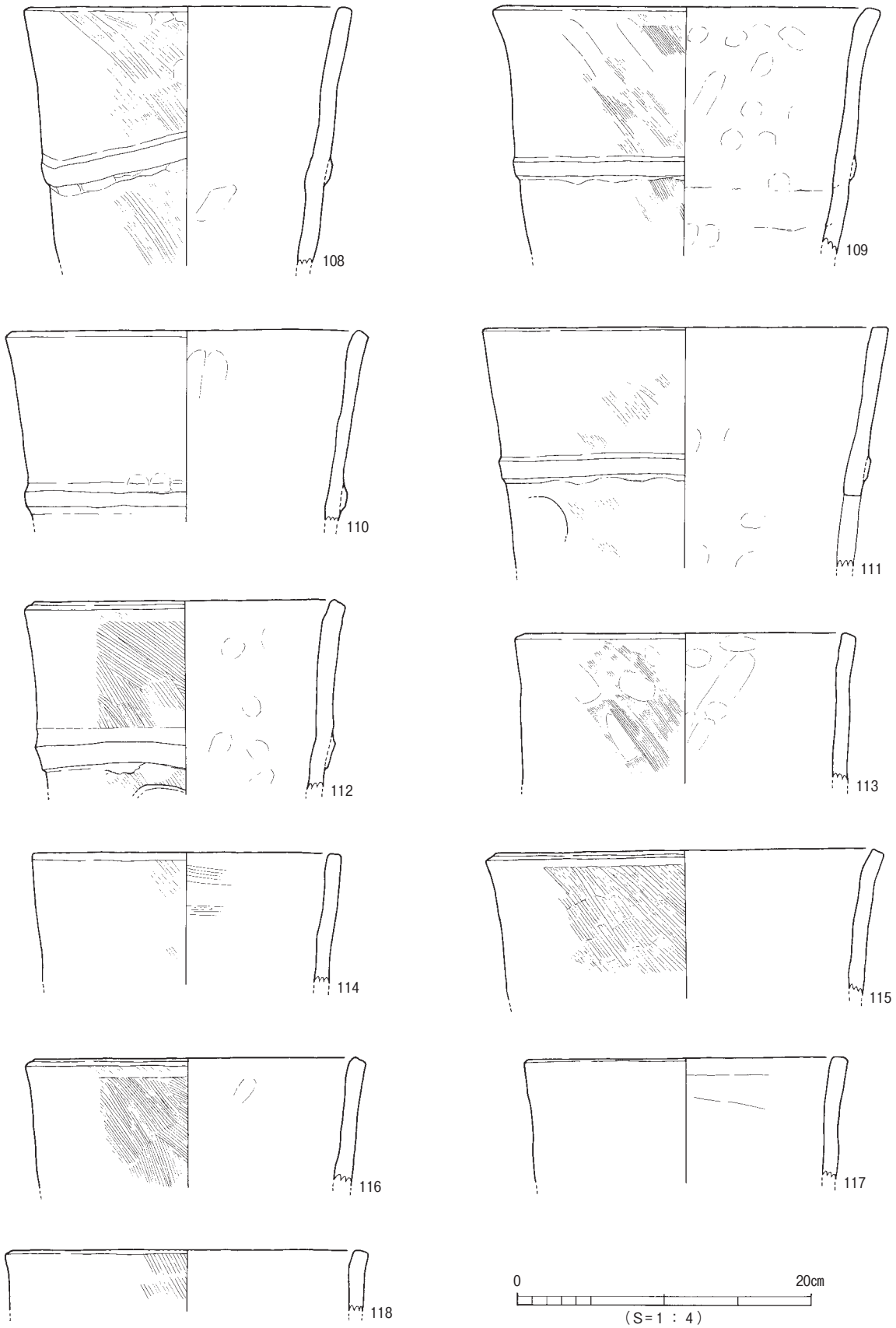
朝顔形埴輪には口縁部の片131～133と頸部から肩部の片134～136がある。頸部突帯は扁平な蒲鉾形で、比較的肩部が長く張りは弱い形態のものである。



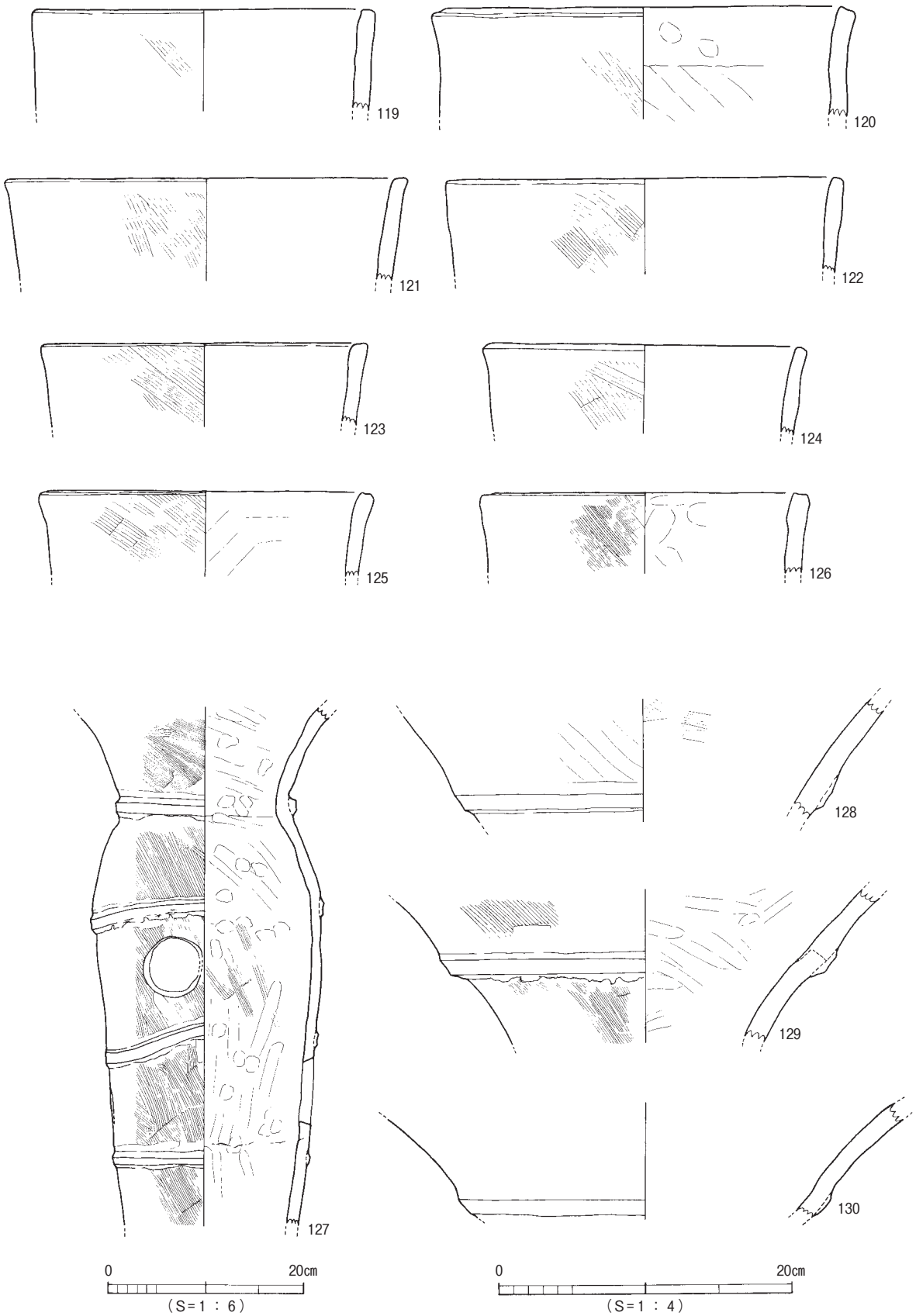

**第21図　ＳＸ２出土遺物（３）**



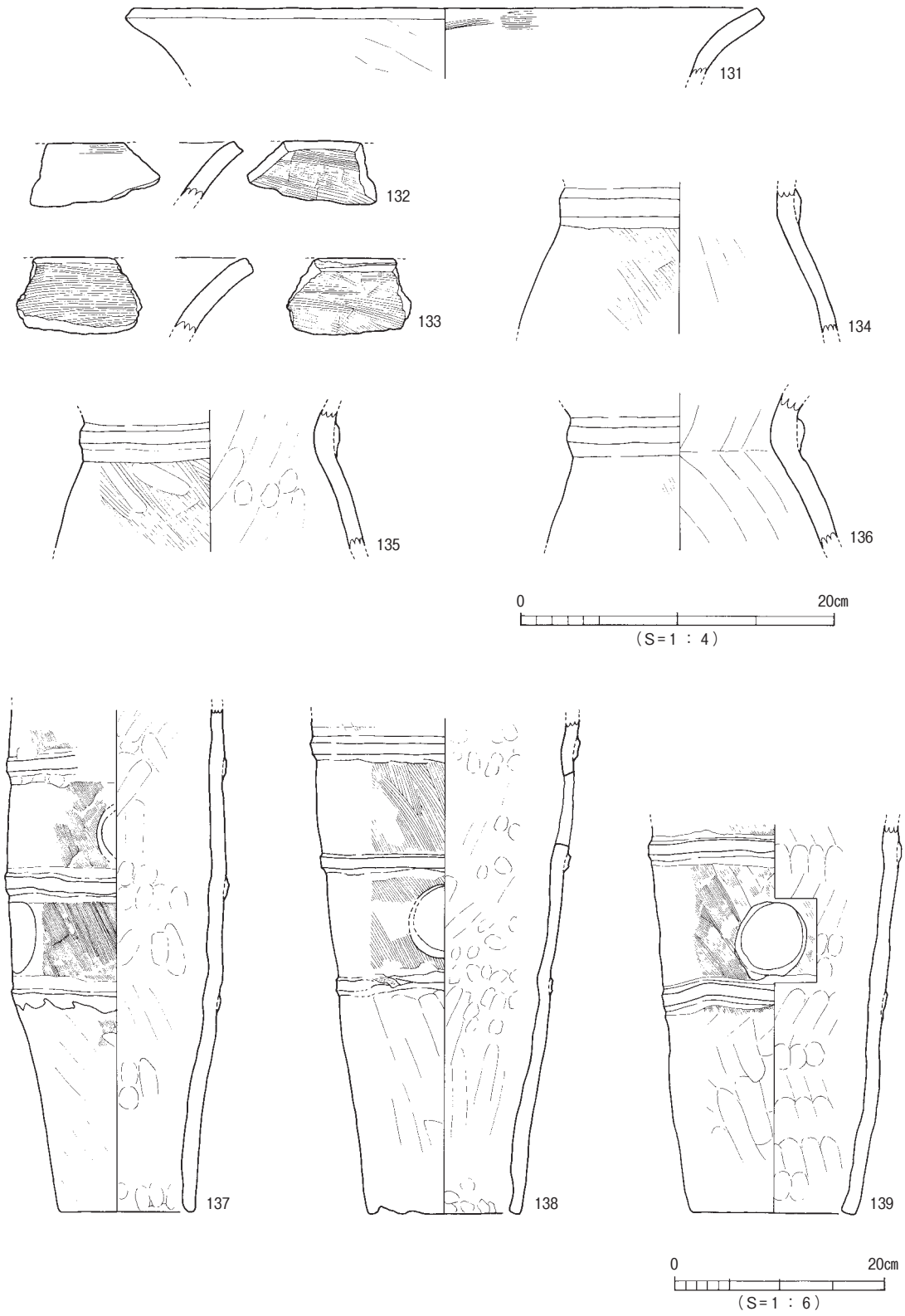

**第22図　ＳＸ２出土遺物（４）**



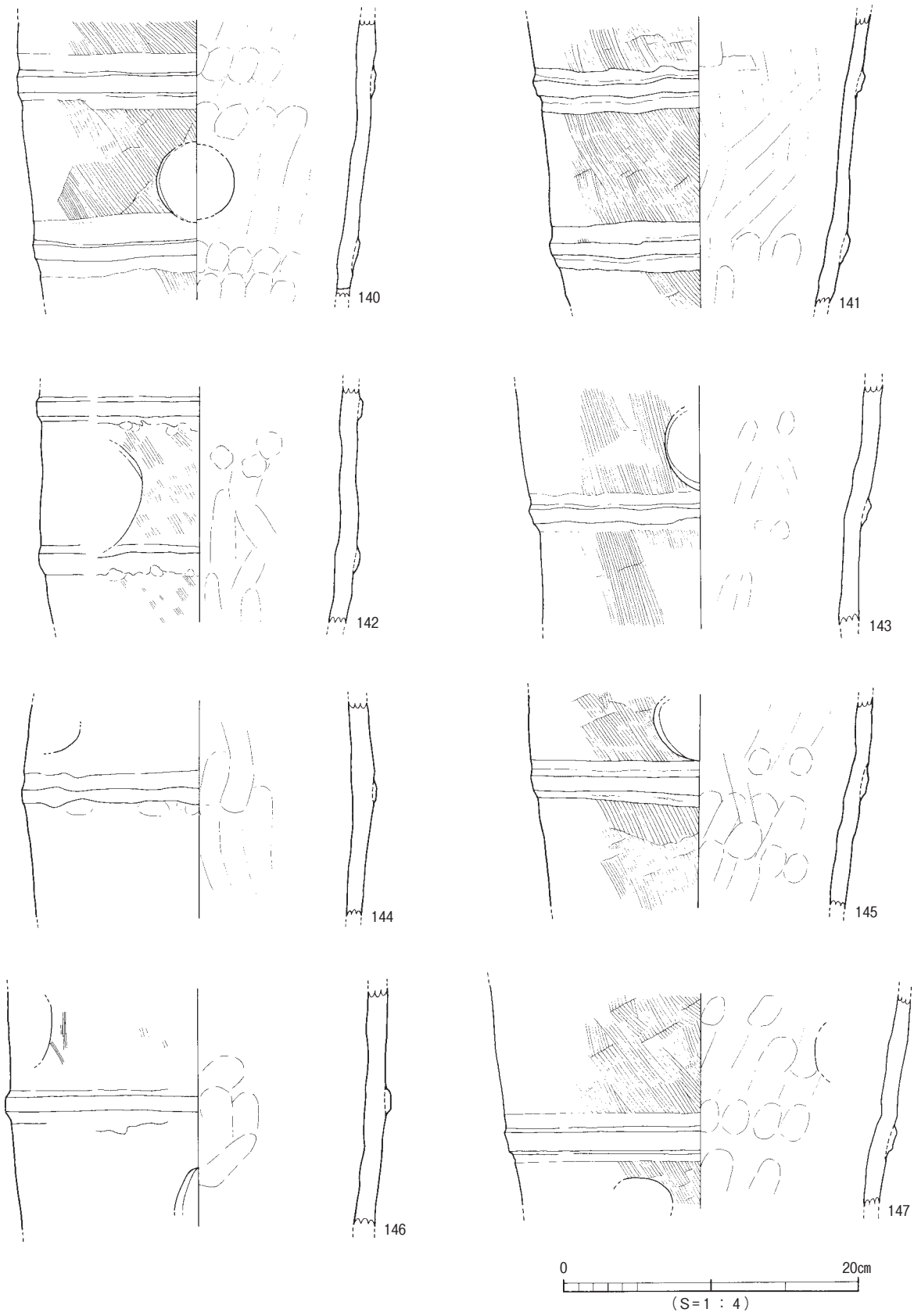

**第23図　ＳＸ２出土遺物（５）**



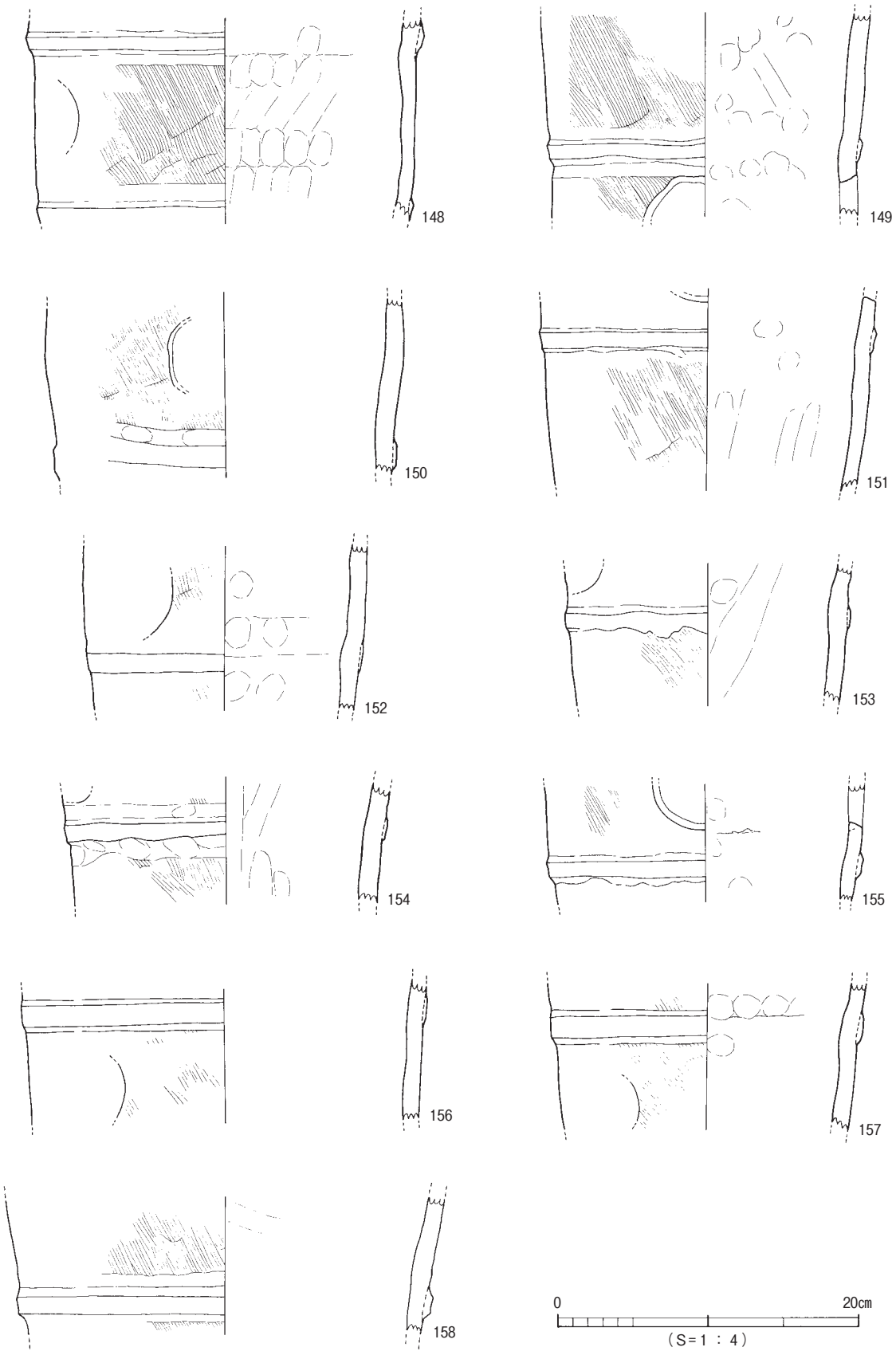

**第24図　ＳＸ２出土遺物（６）**



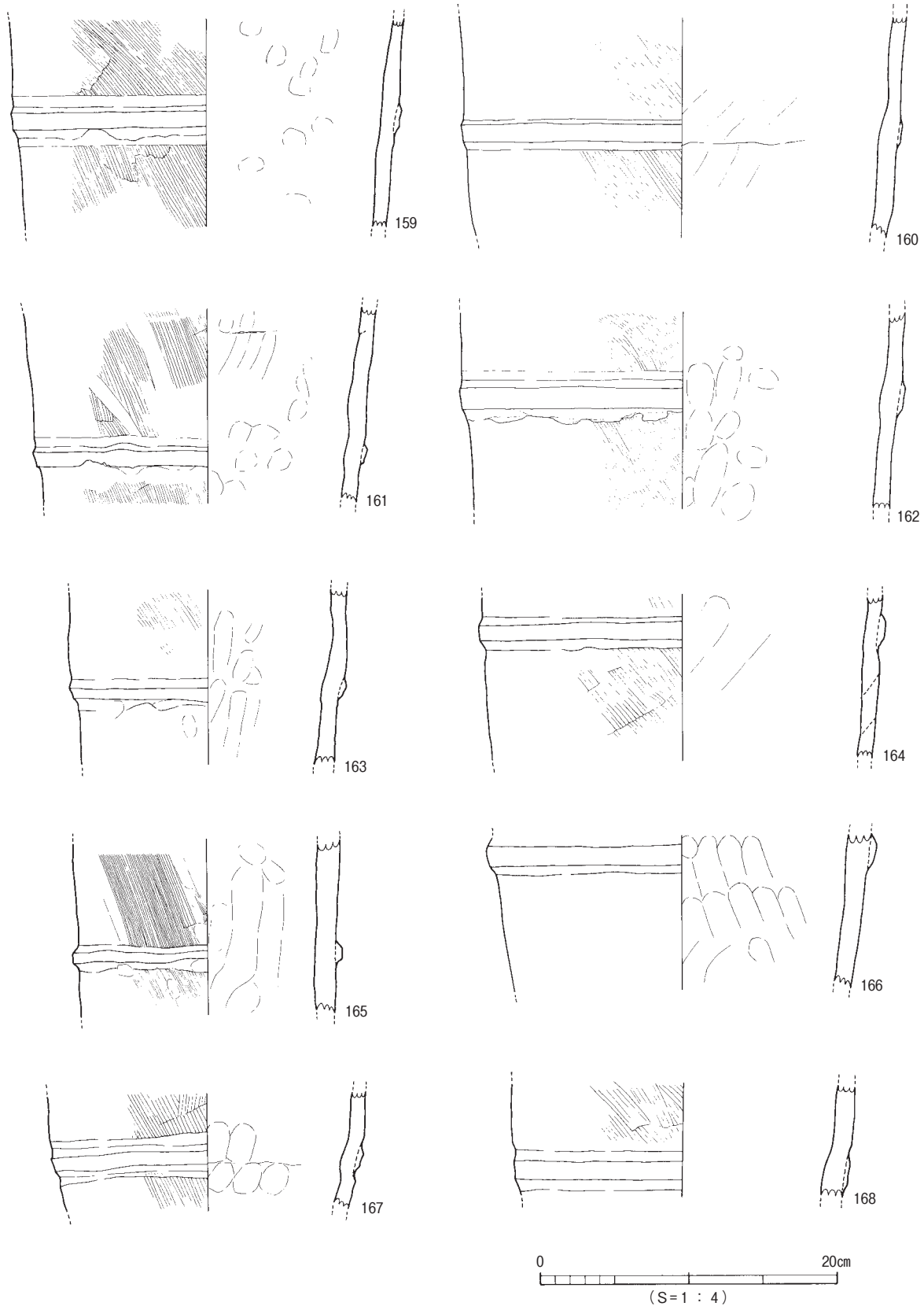

**第25図　ＳＸ２出土遺物（７）**



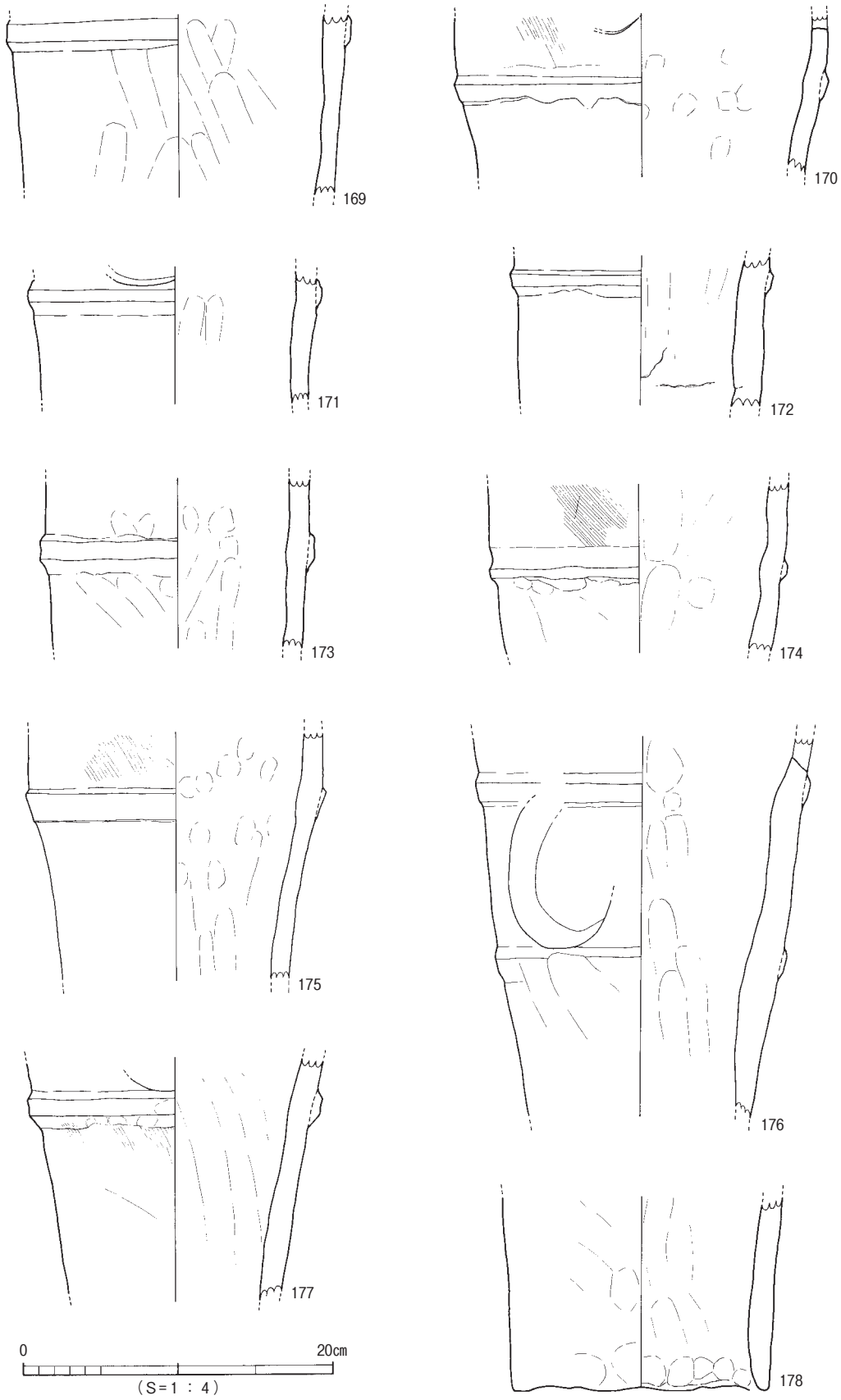

**第26図　ＳＸ２出土遺物（８）**




**第27図　ＳＸ２出土遺物（９）**

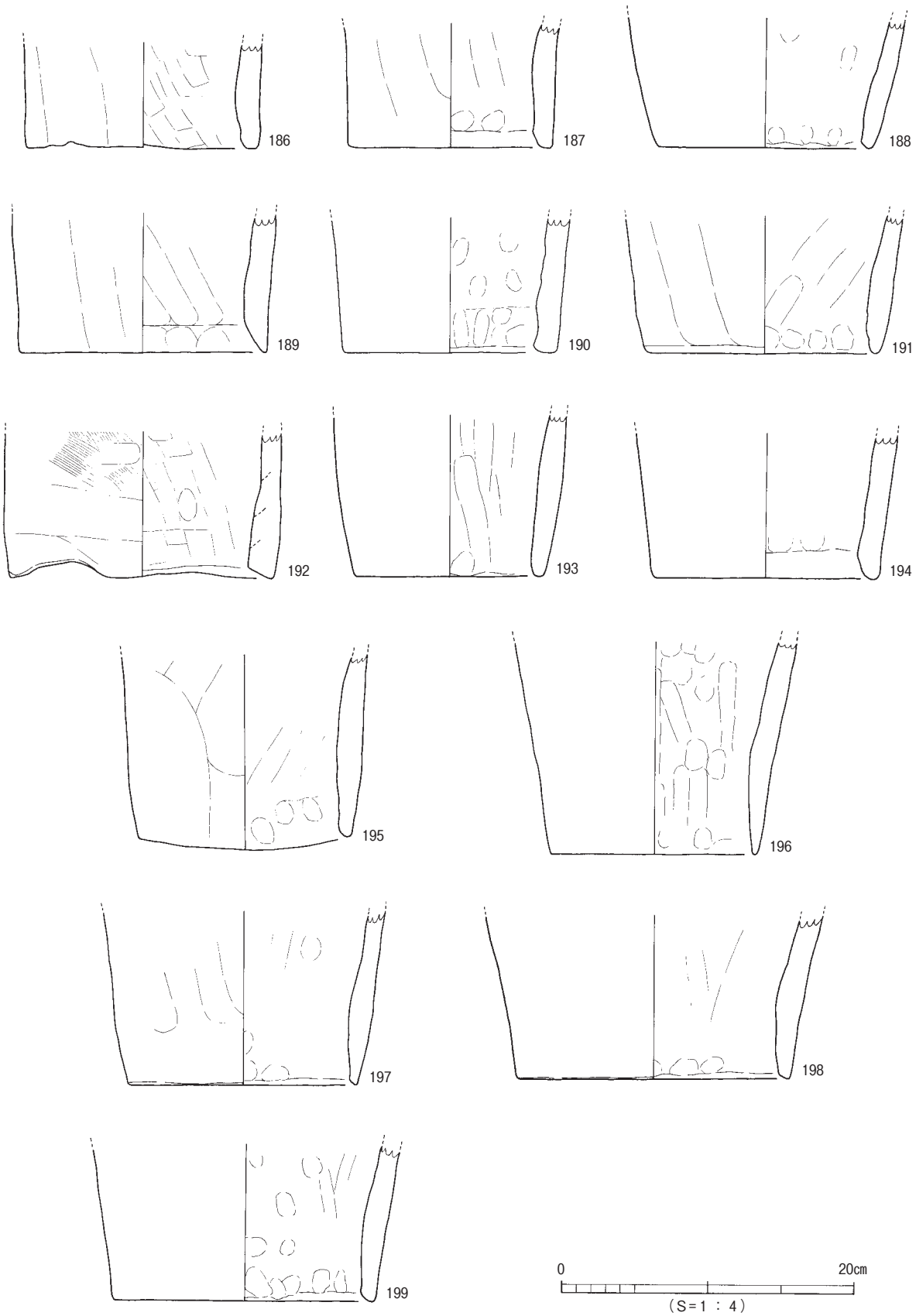



**第28図　ＳＸ２出土遺物（10）**




**第29図　ＳＸ２出土遺物（11）**

**第30図　ＳＸ２出土遺物（12）**

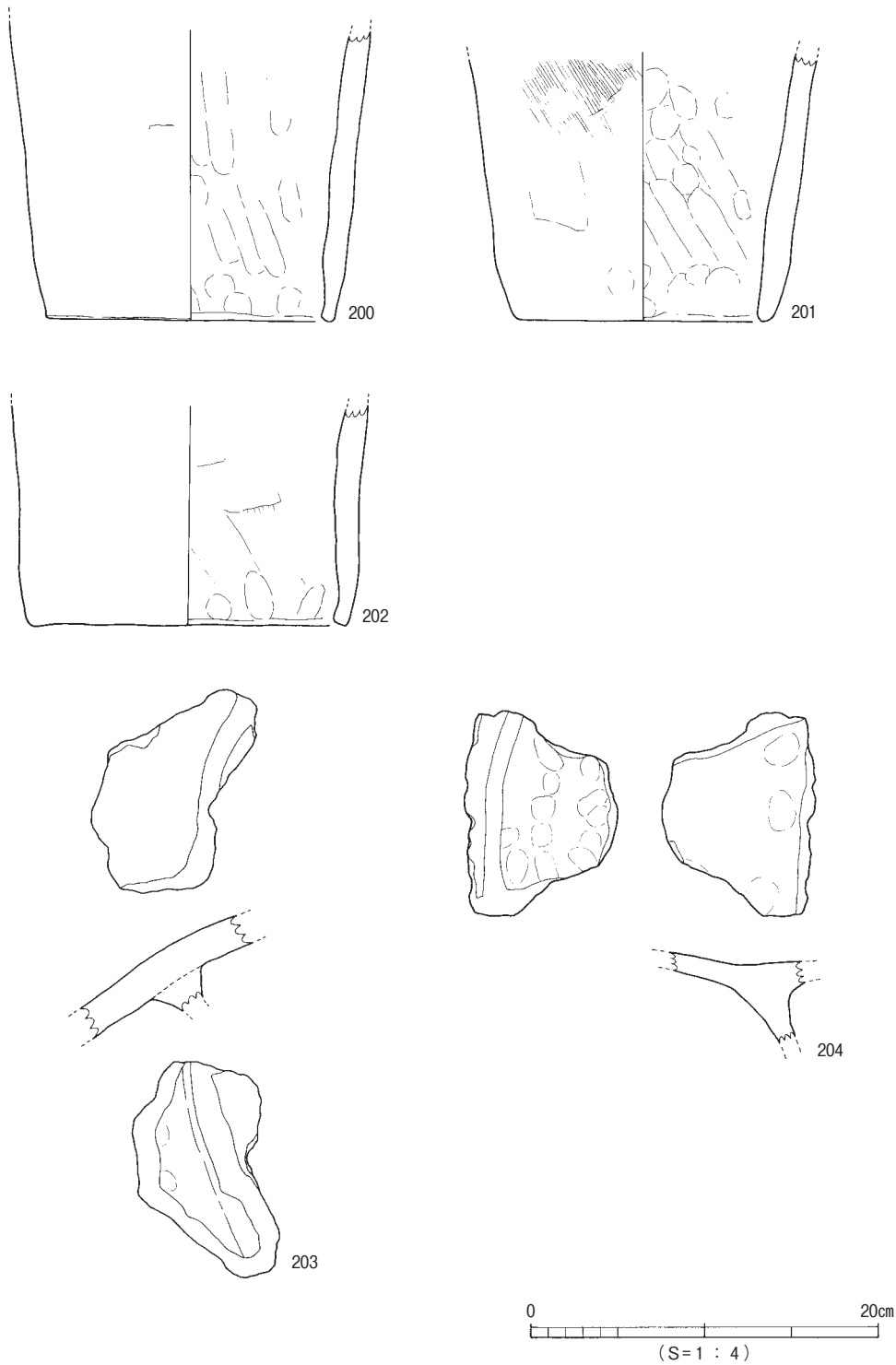



**第31図　ＳＸ２出土遺物（13）**

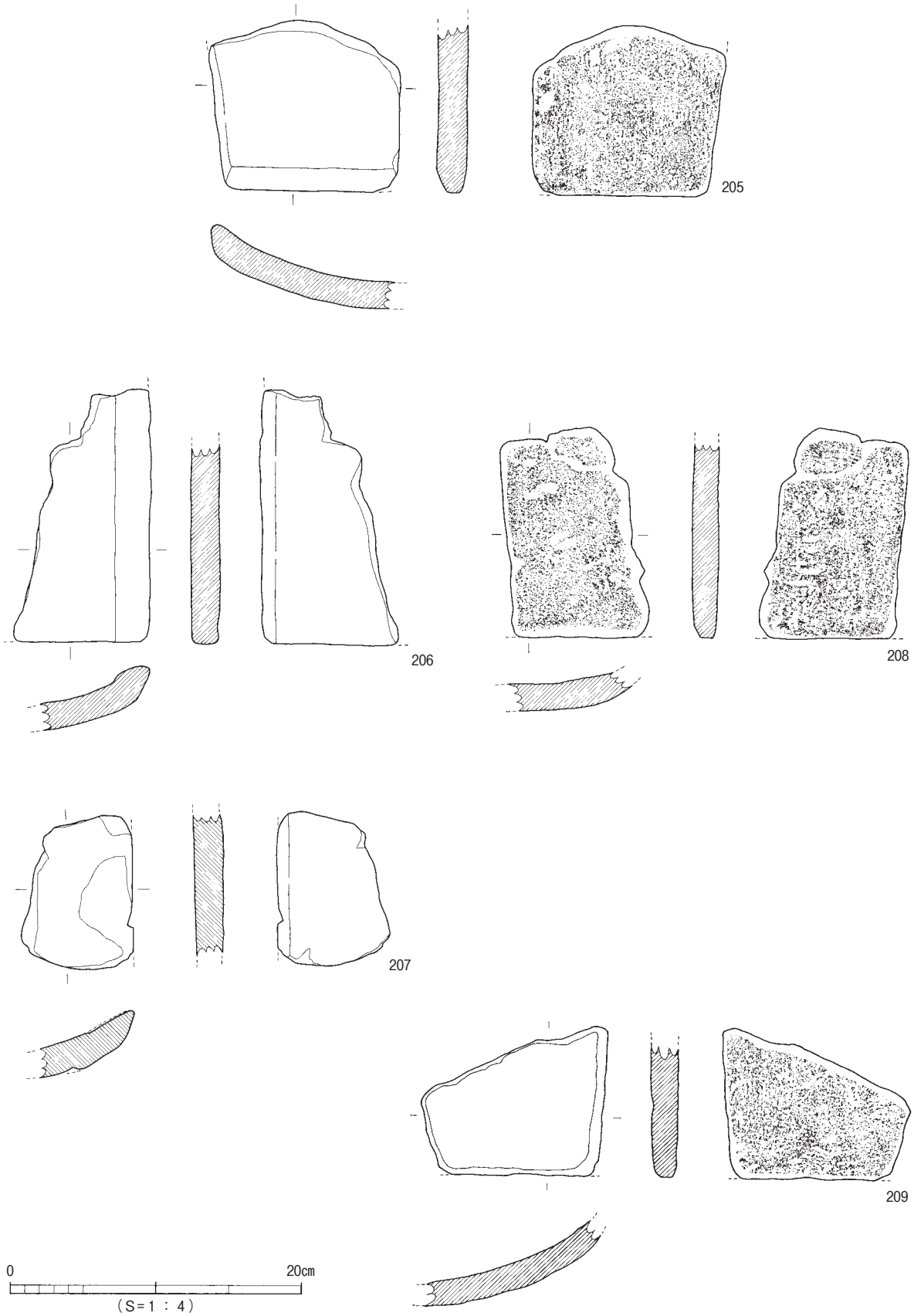
形象埴輪（203・204） 203は盾かとも思われるが、円筒剥離部のアールや笠部と考えられる上面の丸みを帯びた形状から蓋と判断した。笠部は無文である。204は無文の盾、円筒との接合部片である。

**瓦**

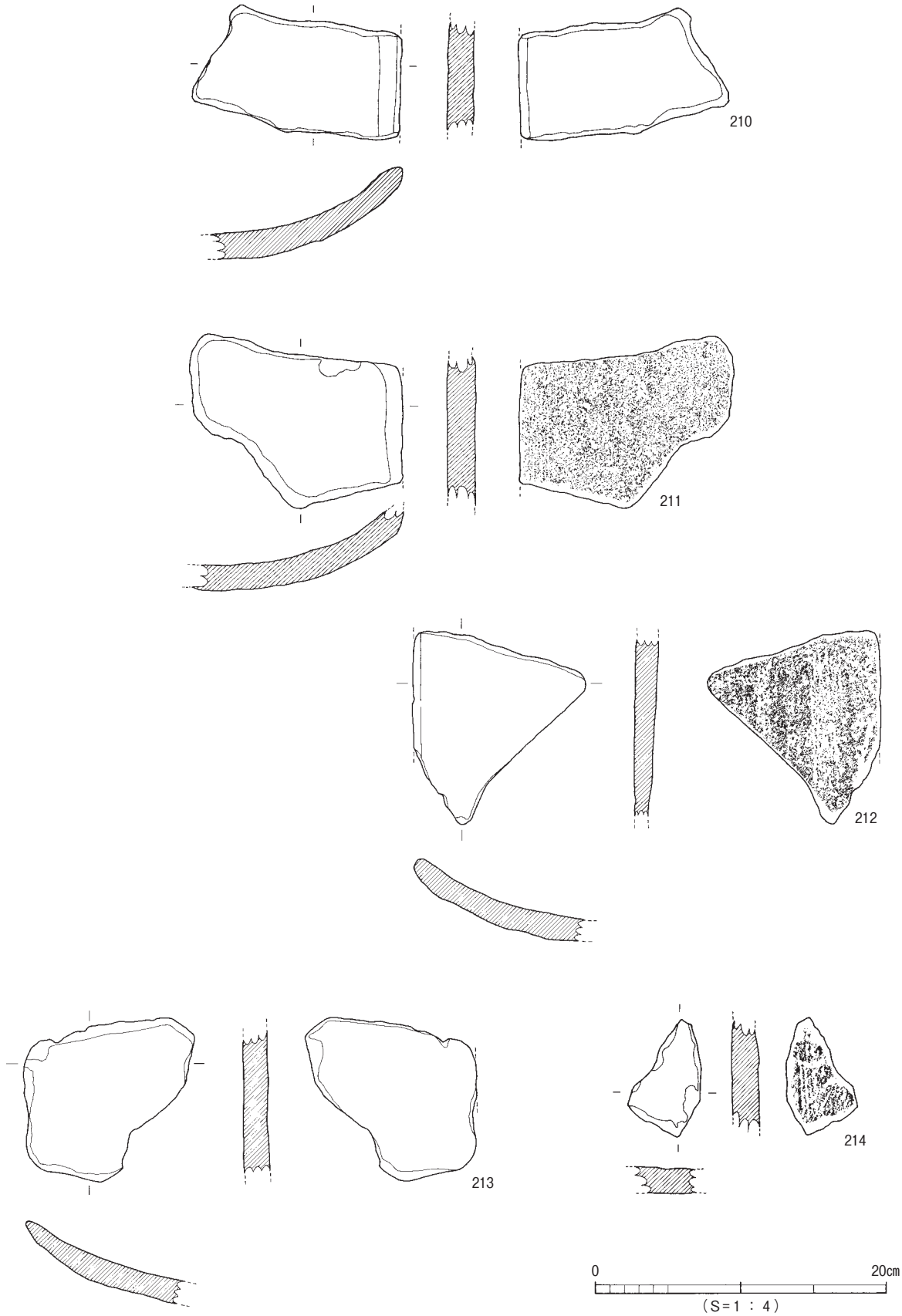
平瓦（205～216） 端部が遺存するもの、もしくは叩き等調整が確認できる12点を図示した。焼成があまく、黄灰色の色調を呈するものが多い。比較的薄く、裏面の叩きが確認できるものはすべて細




**第32図　ＳＸ２出土遺物（14）**




**第33図　ＳＸ２出土遺物（15）**




**第34図　ＳＸ２出土遺物（16）**

縄叩きである。206・207の側縁付近の裏面には側辺に平行に走る稜を持っており、同一個体かもしれない。平安時代のものであろう。

**弥生土器**

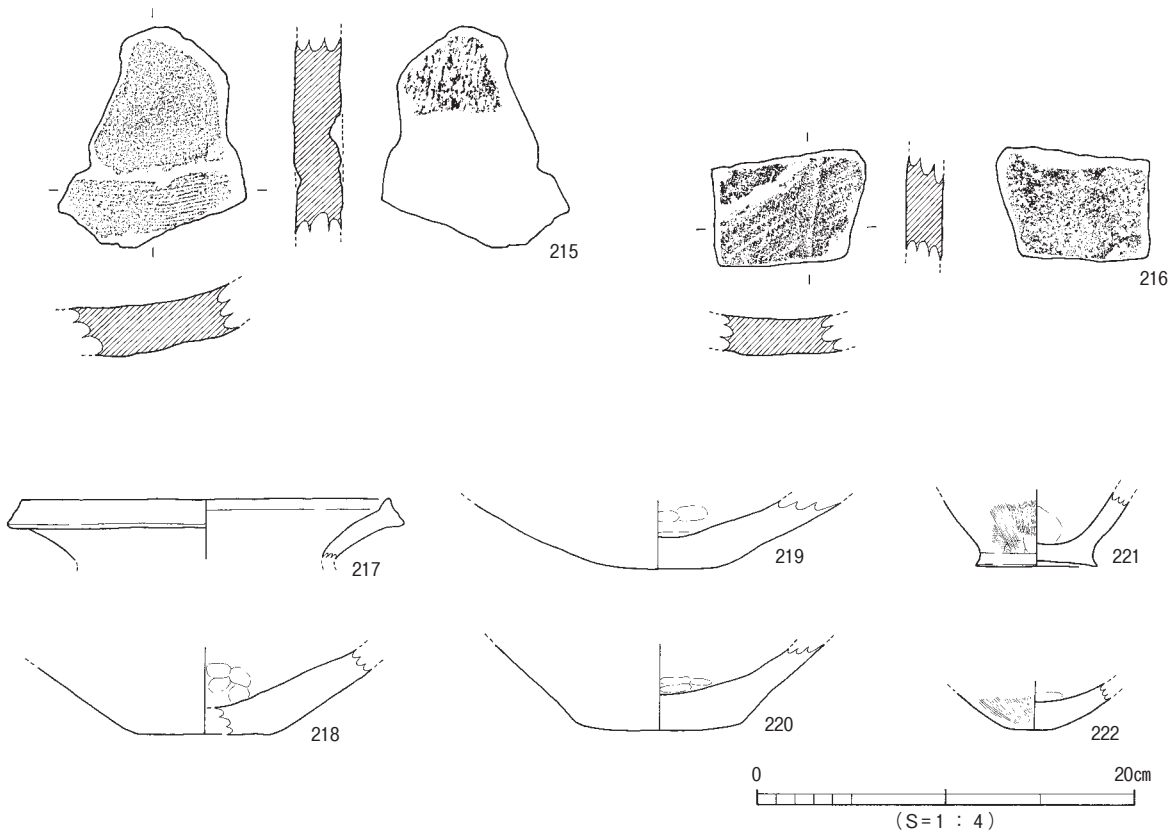
壺（217～220） 口縁部片217は端部を上下方に拡張し、外傾した端面をヨコナデする。このヨコナデにより僅かな凹凸が形成されている。上方への拡張は内面に明確な変換点を持って立ち上がる断面三角形状の拡張となっている。後期前葉のもの。底部はいずれも中～大型品のもので、底体部境の稜が鈍い後期段階のものである。

甕（221～222） 221は鉢かもしれないが、低いくびれの上げ底で二次的な被熱痕がある。後期前葉。222は後期後葉の不明確なコイン大の平底である。

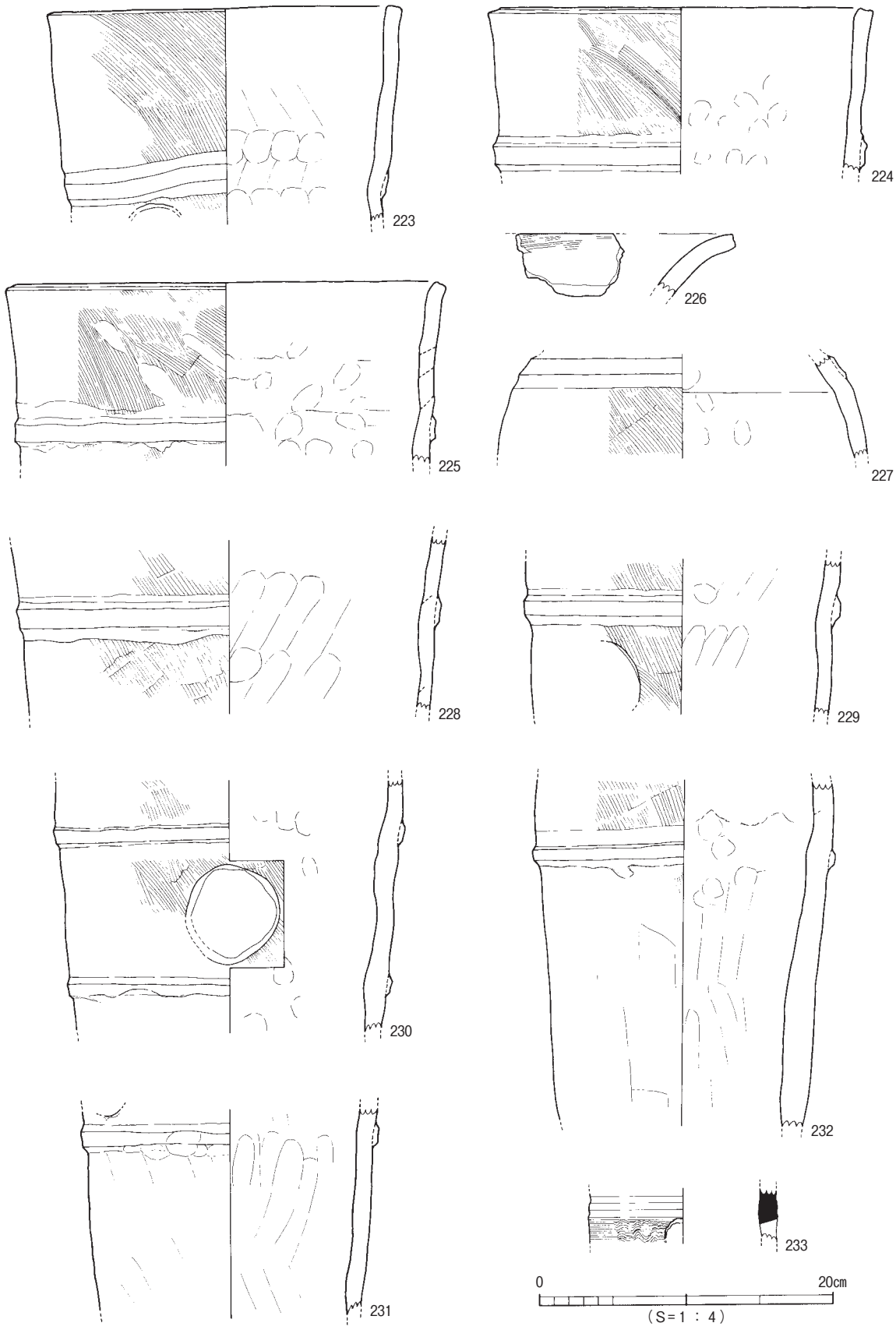
### ｇ．出土地点不明の遺物（第36図）

**埴輪**

円筒・朝顔形埴輪（223～232） 出土がＳＸ１・２のどちらとも特定できないものが数点ある。223～225の３点が円筒、226･227が朝顔と判定できるものである。いずれもその特徴は他の埴輪と変わっていない。




**第35図　ＳＸ２出土遺物（17）**




**第36図　出土地点不明の遺物**

## ｈ．墳丘の土層（第37～39図）

**長軸方向の土層**（第37図、ａ～ａ’）

現況の墳丘を長軸方向に割った土層で、破線の部分より右はこの地点から東寄りに折れ曲がる防空壕壁面の土層を見通した図となっている。基本は地山を平坦に整形した後、黒色の微粒土を置いてベースとし、この上に同質の黒色微粒土や粘質を帯びたマサ土のような含礫赤褐色粘質土、あるいはこれをベースに地山の黄色粘質土ブロックや灰褐色粘質土ブロックを含んだ土などを層状に積み上げている。手順からすると、黒色のベースを置いた後、それぞれ前方部、後円部を積み、その後にくびれ部を埋めるという流れになっている。ここで前方部の積みをみてみると、現況の前方部トップを越えてさらに前方部側に盛土が高くなるように積まれており、現況端で盛り土が断ち落とされたように削られていることがわかる。おそらく、もっと長かった前方部が地山ごと削られて現状のかたちになったものと思われる。後円部盛土の大きな部分を占める赤褐色系の含礫土は、本来細かい単位で積まれているものと思われるが、これの詳細な把握はできなかった。

**後円部破壊法面ラインの土層**（第37図、ｂ～ｂ’）

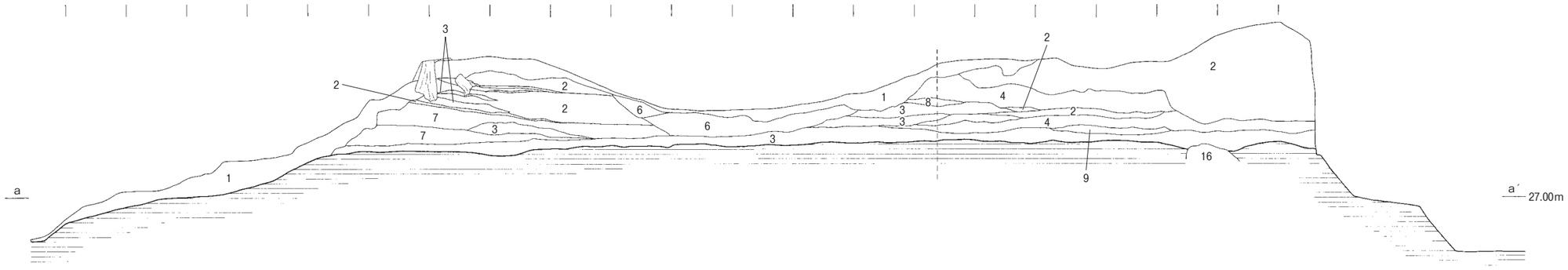
後円部の破壊された法面、東西方向のラインを測量したもので横断土層に近いものである。石室のある西側のこの面には墳丘盛土はみられず、石室上位の表土下で石室に被さっているのは攪乱土であり、石室上部削平後に盛られたものである。壕を挟んだ東側には僅かに盛土が残っており、やはり平坦に置いた黒色微粒土のベースの上に赤褐色、灰褐色系の互層が西下がりに積まれ、その上に含礫赤褐色土が載っている。これらの土層が観察できるのはおよそ長さにして２ｍ程度の範囲で、その東は断ち落とすようにカットされている。

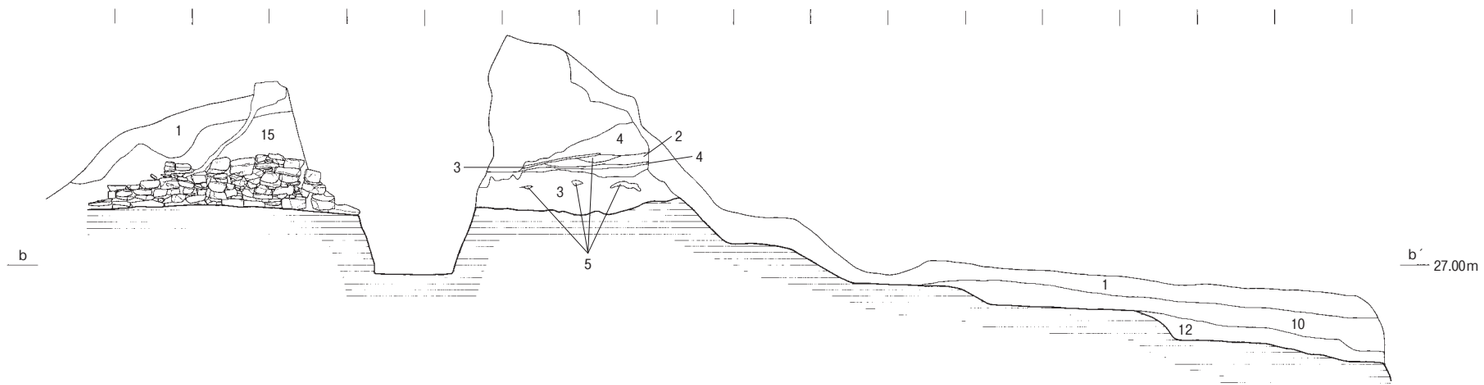
**前方部横断土層**（第38図）

現況前方部トップで主軸に直交して計測された土層である。北東側は切り株や攪乱でわかりづらいが、水平指向で積まれた南西側の盛土は、現況の残丘傾斜や地山掘削法面と同じ傾斜で削られており、本来もっと幅広であったことがわかる。

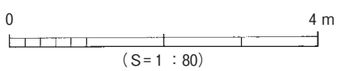
**くびれ部横断土層**（第39図）

墳丘南西側は平坦に削られているためくびれ部の地山整形痕は浅い窪みのような断面形となっている。北東側でみると墳丘側にくびれを整形し、北東端には明確な立ち上がりを持っている。この立ち上がりが残っているのは、断面計測地点付近のわずかなエリアに限られ、その他の部分は果樹栽培によって段カットされている。後円部背後は墳丘とともに取り付け道路などで大きく削り取られており、南西側は前述のように大きく削平されている。前方部前端は段カットされた隣地となっているため、残丘状に残された現況墳丘を除いて四周のほとんどすべてが削平されている現況では、くびれ部にみられる地山整形痕が溝状となって墳丘をとり囲んでいたのかどうかというところまではわからない。埴輪等の遺物は墳丘から暗褐色土とともに流れ落ちた状況で検出されている。

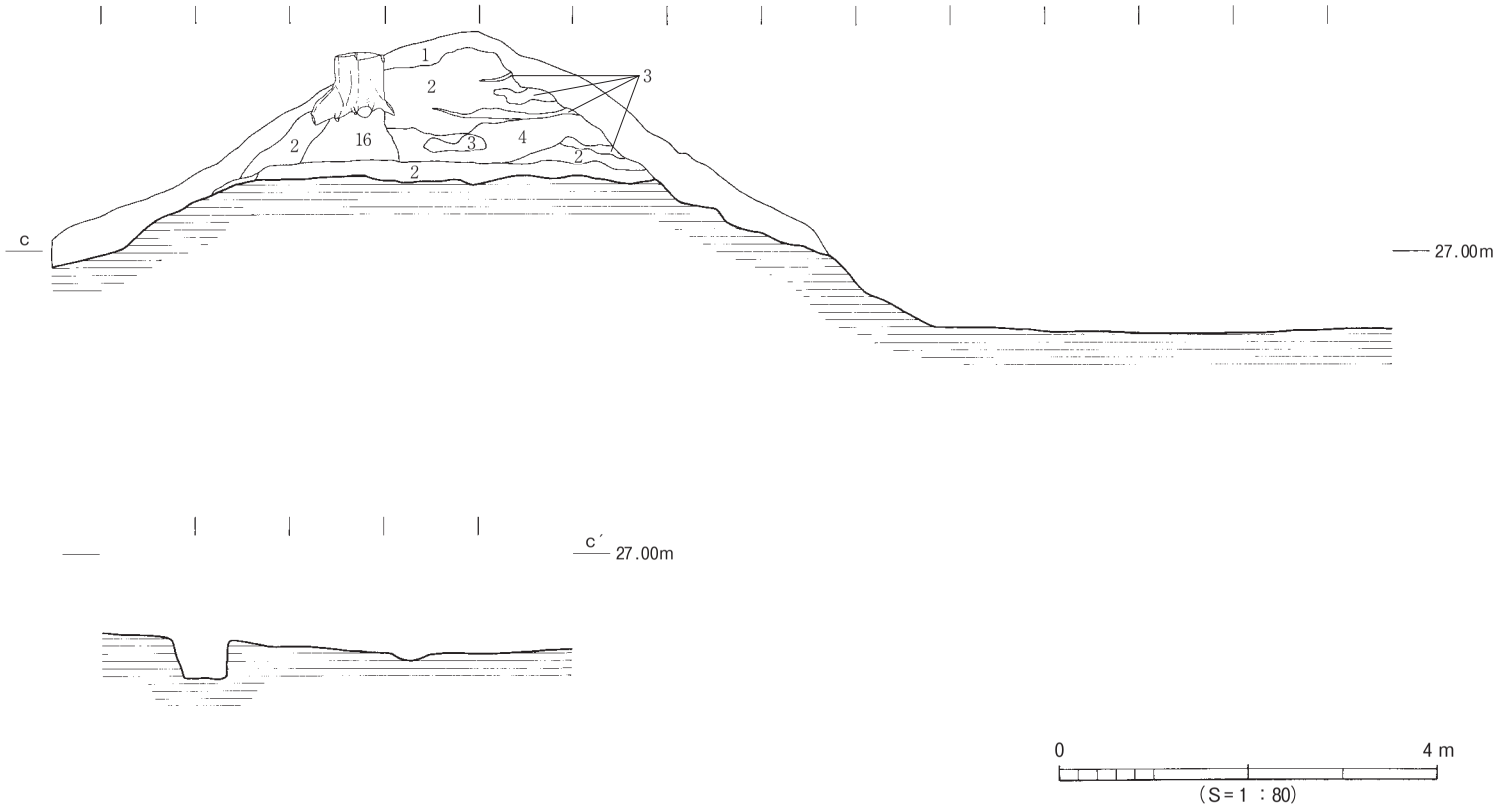



1．表　土　　2．含礫赤褐色粘質土　　3．黒色微粒土
4．灰色粘質土　　5．乳白色粘質土　　6．２＋黄色粘土ブロック
7．４＋２・５ブロック　　8．３＋２ブロック　　9．３＋５ブロック
10．淡褐色シルト　　11．淡黄褐色シルト　　12．緑黄褐色粘質土
13．オリーブ色粘質土　　14．含粗砂暗褐色シルト　　15．暗褐色シルト
16．攪　乱

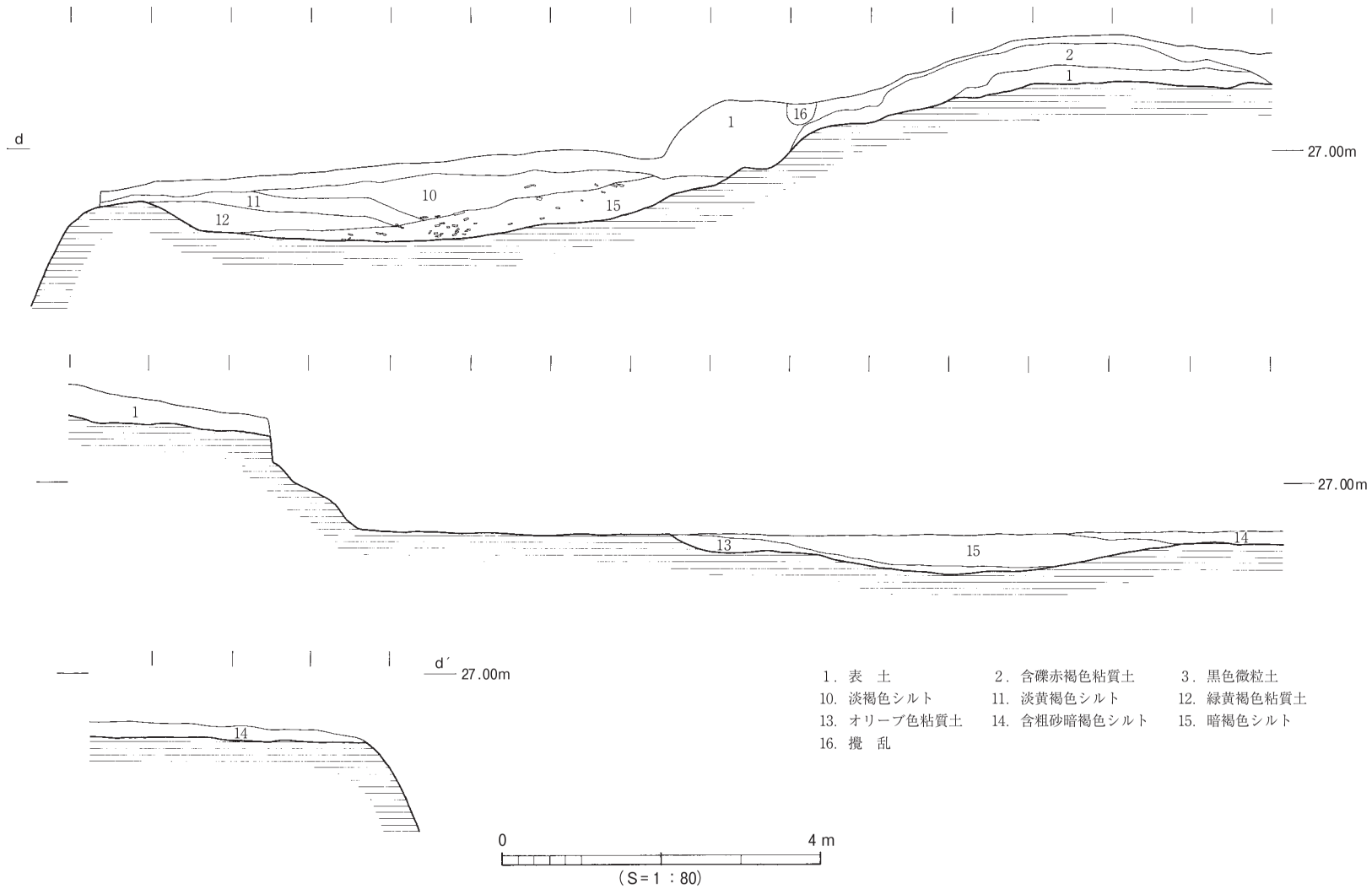



第37図　墳丘長軸ライン土層断面図




1．表　土　　2．含礫赤褐色粘質土　　3．黒色微粒土
4．灰色粘質土

**第38図　前方部横断土層図**

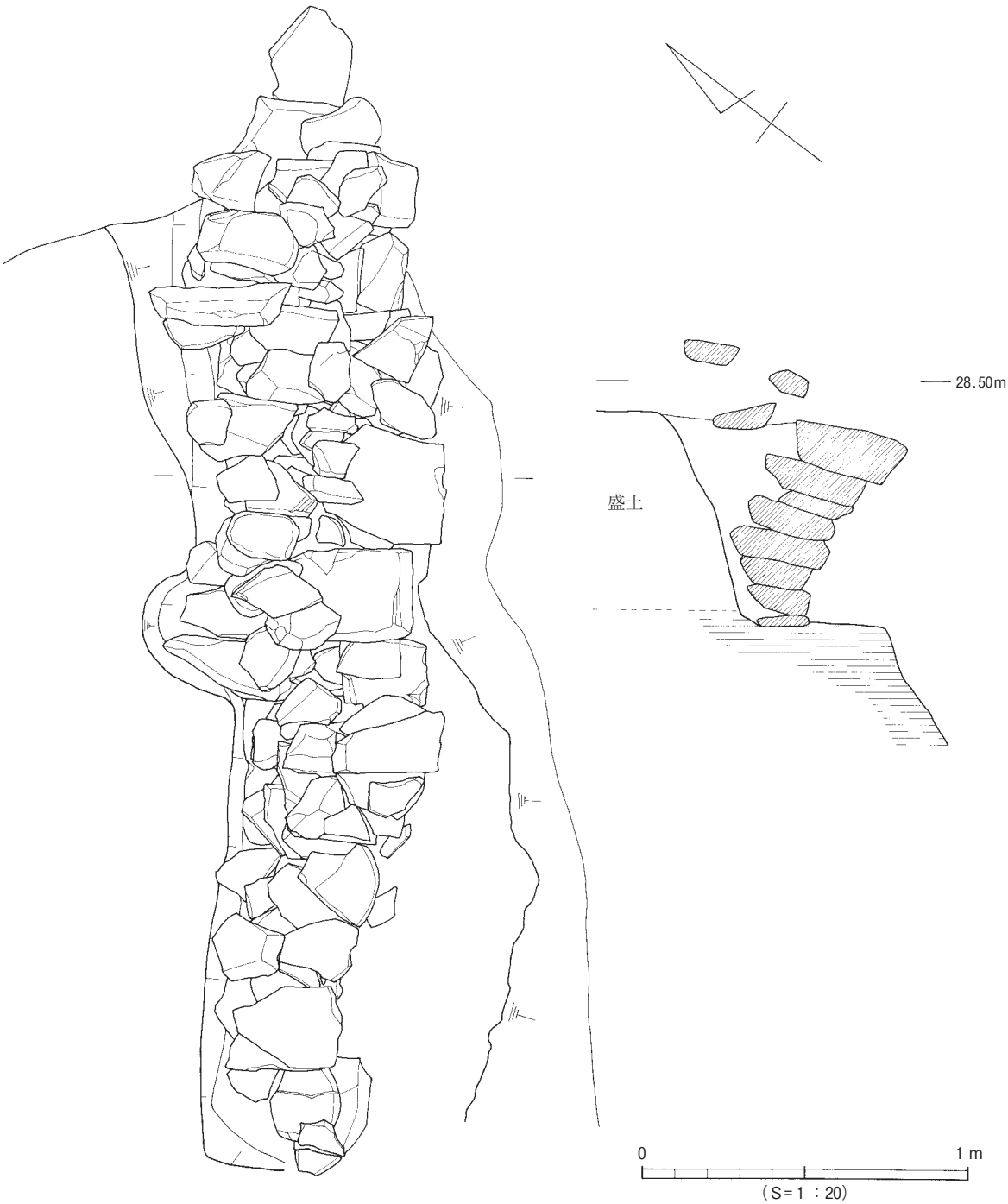



1．表　土　　2．含礫赤褐色粘質土　　3．黒色微粒土
10．淡褐色シルト　　11．淡黄褐色シルト　　12．緑黄褐色粘質土
13．オリーブ色粘質土　　14．含粗砂暗褐色シルト　　15．暗褐色シルト
16．攪　乱

第39図　くびれ部横断土層図

## （２）主体部（第40・41図）

主体部は塊石小口積みの石室で、残っていたのは北東側の側壁の一部と床面の一部であった。床面は側壁基底石から主軸線寄りに最大で0.5mの部分までであるが、床面施設である河原石による礫敷きは、抜かれたり攪乱されたりで原状をとどめていない。側壁は長さ3.2m、最大高0.7m程度まで残っている。石材は、角のとれた転石や角ばった割り石が混在し、まとまりがない印象を受ける。おおよ




**第40図　主体部測量図（１）**

第41図　主体部測量図（2）

そ30～50㎝大の主に砂岩系のものを小口積みしているが、中には部分的に緑色片岩の使用もみられた。支えを失って持ち送り以上にせり出している部分もある。腰石のように基底石を特段意識したような用材は用いられていない。第42図に示された側壁上部の表土下の土は安定した盛土ではなく攪乱土である。これらの土を取り除いて、残存壁体最上部の石とほぼ同じ高さで、盛土面から掘り込まれた墓壙の掘り方が検出されている。これより上位で検出された石材は浮いた状態で、攪乱土とともに二次的に配置されており、これらの石の中には石塔の部材がみられたりする。盛土からの墓壙の掘削や壁体用材の用い方をみると、この石室は竪穴式石室であった可能性が高いが、後述するように古墳の年代が６世紀後半のものであるうえに、床面施設が礫敷きであることなど、横穴式石室である可能性も否定できない。横穴式石室であった場合、礫床であることからするとこの部分は玄室で、開口は南西方向であろうと思われる。いずれにしても、竪横どちらとも決しがたいというのが結論である。なお、主体部からの遺物の出土はなかった。

## 第４節　まとめ

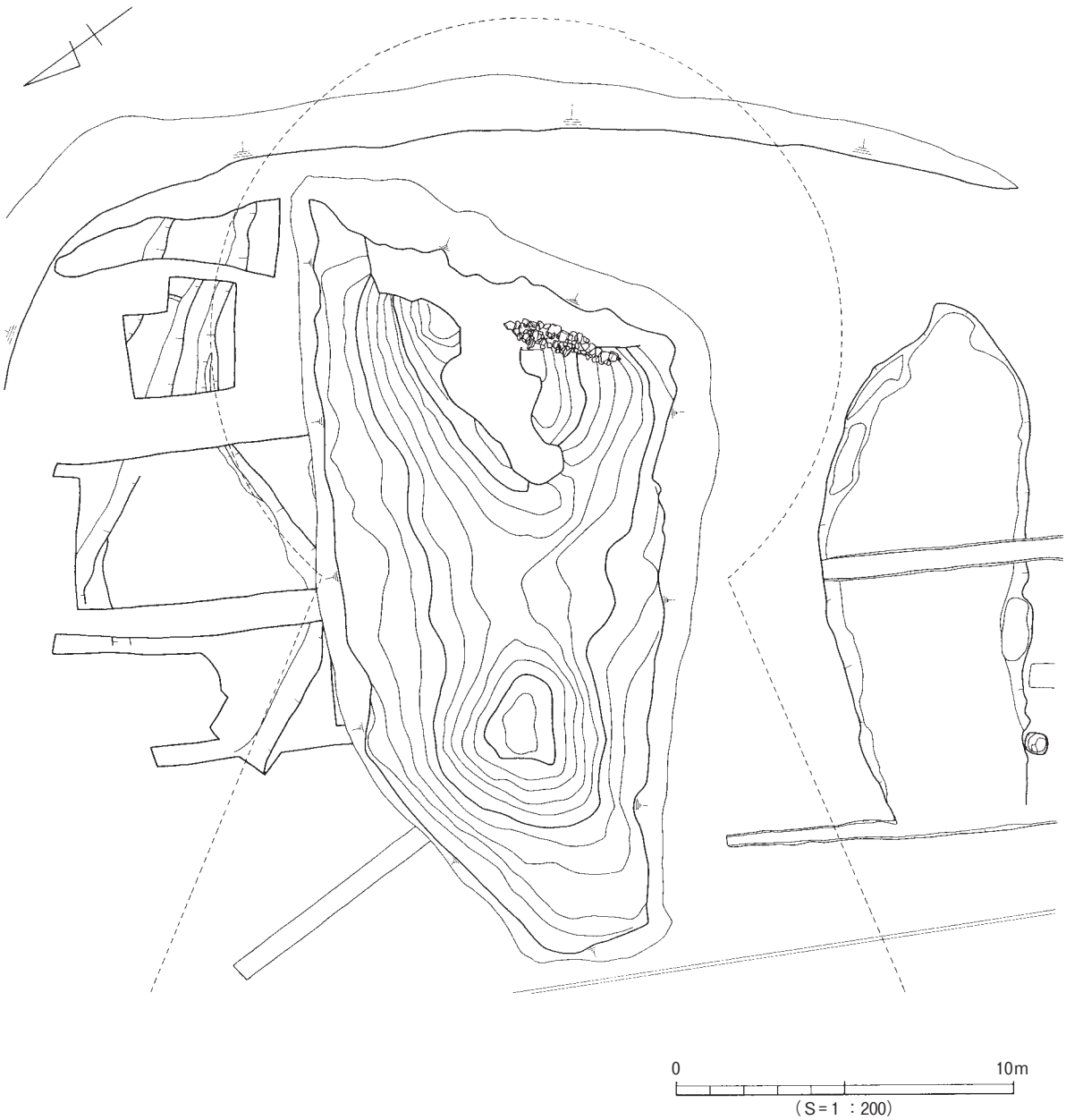
永塚古墳の墳丘を想定で第42図のように復元してみた。くびれ部地山整形は北東側によくその痕跡を残しているので、ほぼそのラインを踏襲することにした。前方部はＴ２で前端部や側端が認められないことから、この前方部端はこのトレンチを越えた部分にあるものと考えられる。北東側に対して南西側の地山整形は緩やかな弧状を呈するのみである。もともと南東側平坦地は地山露出状態まで削平されており、北東側の地山に比べるとレベルにして0.7m程度低くなっているのが現状である。したがって、本来くびれはもっと現墳丘寄りにしっかりしたかたちで存在していたものと思われる。こういったことを総合し、主軸を現況に近いラインに想定して折り返してみたのがこの案である。従来全長22m程度、狭長な前方部形態の小規模な前方後円墳と考えられていたが、この案では、後円部直径推定18m、くびれ部幅12m、前方部長10m超、全長28m超の規模となり、くびれも太く、前方部は考えられていたような狭長な形態にはならないこととなった。

遺物のほとんどは南西側および北東側のくびれ部地山整形に伴う窪みやその付近でまとまって出土したものであるが、これらの遺物のなかには、古くは弥生時代後期から奈良・平安時代までのものがある。これらのうち、この古墳に伴うと考えられるものは多量の埴輪と、さほど多くはないが古墳時代タイプＴＫ43型式併行の須恵器がある。円筒埴輪は、高さ40㎝代後半から60㎝まで、基本は突帯３条の４区画構成、透しは上から２・３段目に円孔が対向する２方向に直交配置で設けられる。突帯は低平な蒲鉾形、もしくは僅かな中窪みのＭ字状の断面形態で、外面の２次調整はない。底部調整は外面板状工具、内面指によるオサエが基本である。わずかに朝顔、形象埴輪が伴い、形象で器種が特定できるものには盾と、盾かもしれないが蓋の可能性があるものが１点ある。このような須恵器、埴輪の特徴から古墳は６世紀後半のものと考えられ、かねてから言われているように道後平野の前方後円墳としては最も新しいものであることが再確認された。年代からすると、出土した埴輪も平野では最終末に位置するものである。

主体部の遺存は悪く、竪穴式石室、横穴式石室、いずれとも確定できなかった。竪穴の可能性の根拠には墓壙が盛り土内に掘削されていることや腰石を用いない壁体用材の積み方がある。しかし、６世紀後半代の竪穴式石室の例は、当平野では横穴式石室の同一墳丘内従属的施設としての小竪穴式石

室のようなものしか知られていないことから積極的にこれを竪穴と断定することができない。一方、これを横穴式石室とすると、前方後円墳の後円部に存在する横穴系の埋葬施設としてはいかにもの足りないような印象が残る。

さて、松山平野を古代の旧郡単位でみると平野には５郡が存在していた。永塚古墳はこのうちの温泉郡に属する古墳で、北方に隣接する和気郡との郡域至近に位置する。この郡内の首長墳としては、古墳時代前期初頭、大峰ケ台丘陵上に朝日谷２号墳が愛媛県内最古段階の前方後円墳として出現するが、その後有力な古墳は現在のところ存在せず、６世紀になって郡域南東端、久米郡との郡域近くの桑原地区に経石山古墳、三島神社古墳といった前方後円墳が現れ、これらに続いて永塚古墳が郡域北西端部近くに築かれるということになる。桑原地区の２基については系譜関係でとらえることが可能




**第42図　墳丘想定復元図**

だが、朝日谷２号墳以降、有力古墳の不在時期を経て、６世紀後半になって登場する永塚古墳までの年代的・地勢的なつながりを追えるところまでの材料は、郡域内では現在のところみつかっていない。

出土遺物のうちには前述のように古墳に伴わない弥生遺物や古代の土器・瓦などの出土があった。調査地周辺の丘陵および微高地は弥生遺物の包含地として周知されているが発掘調査例がほとんどなく不明な部分が多い。近年この古墳近辺で数件の小規模な調査が行われているが、そのうち古墳の北西70mの地点で行われた衣山大塚北遺跡で後期段階の周溝状遺構が検出されており、包含地としてのみではなく少なくとも後期段階の集落が周辺にひろがっているものと考えられる。そのほか、古代の瓦やその他の遺物については関連の遺構は確認されなかった。先ほどの「大塚北」なる小字名は、本古墳との関係を示す地名であると思われるが、これにも表れているとおり、本古墳は古くより古墳として認識されていたようである。想像の域を出ないが、古くは瓦葺きの祠のようなものが調査地に存在して祀りの対象となっており、そのような祀りに関連する遺物群ではないかと思われる。

## 文　献

十亀幸雄ほか 「永塚古墳測量調査略報」『遺跡 第22号』遺跡発行会 1982

岡田敏彦 「愛媛県における首長墓系譜」『紀要愛媛 第２号』愛媛県埋蔵文化財調査センター 2001

山内英樹 『伊予の埴輪編年』『紀要愛媛 第８号』愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008

# 第４章　御産所権現山古墳

## 第１節　調査に至る経緯

1988（昭和63）年11月25日、松山市都市計画課より、市民から山西町の包蔵地内丘陵において開発が行われているとの通報があり、工事の中止を指示したとの連絡があった。これを受け、文化教育課が現地を確認し、開発事業者である日野開発株式会社に経緯について説明を求めたところ、工事は農

**第43図　調査地位置図**（S＝1：25,000）

地整備のための取り付け道路を造成していたもので、既に進行中であった道路部分については届出はいらないと勘違いしていた、とのことであった。これに対し、文化教育課では、文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事に伴う届出の必要性について説明を行い、同年12月９日、日野開発より農地形状変更に伴う埋蔵文化財確認調査願等の提出を受けた。

以上のような経緯を経て、翌1989（平成元）年４月15日から５月５日の間、文化教育課は現地の現況把握と試掘計画策定のための踏査を実施した。第44図は開発行為が行われる以前の現地の図面に踏査で把握された現況を描きこんだものである。造成により現状は大きく改変され、特にＧ区とした周辺の稜線を経て南西の頂上部までは道路取り付け工事が進行し、図のような整ったコンターの状況ではなかった。踏査の結果、後にＥ区とされる対象地の最高所に円墳２基の存在が確認された。この踏査の後、文化教育課と日野開発との間で協議を行い、日野開発の協力を得て、同年８月より用地全体の試掘調査を実施し、必要な部分については引き続き本発掘調査を行うこととなった。

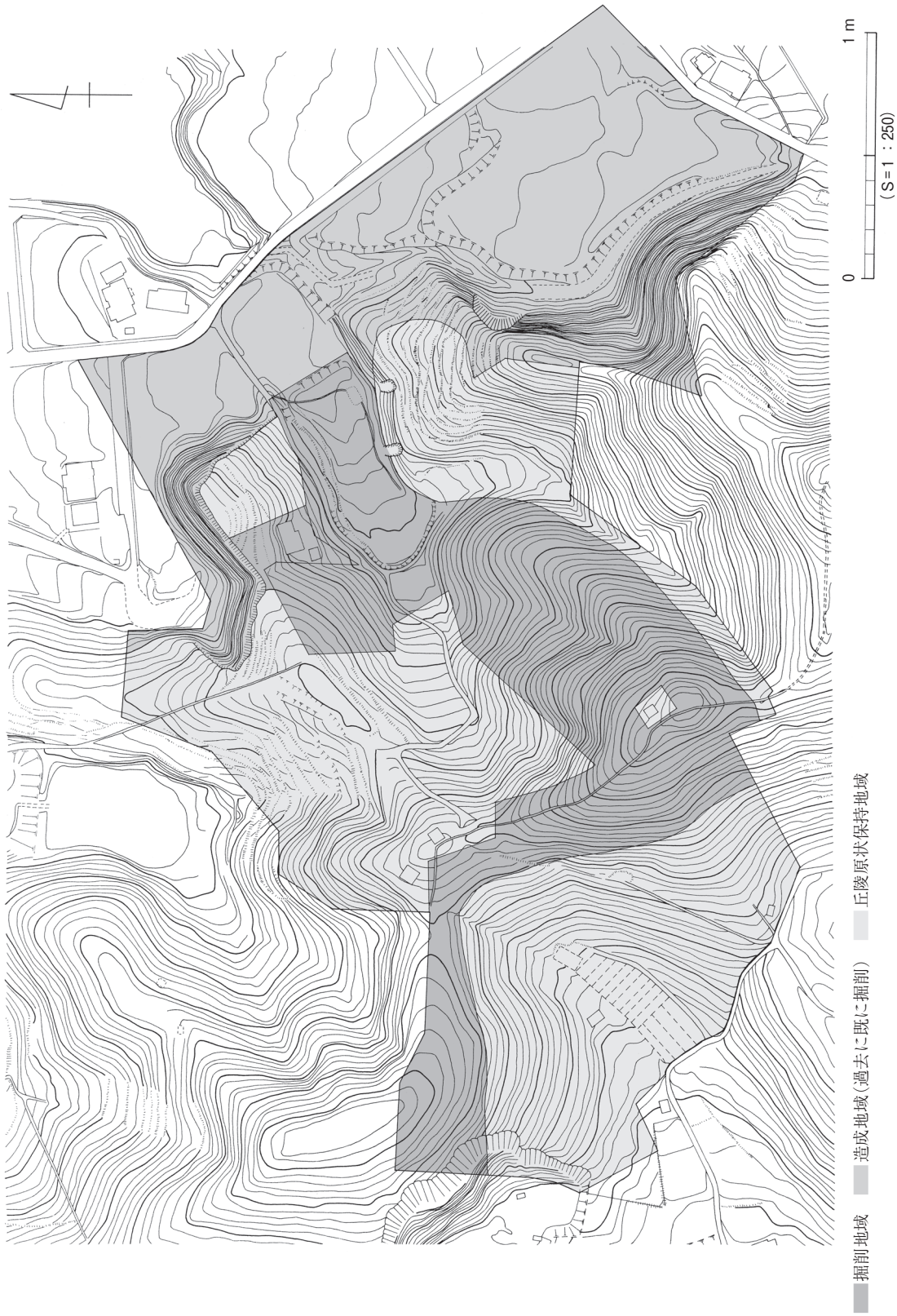
しかし、現地の状況から調査前の全測図を作成するといった余裕はなく、試掘調査のトレンチ位置や、発掘区の位置は、現況とは大きく異なる上述の図面上におおよその平面位置として載せて進めなければならないような状況であった。踏査によりＥ区で南北に並列状態で確認された２基の古墳のうちの１基は、その墳丘直上に既に四国電力株式会社の送電線鉄塔が設けられ、現状変更の対象とはなっていなかったため、後に御産所権現山１号墳と命名する南側の１基のみを調査対象とした。用地全体の試掘調査は対象地の丘陵全体について各所の稜線を目安にＡ区～Ｇ区に区画割りし、その稜線沿いを中心にトレンチ掘削を行い、必要な部分については拡張掘削を行いながら遺構のひろがりを把握することとした。当初、申請地のうちにはやや北西に離れた飛び地Ｆ区が存在したが、最終的に開発計画からはずれたため、Ｆ区なる調査区は結果として今回の調査対象とはならなかった。

## 第２節　調査組織

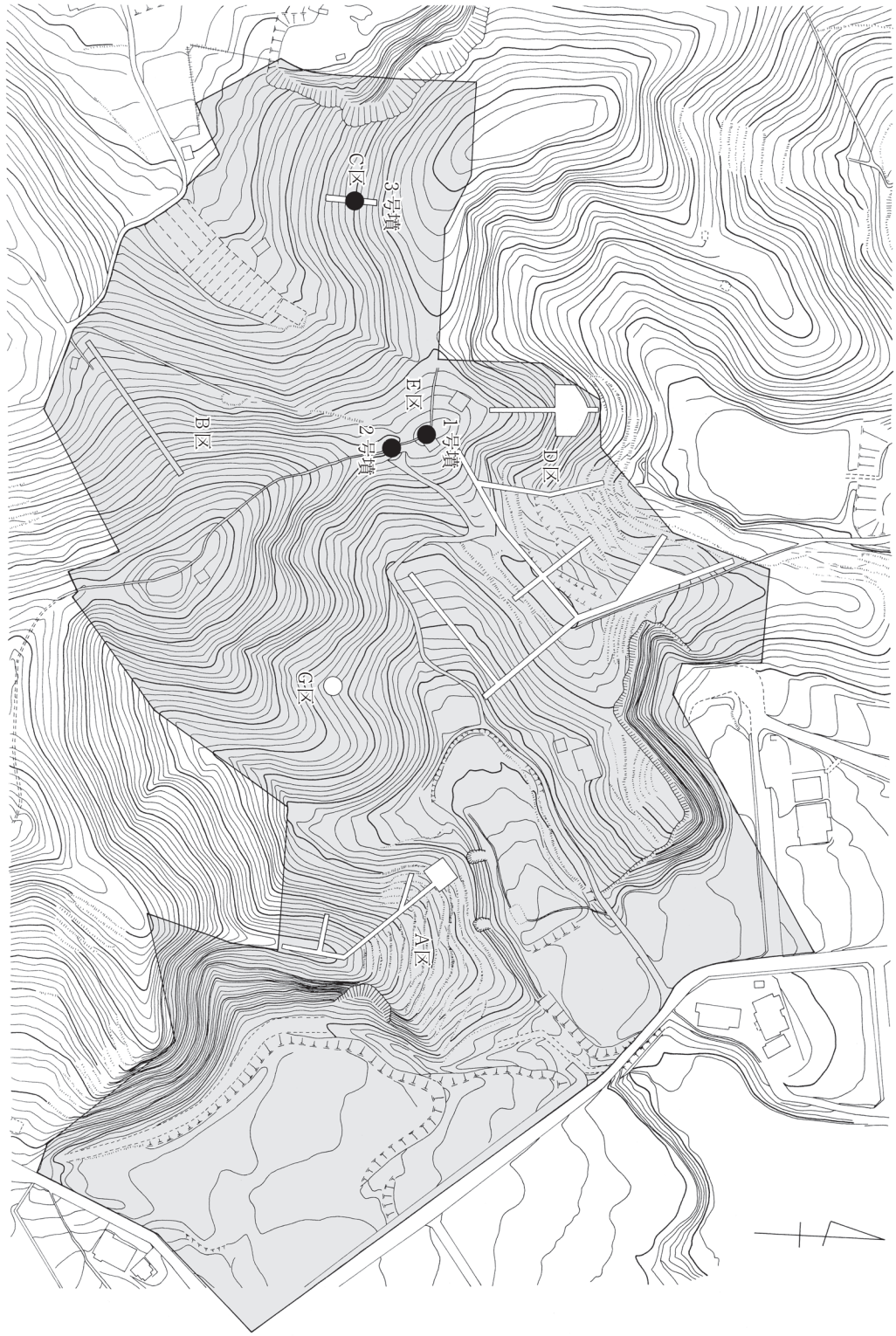
松山市教育委員会　教 育 長　平井　亀雄
　　文化教育課　課　　長　渡部　忠平
　　課長補佐　大野　衛治
　　第二係長　西　　伸二

松山市立埋蔵文化財センター
　　所　　長　森脇　　將
　　調 査 係　係　　長　西尾　幸則
　　主　　任　田城　武志
　　主　　事　栗田　正芳
　　調 査 員　栗田　茂敏

調 査 地　愛媛県松山市山西町25番地 外30筆、別府町250番地 外25筆
調査期間　1989（平成元）年８月１日～1990（平成２）年５月31日
調査面積　69,400㎡




**第44図　申請地の現況**




第45図　調査区とトレンチの配置および確認された古墳

# 第３節 調査の成果

## （１）試掘調査

トレンチの配置とおおまかな区画割りは第45図のとおりである。Ａ区では遺構・遺物ともに検出されていない。Ｂ区に設けたＢ区Ｔ１の丘陵裾部において溝状遺構とともに若干の須恵器が採集されており、古墳の周溝の可能性があると考えたが、この部分については現状保存されることとなったため本格調査には至っていないので採集された遺物のみをここで掲載しておく。

対象地最西端の南面丘陵をＣ区としたが、この部分に設定した南北トレンチＣ区Ｔ１において、古墳の主体部と判断される遺構が検出されたため、これを３号墳として後に調査を行った。試掘結果、本格調査の成果についてはまとめて後述することとする。

Ｄ区は申請地中央付近の東西稜線を含む丘陵部である。この区の北斜面に設定したＴ２において図に示されたような奈良時代の遺物が出土したため部分的にトレンチを拡張するなどしたが遺物は浮いた状態で明確な遺構は検出されなかった。また、南斜面とこれに交わる裾部にそれぞれＴ８、Ｔ９を掘削し、その交点付近、丘陵裾部において縄文時代晩期の土器片や石製品が出土したが、これも遺構に伴ったものではなく斜面堆積のような状況での出土であった。

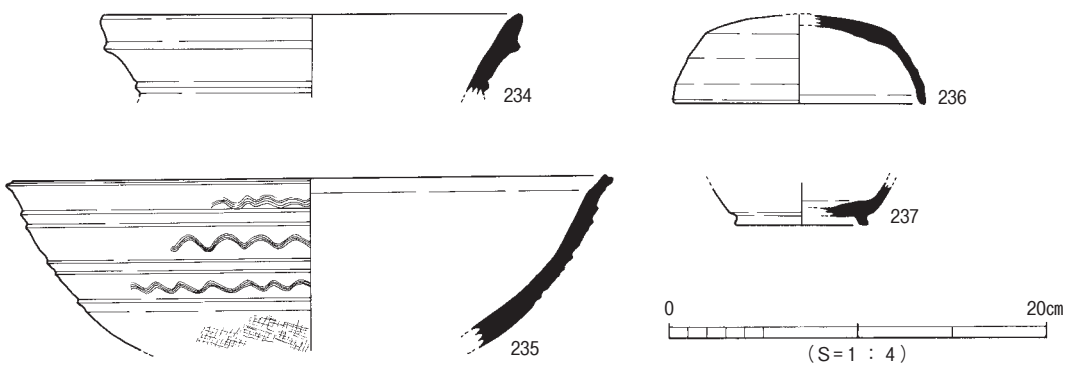
Ｅ区は前述のとおり古墳２基が所在する丘陵最高所であり、Ｇ区は重機による掘削が現在進行形で進められていた区画である。この区の一角で弥生の大型壺が掘削とともに出土していたが、時既に遅く周辺は地山まで削り取られ遺構の痕跡も残っていなかった。ここでは各区で採集された遺物を掲載しておくことにする。

### ａ．Ｂ区Ｔ１出土遺物（第46図）

**須恵器**

壺（234） 直線的に外上方に開く口頸部片である。外面の口端部をやや下った位置と頸部にそれぞれ断面三角形状の突帯が貼り付けられている。口端部は丸く収めている。

器台（235） 高坏形器台坏部の片、口端部を外方に断面三角形状に小さく肥厚、上端に中窪みの小さな面を持つ。この口端部直下の外面にヨコナデにより形成された低い稜がある。以下、２条単位の突帯が２段、最下段に１条の突帯を持つ。これらの稜や突帯により区画された３段の施文帯に櫛描波状文を施している。最下段の突帯以下の底部に施された格子目叩きはナデ消されている。上述の壺口




**第46図　Ｂ区Ｔ１出土遺物**

縁部とともに、当地でいう市場南組窯系の非陶邑系須恵器である。

坏（236・237） 236は古墳時代タイプの蓋、器高4.7cm、口径13.2cmを測る。237は貼り付け高台を持つ身の底部片である。

### b．Ｄ区Ｔ２拡張区出土遺物（第47図）

**縄文土器**

深鉢（238） 僅かに外反する口頸部直下の外面に半裁竹管による刺突文を持つ晩期中頃のもので口唇部に細かい刻み目が施されている。

**須恵器**

器台（239） 高坏形器台の坏部片である。外反して開く口縁部下の外面を２条単位の突帯２段で区画し櫛描波状文を施すところまで確認できる。

壺（240・241） 240は口径3.4cmを測る子持壺の子壺と思われるものの口頸部片である。241は壺肩部の片で、１条ずつの横沈線によって区画された部分に櫛描波状文を持つ、沈線によって区画された施文帯の上下位はカキ目調整されている。

鉢（242） 東播系捏ね鉢の片口部の片、口縁部はやや立ち上がり気味になっている。12世紀後半～13世紀前半頃のもの。

**土師器**

甕（243） 長胴の甕、全体的に器壁は厚い。下膨れの胴部、口縁部は内湾しながら外上方へ開き、端部には水平な平坦面を持つ。８世紀代のものと考えられる。

坏（244） 器高3.0cm、口径10.9cmを測る回転台土師器坏である。底部はヘラ切り離しによる。10世紀代のものである。

**石製品**

窪み石（245） 砂岩転石を利用したもの。被熱により破損している。

### c．Ｄ区Ｔ５出土遺物（第48図）

**須恵器**

坏（246・247） 246は古墳時代タイプの蓋で、器高4.3cm、口径13.2cmを測る。247は器高2.9cm、口径15.6cm、中窪みのボタン状のつまみを持つ蓋である。

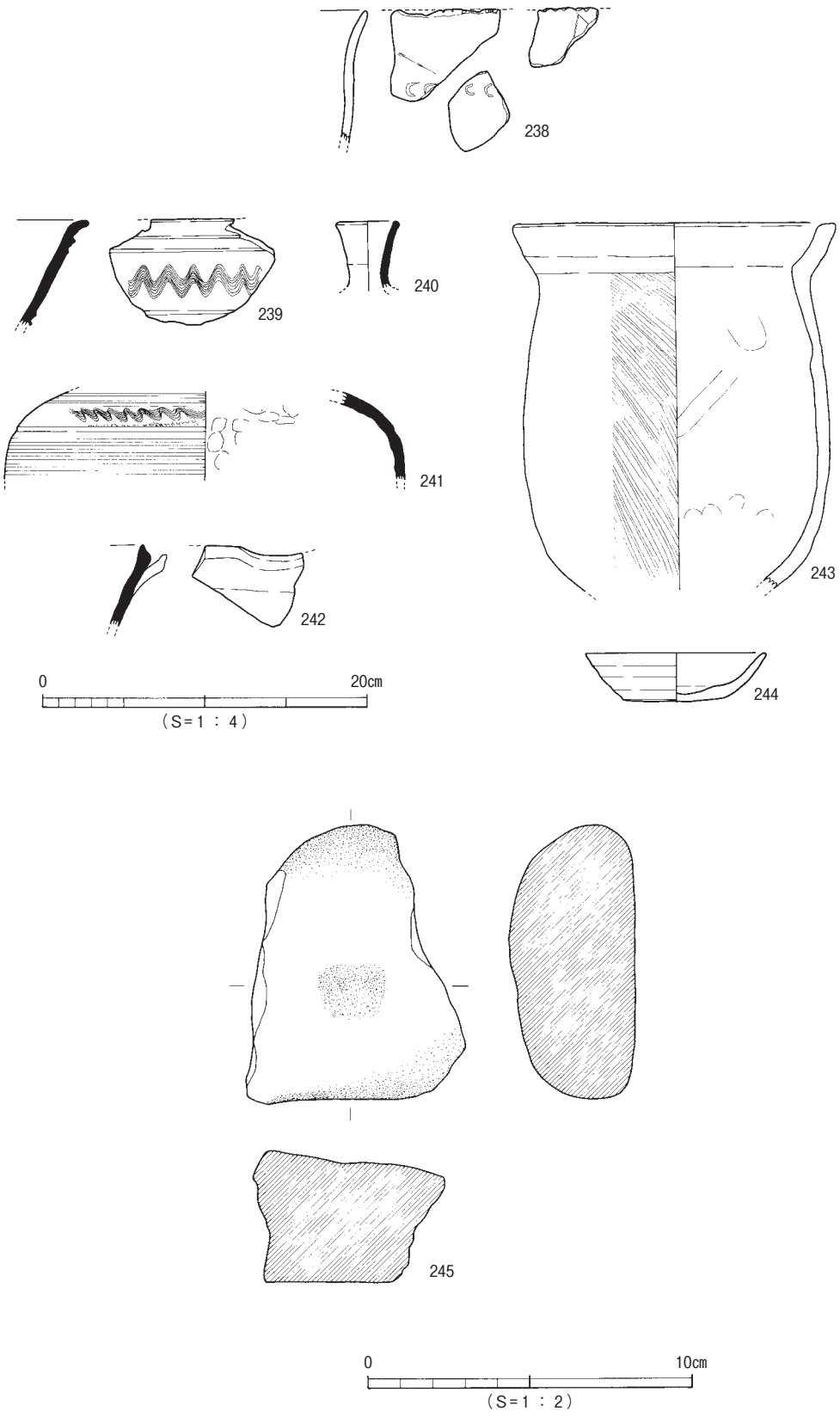
**土師器**

坏（248） 器高5.6cm、口径17.7cmを測るものである。やや外反する口縁部は丸く収められた口端部直下の内面に沈線を持つ。底部を除く内外面は図化はできないが磨かれているようである。暗文は施されていない。

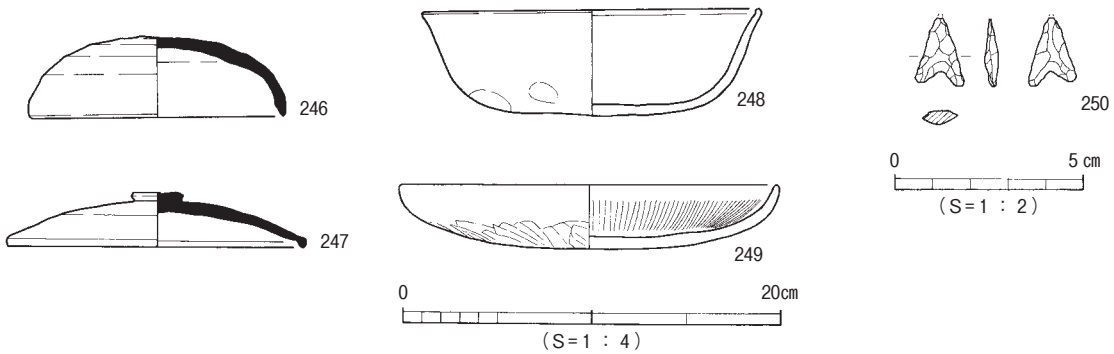
皿（249） 器高3.4cm、口径15.0cmの皿。内面に放射状暗文が施されている。外底部は不定方向に削られた後撫でられている。247、248とともに８世紀前半代の遺物である。

**石器**

石鏃（250） 長さ1.8cm、最大幅1.3cmの小型の打製石鏃であるが、風化が著しく、石材も判別できない。重量0.50ｇを量る。




**第47図　Ｄ区Ｔ２拡張区出土遺物**




**第48図　D区T５出土遺物**

### d．D区T８・９出土遺物（第49・50図）

**縄文土器**

深鉢（251～259）　251は口頸部から胴部上位の片である。張りのある胴部と直立気味に立ち上がる短めの口頸部を持つ。胴部外面はケズリ、その他の内外面はナデられている。頸部外面には複数条の縦沈線による施文が間隔をおいて施されている。確認できる沈線の条数は６本と４本である。口端部は丸く仕上げられ斜め方向からDの字状の刻み目を施されている。252は頸部から胴部上位の片で、頸胴界の部位に刻み目貼り付け突帯を持つ。胴部外面をケズリ、その他の部位をナデられるところは251と同様である。頸部には斜め方向の沈線文が施されている。253は口端部に刻み目、頸部に２～３条の沈線を用いた斜格子文を持つもので、頸胴界にヘラ先状工具による横長の刺突列点文を２段施されている。内外面の調整は前２者と同様である。254は外反する頸部片、外面に沈線斜格子文を描かれている。口縁部255は端部を外方に強めに折り曲げ、端面に浅い刻み目、内面に横長D字状の刺突を施し、外面に斜格子と思われる２条単位の沈線文を描いている。直口縁の256は平坦な面をなす口端部に棒状工具による大きく深い刻み目を施されている。257は若干外反気味の口縁部小片で、面をなす端部に浅い刻み目を持つ。258は外面に無刻み目の突帯を貼り付けられる波状をなす口縁である。259は僅かな窪みを持つ底部である。

浅鉢（260～262）　260は外反する口縁部､内面を磨かれている。261も外反する口縁部で端部をやや下った内面に横走する１条の沈線を施される。この沈線の部分１個所に焼成前の小孔がある。内外面とも磨かれている。262はボウル形をなす浅鉢で口端部に水平な面を持つ。外面を条痕調整されている。これらの深鉢、浅鉢ともに晩期中頃のものである。

**弥生土器**

壺（263）　端部を外下方に拡張した中期中葉の口縁部片である。

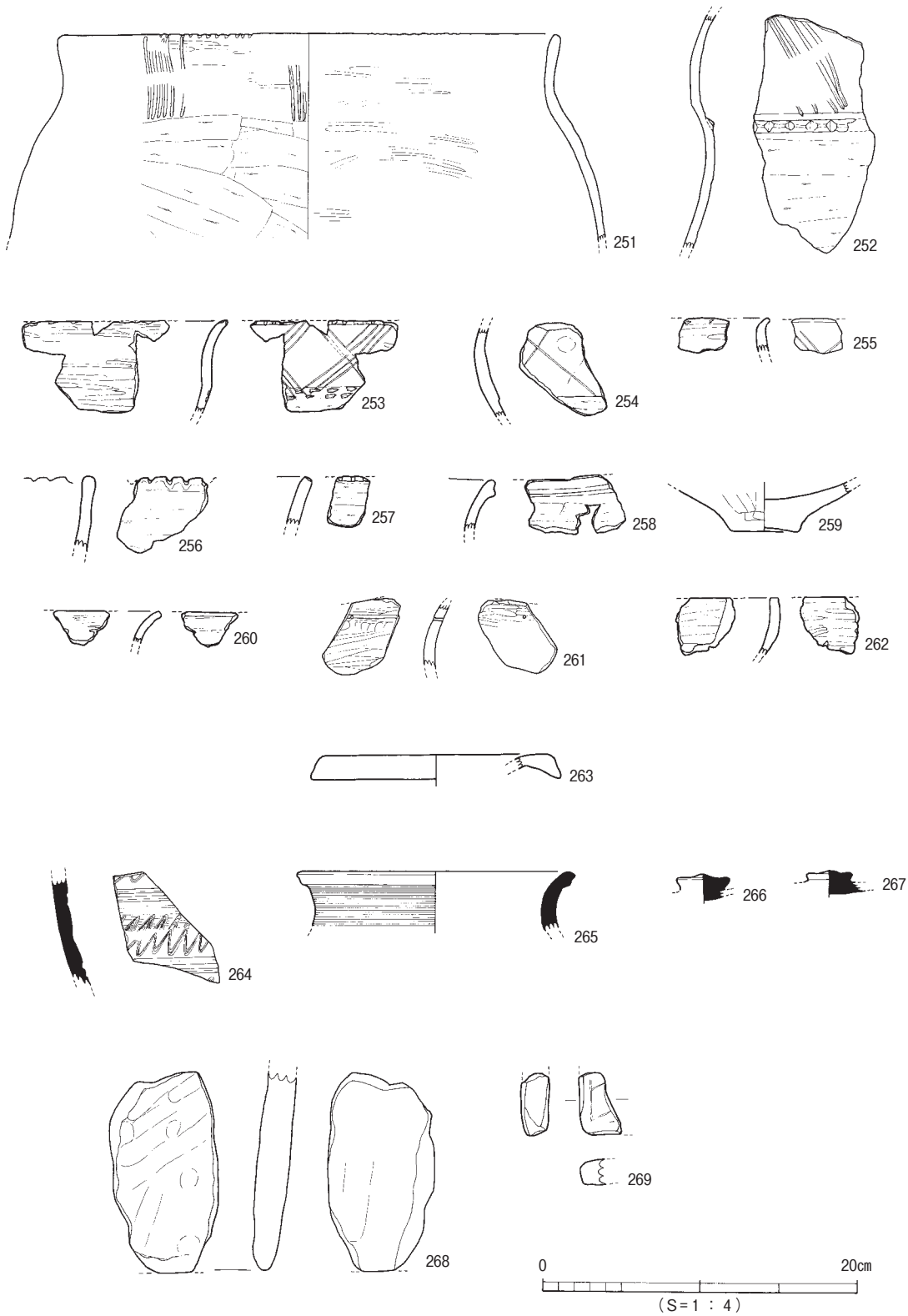
**須恵器**

器台（264）　脚部片、２条単位の沈線で区画された施文帯に２段の櫛描波状文が施されている。

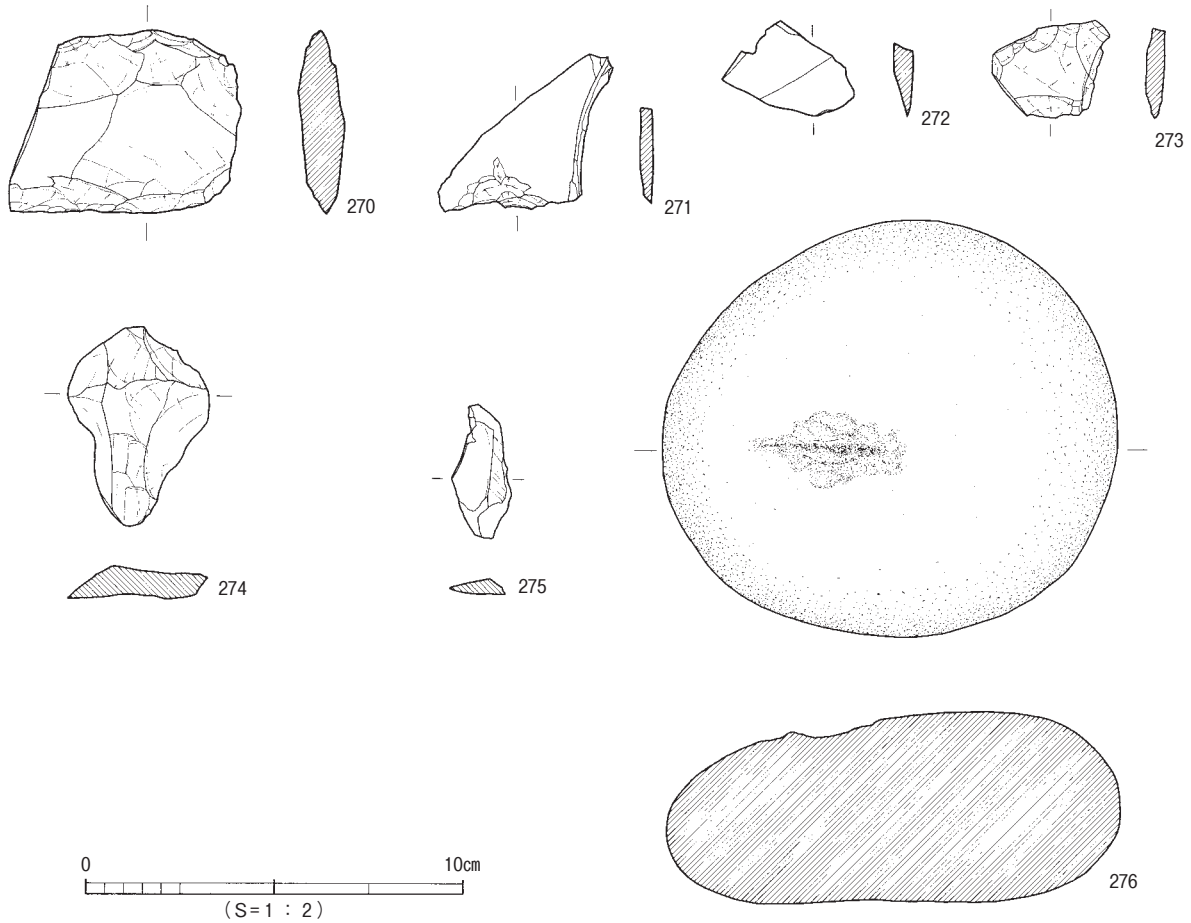
壺（265）　短く外反する口縁部。端部直下の外面に断面三角形の突帯を貼り付け、口端部を中窪みの肥厚帯のよう成形している。復元口径17.0cmを測る。

蓋（266・267）　蓋のつまみ２点である。266は古墳時代の端脚有蓋高坏の蓋と思われる。267は古代の坏蓋か。

**埴輪**（268・269）　268は円筒底部片、269は盾形の盾面コーナー部と思われる小片である。表面に沈線による施文の痕跡があるが、摩滅のため詳細は不詳である。




**第49図　Ｄ区Ｔ８・９出土遺物（１）**




**第50図　D区Ｔ８・９出土遺物（２）**

**石製品**

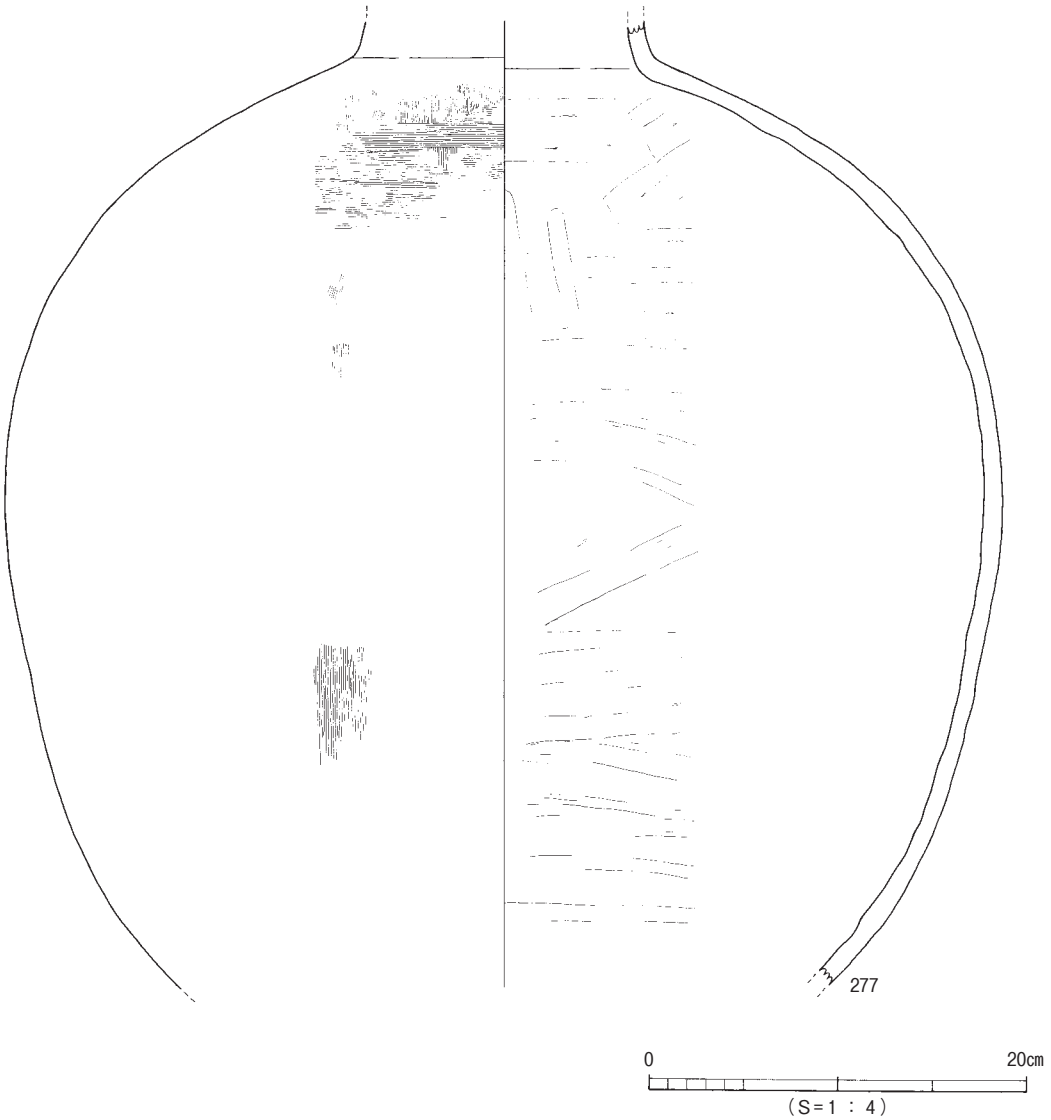
剥片（270～275）　270～273はサヌカイト、274・275は赤色チャートの剥片である。

窪み石（276）　砂岩転石の片面に敲打痕を伴うものである。

**ｅ．Ｇ区出土遺物**（第51図）

**弥生土器**

壺（277）　口縁部、底部を欠く胴部最大径52.4cmを測る大型品である。頸部突帯や施文などの加飾はない。胴部内面は削られている。後期前半期のものであろう。




**第51図　G区採集弥生土器**

## （2）1号墳の調査

### a．墳丘（第45図、第52～55図）

古墳は、対象地内の最高所68mの頂部から稜線沿いに北方に下った傾斜の変換点、標高50m付近に存在する。地形はこの部分からさらに北方へ下る稜線、また分岐して東西へそれぞれ続く稜線の起点になるような位置となっている。この部分に明らかに墳丘と判断できる盛り上がりが南北に隣り合って位置していた。北側の1基については、四国電力株式会社の送電線鉄塔が建設されており、鉄塔敷地・管理用地を含めて同社の管理下にあるので、今回の民間開発の対象とはなっていない。1973（昭和48）年調査の御産所11号墳報告中の御産所古墳群の分布によれば、この位置に「▲4」とドットが落ちているが、正確には2基のうちどちらを示しているものか判然としないので、この丘陵についての通称「権現山」を採ってあらたに「御産所権現山1号墳・2号墳」と呼称することにした。このうち、南側に位置するのが調査された1号墳である。主に東側を農道によってカットされているようにみえる。雑木の茂みの中、墳頂部には天井石を含めた石室部材と思われる石材が数点集積され、小祠

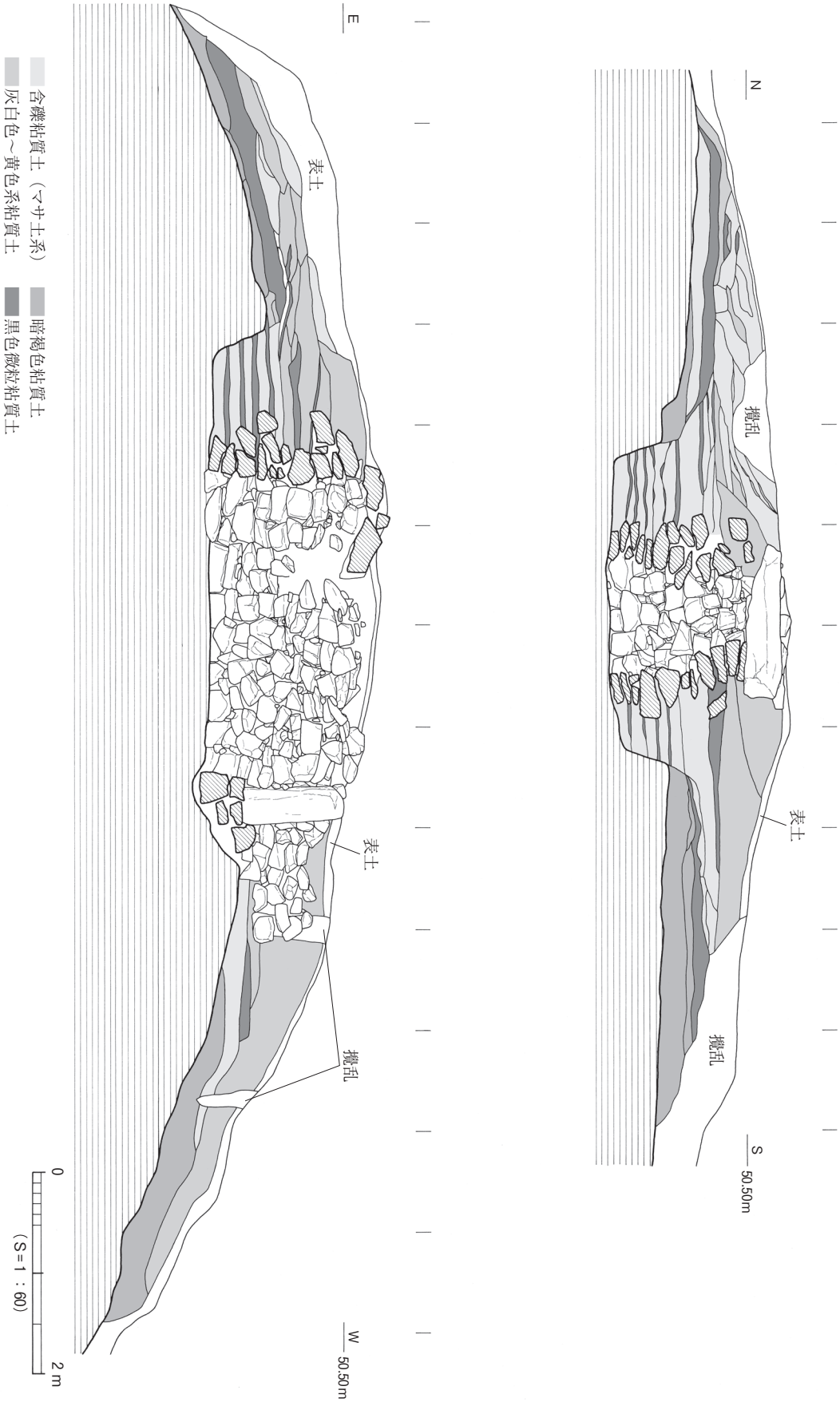
**第52図　御産所古墳群分布図**（松山市文化財報告書９ 1976より）

を置いて祀っていた。こういう状況からすれば先ほどの「▲４」で示された御産所４号墳は権現山１号墳としたこの古墳である蓋然性は非常に高いものといえる。調査前の墳丘測量によれば、主に東側を農道によってカットされており、直径おおよそ15m程度の円墳と考えられたが、最終的な地山整形の確認段階で直径は14mということになった。

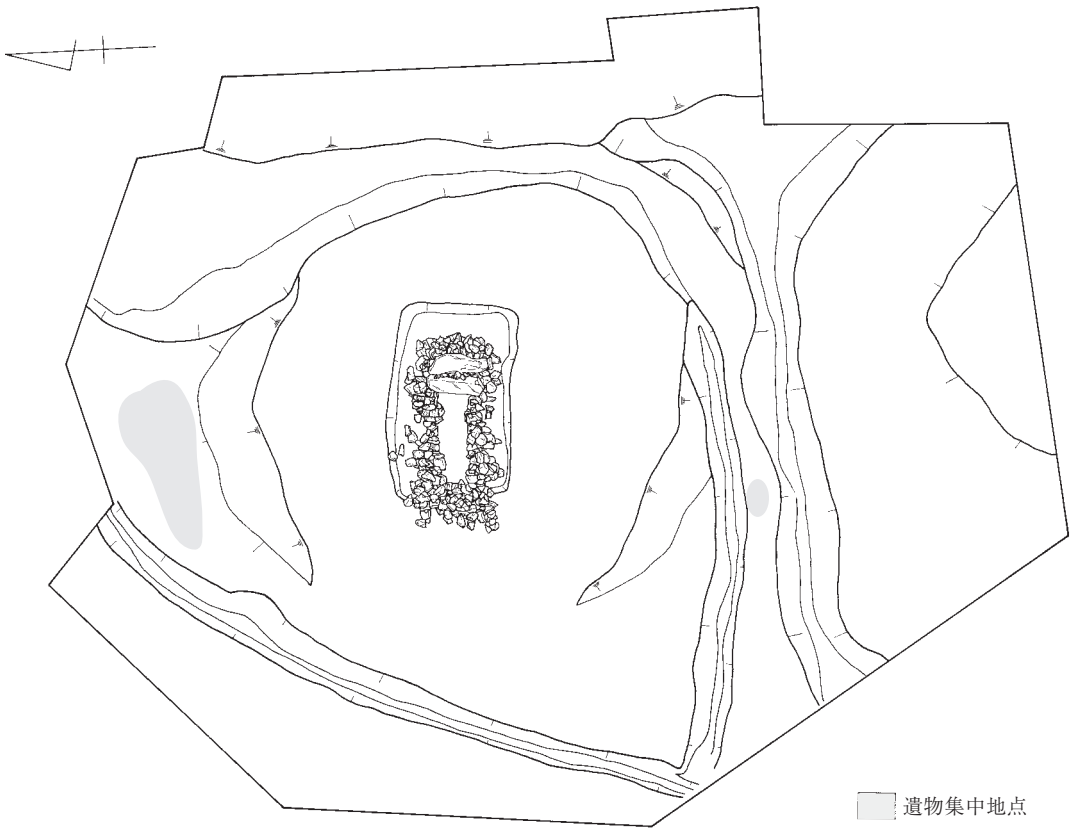
盛土は基本的に地山であるマサ土系の土を締めた含礫粘質土、これには黄灰色から淡褐色、暗褐色系のものまでいく通りかあるが、これらの土と灰白色～黄色系の粘質土、黒色微粒粘質土との互層によって積み上げられている。主体部である横穴式石室は、地山整形の後ある程度盛土を盛っておいて、黒色微粒土面からあらためて掘削された墓壙の中に築かれている。墓壙内の壁体裏込めはこの黒色微粒土と含礫淡褐色粘質土との細かい互層となっていた。

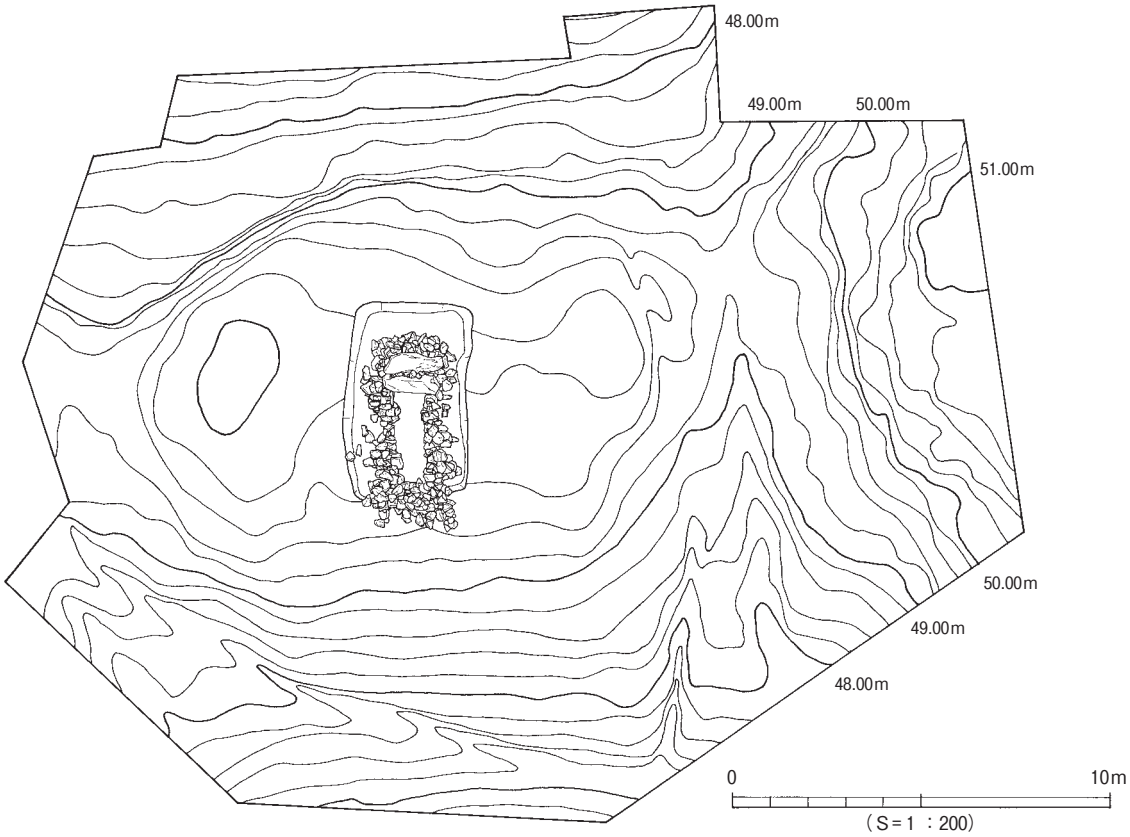
墳丘出土の遺物には表土掘削中に墳丘上で採集された遺物や、墳裾、そのほとんどが北側の２号墳丘と接する境の谷部で出土したものである。墳丘上の遺物には明らかに時代の異なる遺物も含まれているが、古墳時代遺物に関しては１号墳に伴う遺物としての可能性が高い。墳裾の遺物に関しては１号、２号のいずれに伴う遺物であるのかは定かではないので、墳丘、墳裾として分けて扱う。

**第53図　１号墳調査前墳丘測量図**




**第54図　1号墳墳丘断面土層図**




**第55図　1号墳調査後墳丘測量図**

### b．墳丘出土遺物（第56図）

**弥生土器**

甕（278） 口縁部貼り付けによる中期中葉の甕である。

**須恵器**

壺（279） 口縁部の小片である。口端部外面に粘土帯を貼り付けて口縁部外面を肥厚する。端部には平坦な面を持たせている。

坏（280） 低い貼り付け高台を持つ底部片。

椀（281） 端部を強く折り曲げる口縁部小片、器壁は薄い。

**埴輪**

朝顔形埴輪（282～285） 282は口縁部片、口端部の上半と下半のヨコナデにより断面逆くの字状に成形されている。外面は斜め方向のハケメ、内面はヨコハケ調整されている。283・284は口縁と頸部の接合個所の突帯部分で、283は幅広の粘土帯を断面三角形状に、284では台形状に貼り付けている。283の外面にはタテハケの痕跡がみられる。

円筒埴輪（286） 口縁部片。口端部は上端に中窪みの平坦面、さらにその外面縁辺を面取りするような処理が施されている。

盾形埴輪（287～289） 287は盾面上端辺が弧状をなす形態の盾隅角部分の片である。無文で、表面は斜めハケメ調整、裏面はナデによっている。288は円筒と鰭状の盾面の接合部片、289は287と同様、無文の盾面隅角部分の片で、焼成前の小孔が表面から裏面に貫通している。

### c．墳裾出土遺物（第57・58図）

**須恵器**

甕（290） 口縁直下の外面に断面三角形の突帯を貼り付け、口端部外面に中窪みの肥厚帯を設けている。

器台（291） 高坏形器台の坏部と思われる片で、深めの器型である外面に２条単位の突帯による区画を設け櫛描波状文を施している。

高坏（292） 長脚２段透かし高坏の脚部上位の片である。透かしは３方向。

坏（293） つまみ部分を欠く口端部折り返しによる蓋である。

**埴輪**

盾形埴輪（294～299） 294～297は盾面無文のものの円筒接合部片である。298も無文のものの隅角付近の穿孔部。299は他のものより若干薄く、表面に斜格子文様が線刻されている。盾ではない他の形象埴輪である可能性もある。

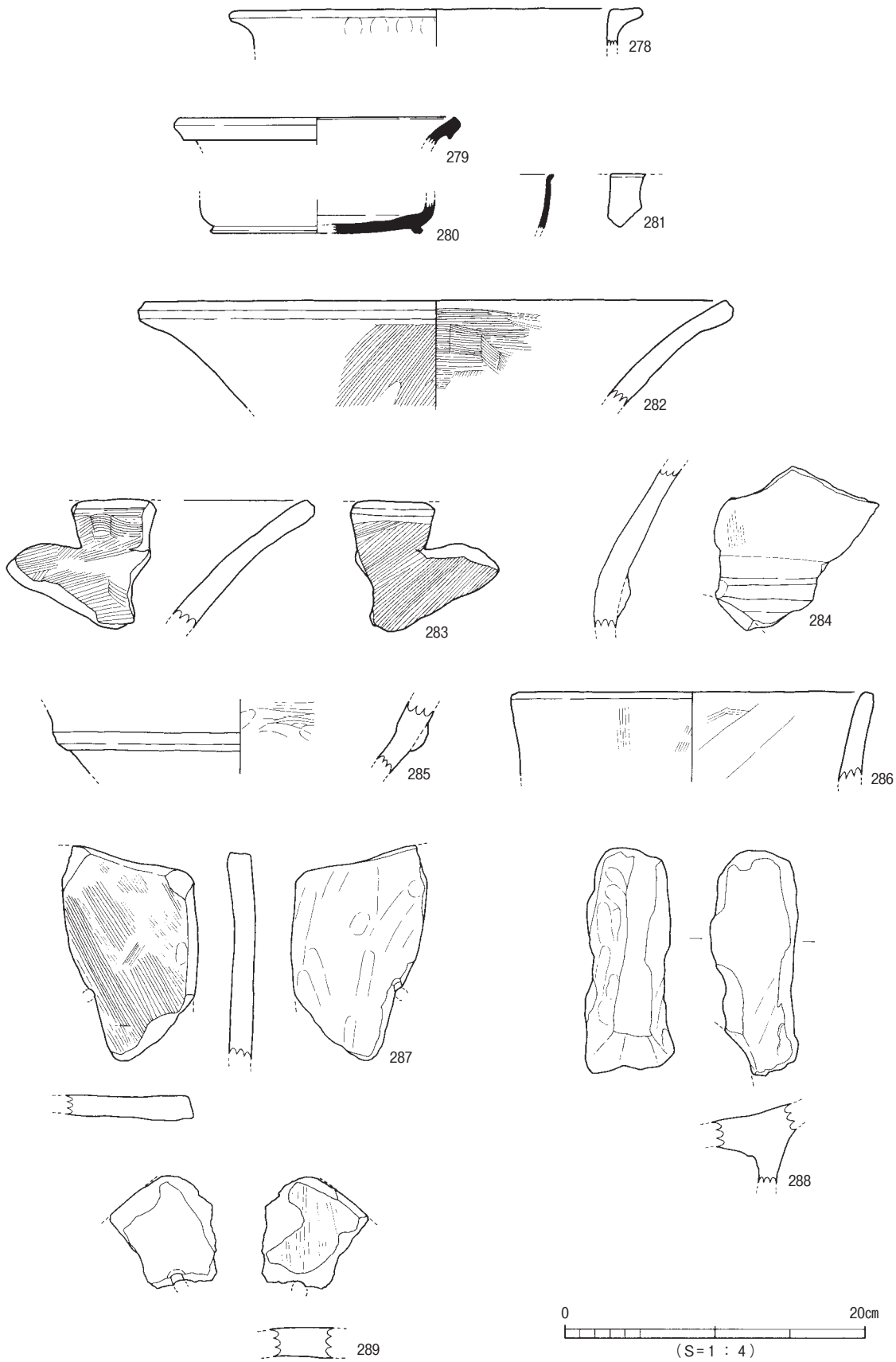
円筒埴輪（300～302） いずれも底部あるいはその近辺の破片である。端部が遺存する302の内面には指頭痕が顕著である。

**土師器**

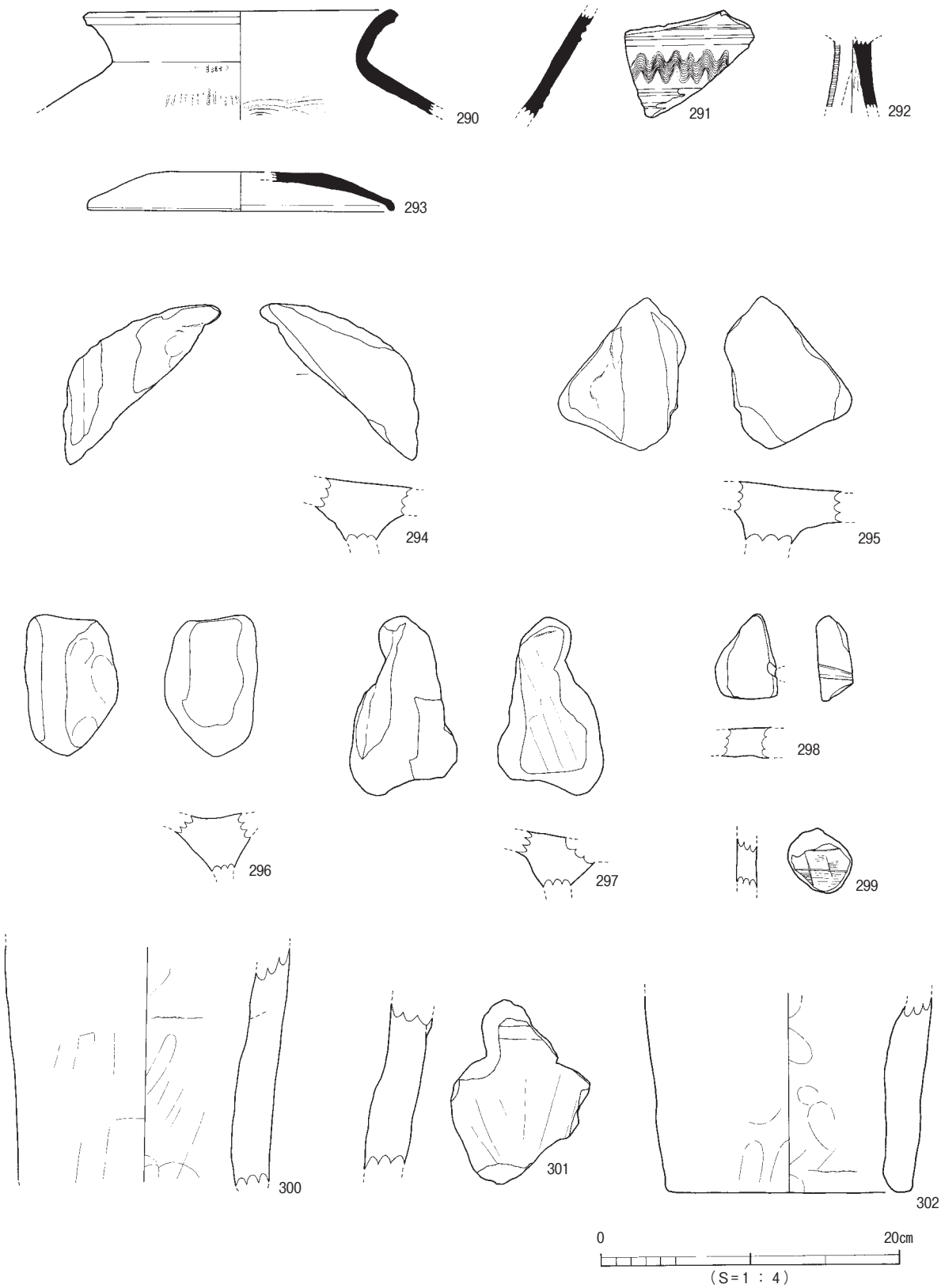
甕（303） ボウル状に開く胴部に、内湾しながら外上方へ開く口縁部を持つ12世紀頃のものである。

**瓦器**

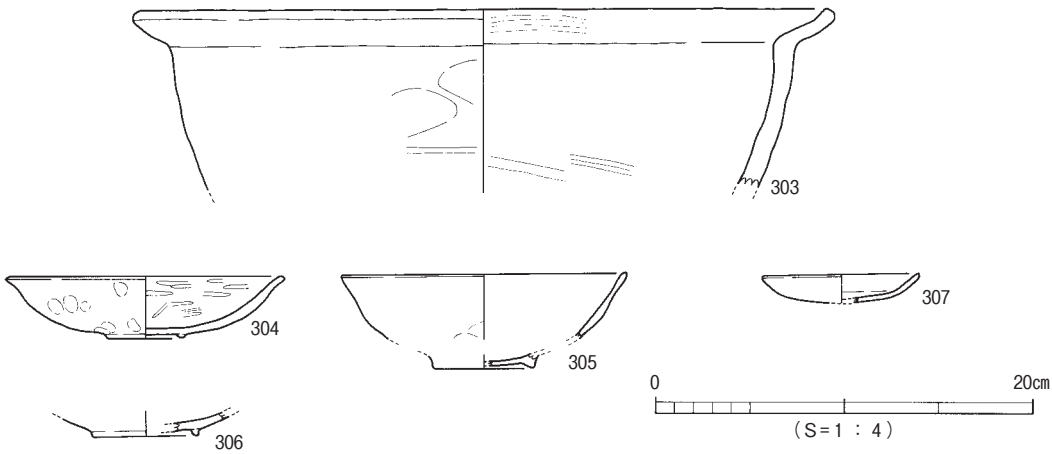
椀（304～306） すべて和泉型である。304は器高3.3㎝、口径14.4㎝、灰白色の焼成で外面に指頭痕が顕著である。13世紀中～後半のもの。305は同一個体の口縁部と底部片である。赤みを帯びた器面に炭素が吸着している。306は底部片、断面方形の貼り付け高台を持つ。




**第56図　1号墳丘出土遺物**




**第57図　1号墳周溝出土遺物（1）**




**第58図　1号墳周溝出土遺物（2）**

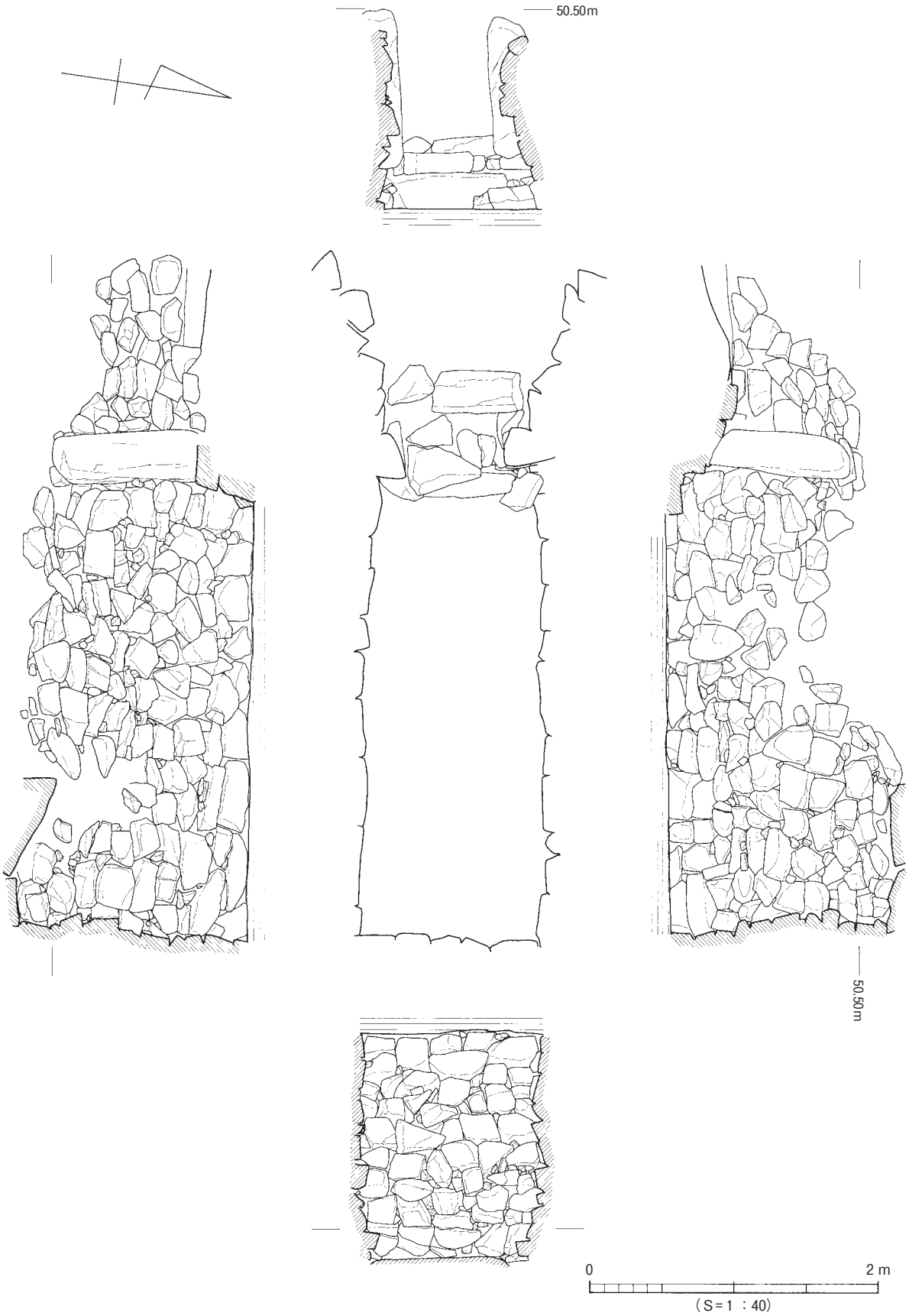
**陶器**

皿（307）　暗赤褐色に焼成された焼き締めの灯明皿である。

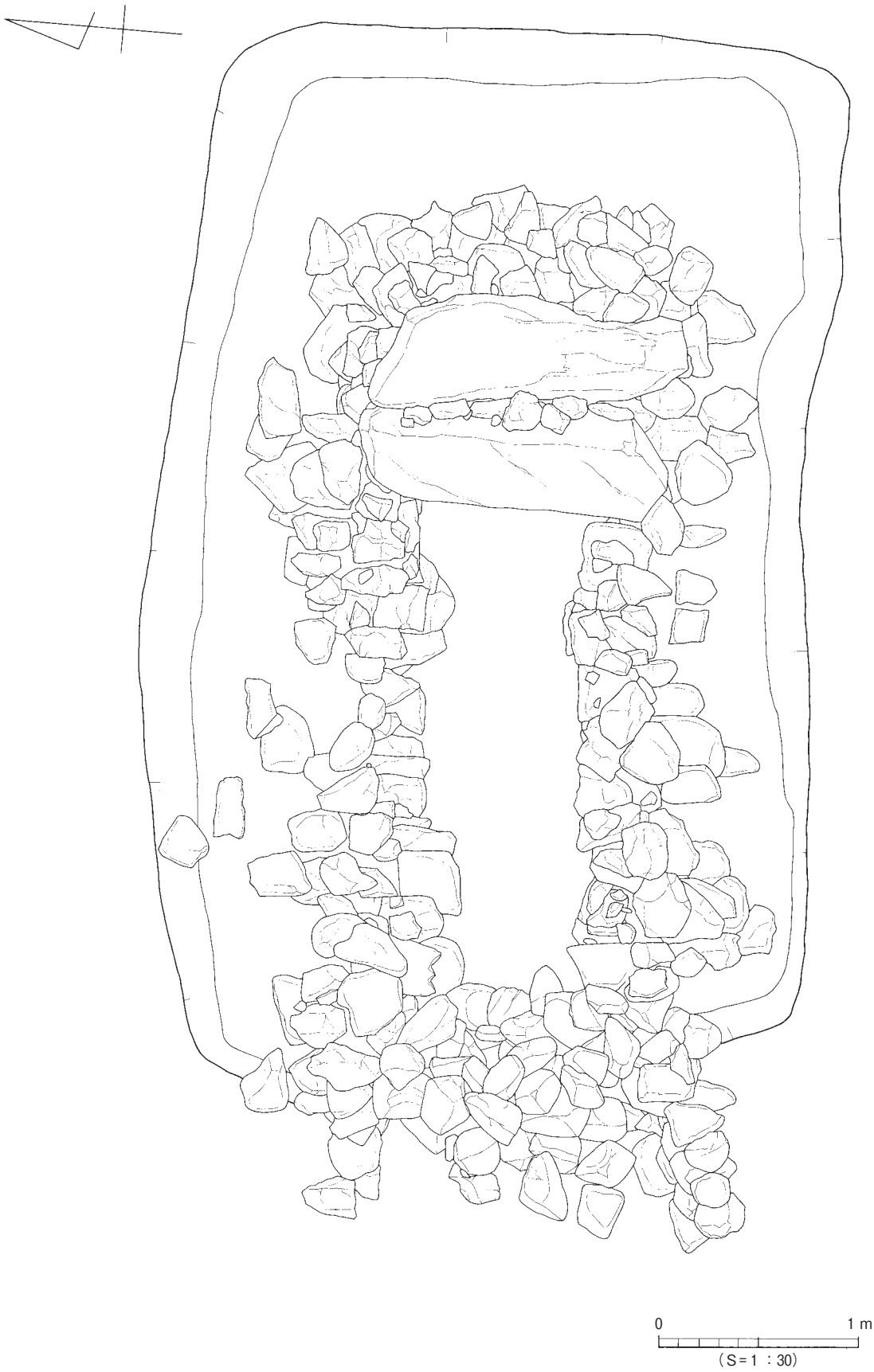
### d．主体部（第59～62図）

主体部は、塊石積み上げによる両袖形の横穴式石室である。地山整形の後墳丘盛土を20～30㎝積み、この面から掘り込んだ墓壙の中に構築されている。墓壙はおよそ5.3×3.2m規模の長方形、盛土面からの深さは0.8m程度である。石室全長は4.2m、うち玄室長3.0mで玄室最大幅は奥壁部で1.25mを測る。幅は玄室中ほどで1.2m、玄門部近くで1.15mとほぼ長方形に近い平面プランをなす。玄室高は奥壁部で1.55mとなっているが、残存側壁からみると天井はほぼフラットであったものと思われる。また玄門部の立柱の天場までの高さが1.3m程度であるので、天井より1段低い楣石がこの部分に架かっていたものと思われる。現状は奥壁側の2枚の天井石が架かった状態で残り、3枚目は半分に折れた状態で石室内に落ち込んでいた。この3枚で玄室長軸の中ほどよりやや奥寄りまでカバーできている。墳丘上にはいずれも天井と思われる4枚の石材が集積されているので、これらの7枚すべてで玄室天井および玄門部天井を構成していたものと考えられる。そのサイズや、閉塞部側壁壁体の構造からみると、天井が架かっていたのは玄門部までであったものと思われる。また、天井取り外しや落ち込みの際に両側壁も一部崩落している。側壁や奥壁にはほとんど持ち送りはない。使用されている石材には、砂岩と緑泥片岩があり、壁体の多くには砂岩、天井や袖石など大型の部材が必要な部分には緑泥片岩が用いられている。

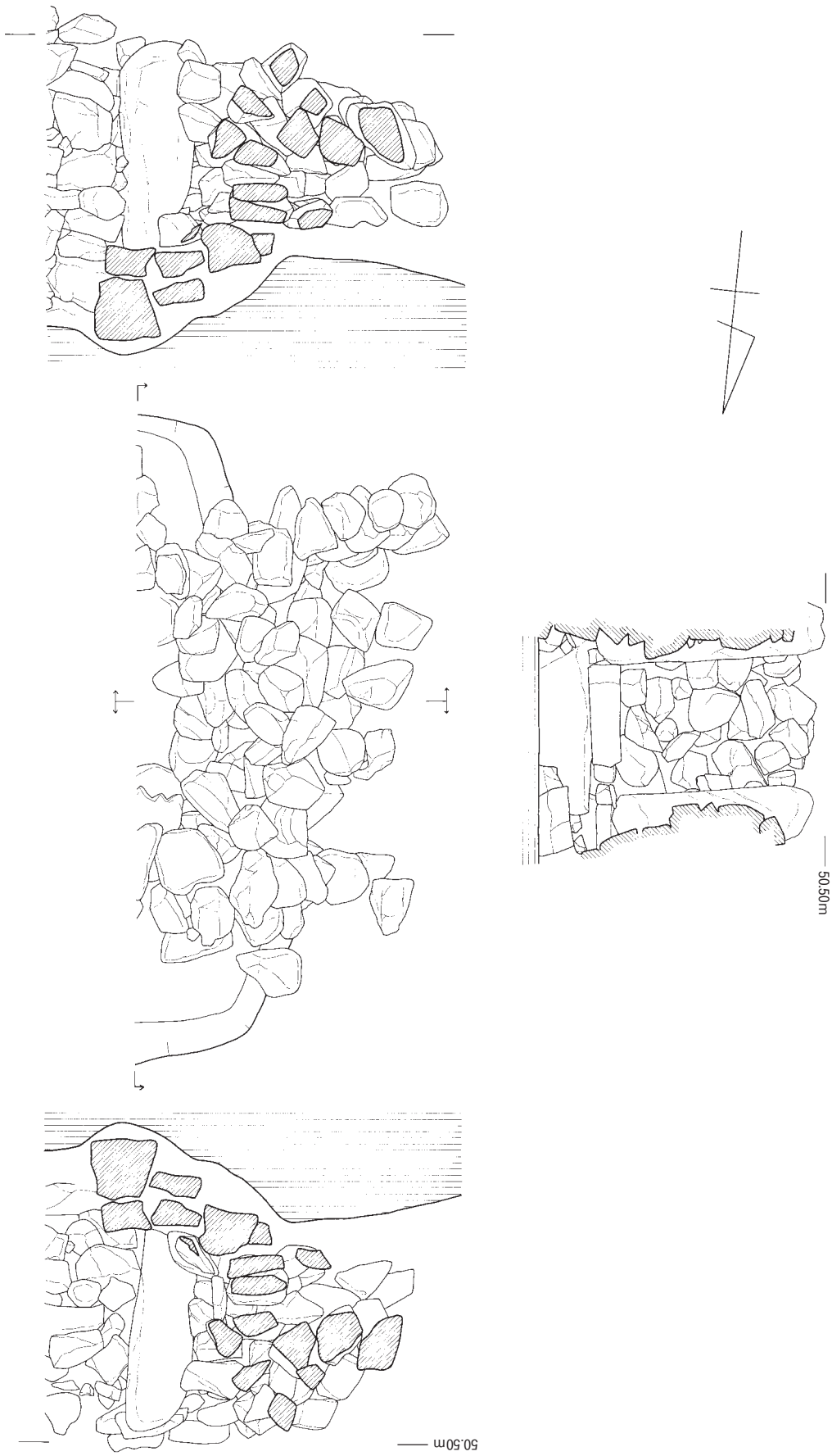
玄室への進入は玄門部の段を降りる構造となっている。この段の外側の位置に墓壙の掘り方があり、閉塞部は墓壙の外側にある。段は2石を積んで構築されており、床面との高低差は0.4mある。玄門北側では上下の2石が階段状になっているが、中軸ラインより南では2石が玄室内側にほとんど面を揃える格好となっている。墓道のレベルはこの上段石の天場と同一面であるが、その入り口側の外側にやや高く、墓道から進むと框のように跨ぐ格好の配置でもう2石がある。横置きされた棒状の石材と人頭大の塊石が並んで配置されているが、棒状石材はやや傾いて不安定である。後述する閉塞の最下段の石であるのかもしれないが、これも段の一部と考えると玄室内床面との高低差は0.5mということになる。玄門部には円柱状の袖石を立てているが、これらの袖石は段の1段目を構成する基底石の上に立てられていて、段の上位の2段目は袖石に挟まれる格好で配置されている。これらの袖石より入り口部分には長さ1.2mの壁体が外開きのハの字状に接続しており、この施設に挟まれた状態で塊石が積み上げられ




**第59図　１号墳横穴式石室測量図（１）**




**第60図　1号墳横穴式石室測量図（2）**




第61図　1墳横穴式石室閉塞部測量図

**第62図　1号墳横穴式石室床面測量図**

閉塞となっている。先述のようにこの部分には天井は架からない。

玄室床面は、２～５㎝大の河原石を敷いた礫床となっている。玄室の入り口よりみて右側の、長さ1.5ｍ、幅0.8ｍのスペースに人頭大あるいはこれよりやや小ぶりな転石が散在している。集中する範囲は奥壁寄りの部分と玄室中ほどの部分の２ヶ所で、その天場のレベル差は５㎝内外に揃えられている。単純に床面礫の上に載っているわけではなく、礫床を窪めて設置するなどレベルを揃えたり安定させようとする意図が読み取れるので、これらの石は木棺の棺台として据えられたものと考えられる。

なお、調査終了後に石室を解体したところ、玄門左袖の立柱石材下端面にカキと思われる貝殻が複数付着していることが確認された。

### ｅ．主体部遺物出土状況（第63図）

副葬遺物は入り口よりみて左奥隅近くにひとつのまとまりがあり、この部分から棺外副葬品として子持壺・蓋のセット、提瓶および胴部に焼成後の穿孔を施された広口壺といった須恵器が横倒しの状態で検出された。広口壺には土師器高坏が脚部から入れ込まれ、口縁を塞いだ状態での出土であった。これらの土器の直近、鋒付近が広口壺口頸部下面に重なる位置で奥壁沿いに直刀が一振り横たわっている。この直刀近くの２ヶ所で銀製の刀装具の一部と思われる環状の遺物出土があったが、これらについては現在散逸して不明となっている。この直刀は棺上に置かれていたか、柄部を下にして右奥隅に立てかけられていたものと思われる。棺外副葬品のまとまりとしては左袖部に瑞、無蓋高坏、口頸部と脚部を欠いた壺といった須恵器、および鞍・轡・絞具といった馬具片がある。

棺内の副葬品と思われるものには奥壁近くの刀子、南側壁近くの鉄鏃、玄室中央部やや北よりで長軸に平行に検出された直刀一振りがあるが、この直刀については、その位置から棺外の棺側に置かれていた可能性も考えられる。

### ｆ．主体部出土遺物（第64～69図）

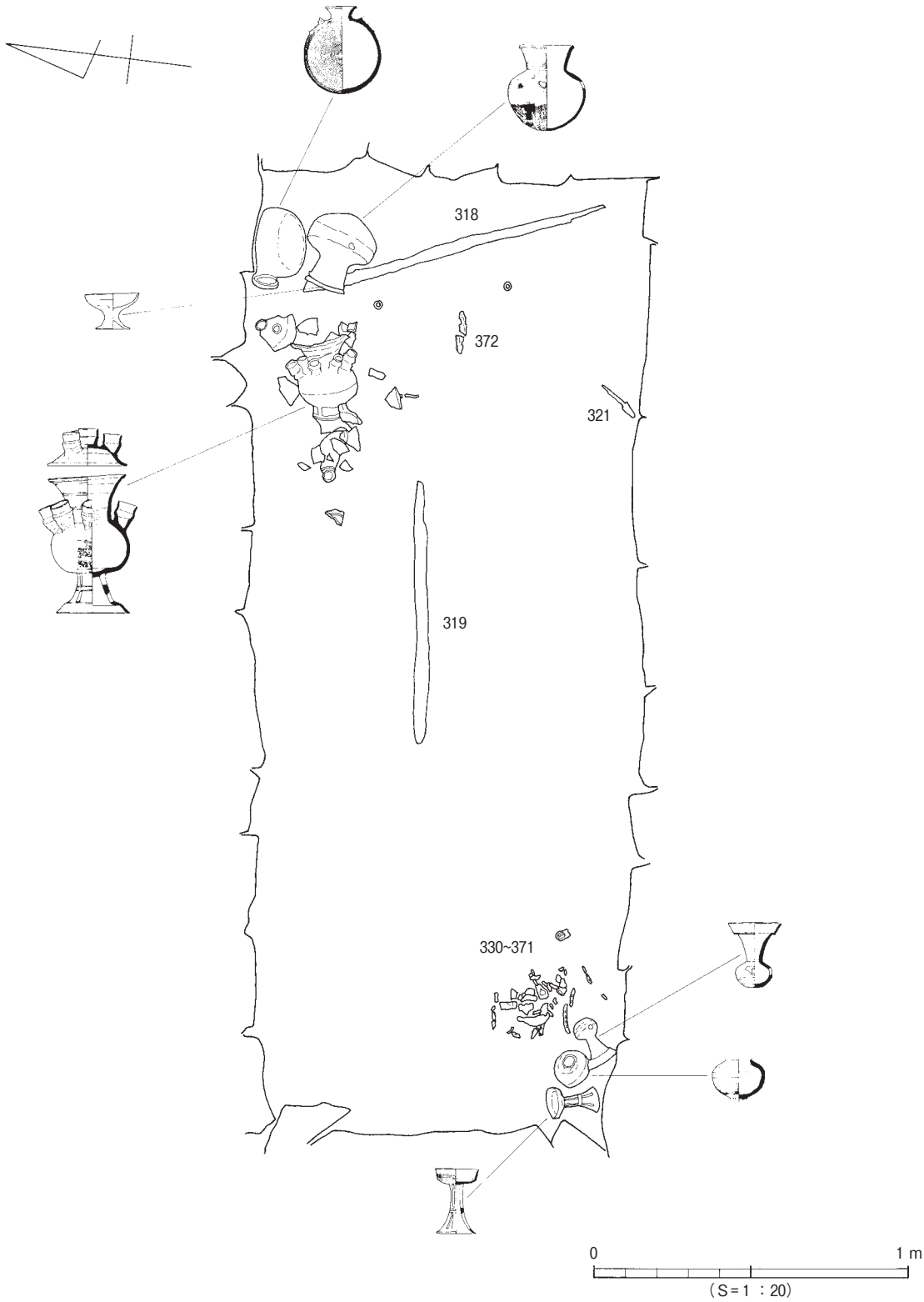
**須恵器**

坏蓋（308）　閉塞石下面の墓道床面で出土した小破片。閉塞工程で混入したものと思われ、この古墳での葬送に直接関わるものではないと判断している。天井部と口縁部境に稜を持ち、口端部は傾いた中窪みの面をなしている。

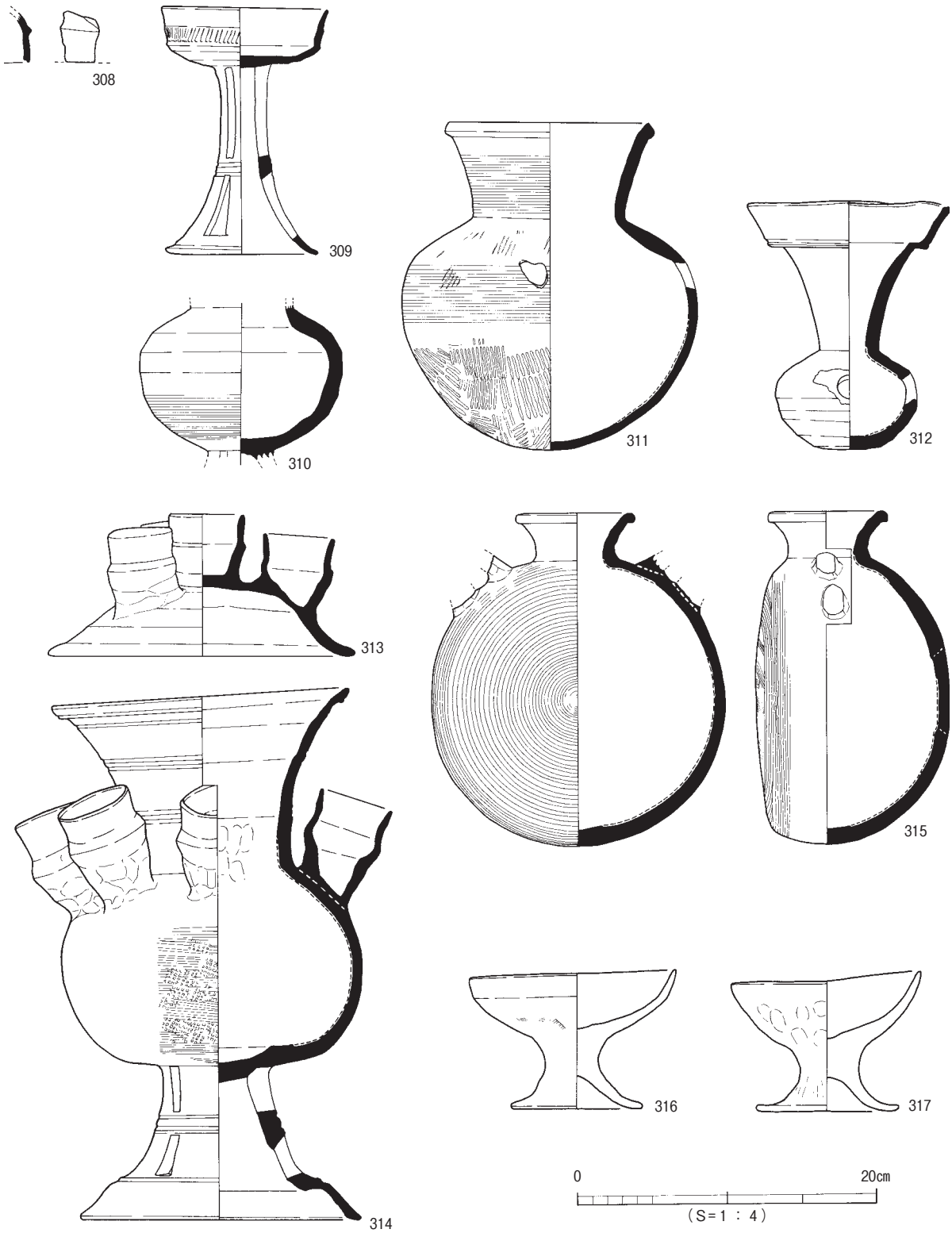
高坏（309）　器高16.5㎝、坏部口径11.1㎝、脚裾径10.2㎝を測る長脚二段透し無蓋高坏である。坏部は底部と口縁部の境、および口縁部中位に稜を持ち、これらの稜の間に斜線文を施す。脚部は中ほどよりやや下位に２条の沈線を持ち、この上下位の３方向に透しを施されている。脚端部は丸く仕上げられている。

壺（310・311）　310は口頸部と脚部を欠くが、脚付直口壺になるものと思われる。扁球形の胴部は底部周縁をカキ目調整されている。脚部との接合部には、３方向に透しの切り取りの痕跡がある。311は広口壺、器高21.7㎝、口径14.0㎝を測る。直線的に外上方へ開く口頸部は口縁端部がやや外反し、端部外面を肥厚する。頸部外面はカキ目調整されている。最大径19.8㎝の胴張りを上位に持つ胴部のこの部分には焼成後の穿孔が外面から行われている。外面の叩き痕は胴部下半を除いてカキ目やヨコナデによって撫で消されている。内面には当て具痕が残されている。玄室の入り口よりみて左隅部で、口縁部に土師器高坏316を脚側から入れ込まれ、塞がれた状態で横倒しになって検出された。

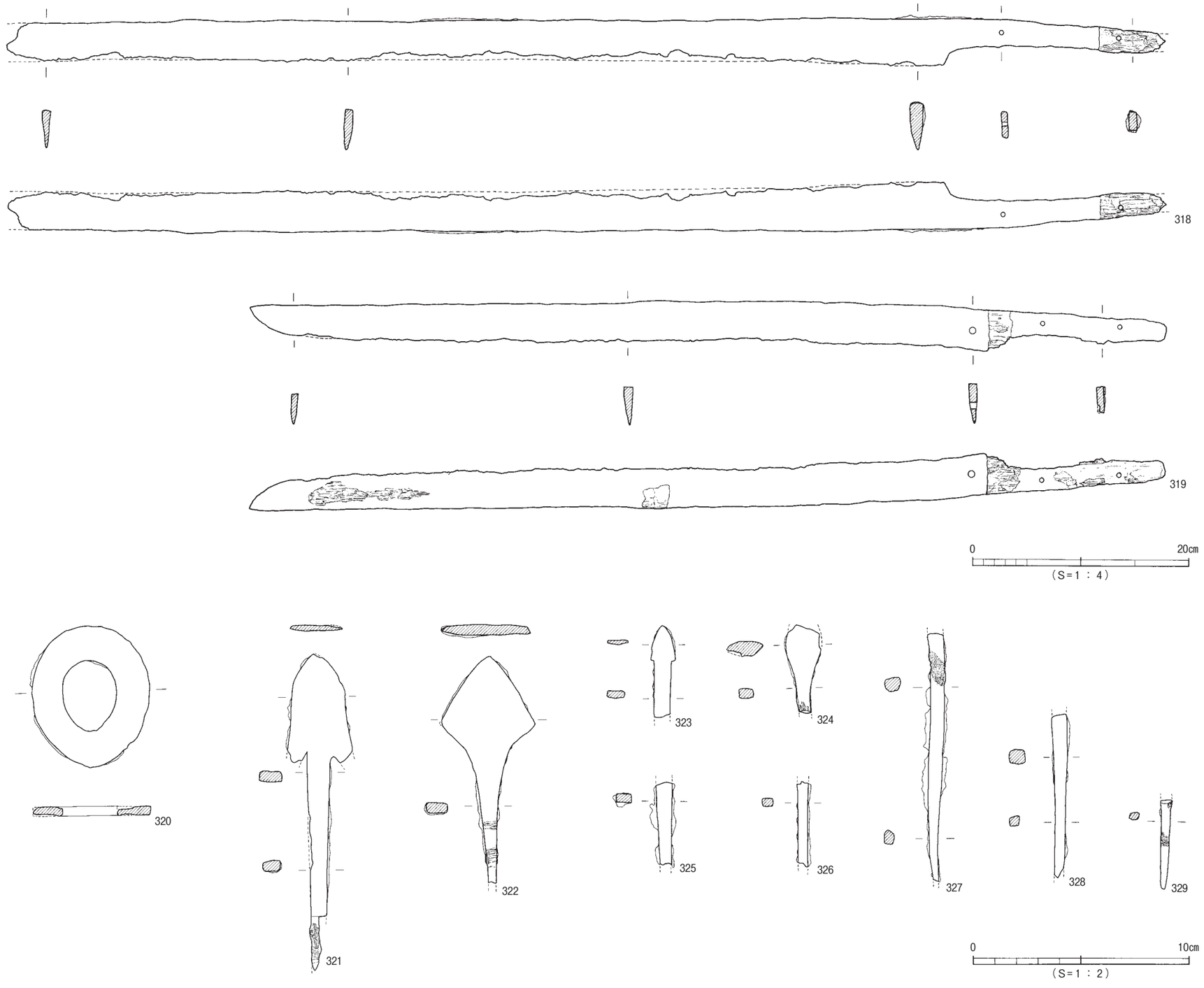
瑞（312）　器高16.5㎝、口径13.6㎝、長頸、無文の瑞である。小ぶりな胴部に長く大きく開く口頸部を持つ。口縁部は段を持って箱状に開いている。段の部分の外面に沈線が１条巡る。胴部外面、穿孔部周辺が剥離破損している。




**第63図　1号墳横穴式石室遺物出土状況**




第64図　１号墳横穴式石室出土遺物（１）




第65図　1号墳横穴式石室出土遺物（2）

子持蓋・壺（313・314） 蓋と壺のセットである。壺は脚付、広口長頸の器型で肩部に鍔を持たないタイプである。口縁部の一部を欠くが、復元口径19.8cm、器高35.5cmを測る。脚部には２条沈線の上下に二段透しが３方向に施されている。胴部は、本来、球形を目指したものと思われるが、自重で変形し、下膨れの篇球形状となっている。外面の叩き痕はカキ目やヨコナデによって撫で消されており、内面には当て具痕が残されている。肩部には７個の子壺が貼り付けられている。子壺は頸部で大きくはくびれずに口縁が短めの直口縁となる形状である。親壺の口頸部は僅かに外反しながら開くもので、口端部を外面に断面三角形状に肥厚している。口端部直下に１条、以下、頸部に２条単位の平行沈線が等間隔で２段巡っている。蓋は口径20.4cm、器高9.5cm、親器は口縁部が外反する椀を伏せたような形状である。壺と同形態でひとまわり小ぶりな子壺が、中心の１個のまわりに３個配されている。

提瓶（315） 器高22.2cm、口径8.0cmを測る。胴部正面観はほぼ円形、側面観は表面が膨らみ、背面は扁平である。口頸部は短く外反し、端部を外面に丸く肥厚している。肩部の把手は折れたり、擬口縁で剥離して失われているが、環状の把手であったものと思われる。胴部は同心円状のカキ目調整されているが、背面の中央部周辺のカキ目は不定方向に粗く施されている。

**土師器**

高坏（316・317） 同形態、ほぼ同法量の２点である。316は先述の須恵器壺311とセットになって出土したもので、器高9.3cm、口径13.8cmを測る。椀状の坏部に柱部が中実の短い脚部を持つ。317は器高9.4cm、口径12.5cm、石室内崩落土中から出土したものである。

**武器**

直刀（318・319） 318は残存長107.3cmのもの、現況で鋒が確認できないのでさらに長く、復元長110cmを超える長大なものである。茎長20.3cm、刃区に近い部分に目釘孔が１ヶ所あり、茎尻近くの木質遺存部分に１ヶ所目釘が残っている。319は全長85.2cm、区は刃側にある。長さ16.8cmの茎に２ヶ所の目釘孔があり、刀身の鏑元にも１ヶ所ひとまわり大きい孔がある。当地方でのこのような刀身構造を持つ例は、東山鳶ケ森２号墳の、全長およそ120cmの長大な直刀に１例がある。

鍔（320） 長さ6.5cm、幅5.5cm、厚さ0.4cm、やや幅広の倒卵形で現況では鍍金等はみられない。鉄製で、窓や透しも持たない単純な拵えのものである。

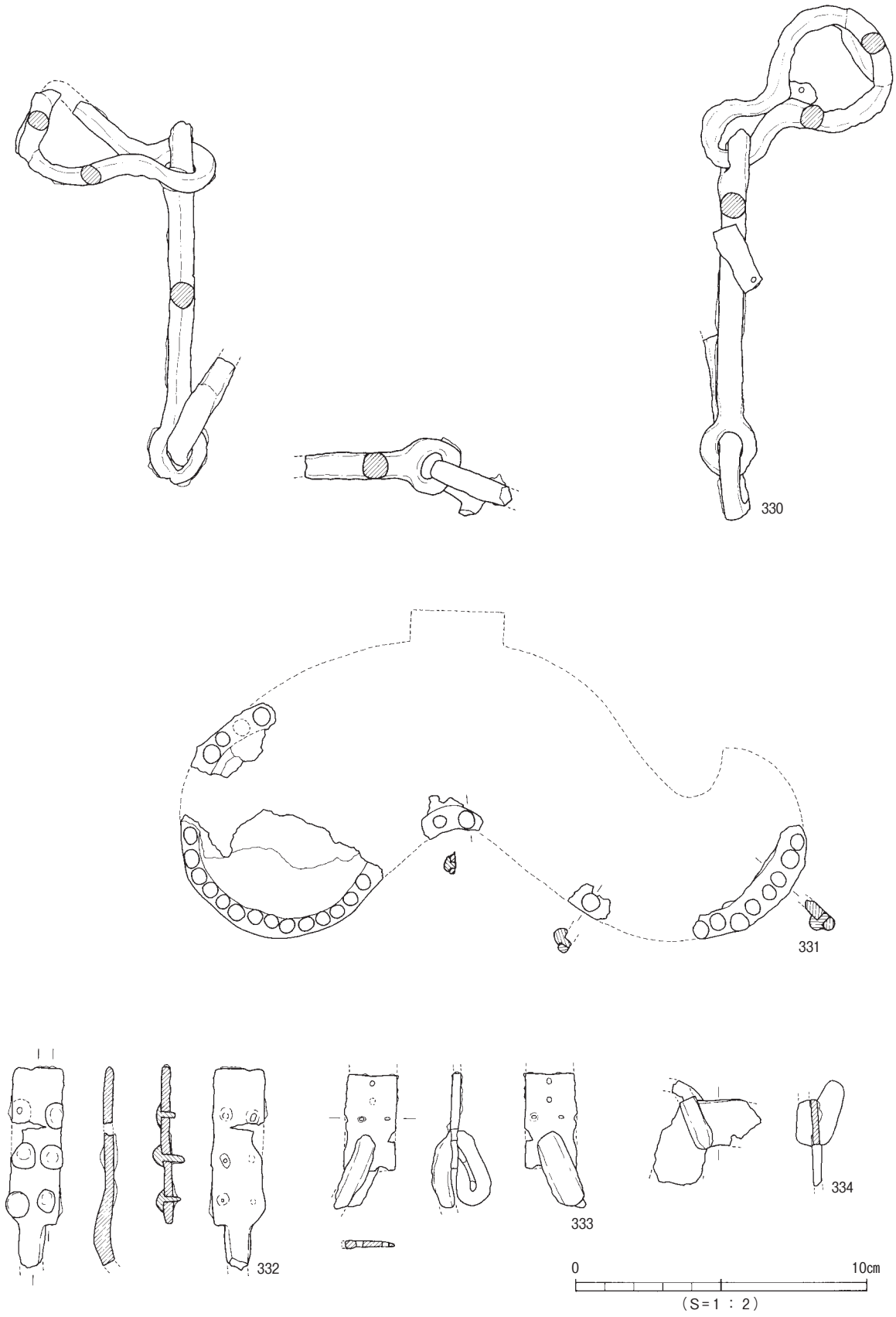
鉄鏃（321～329） いずれも平根式の鏃である。321は現状で長さ14.6cm、最大幅3.0cm、重量17.1ｇ、長三角形の腸抉式で逆刺を欠いている。322は茎を一部欠く広根鏃、長さ10.5cm、幅4.3cm、重量20.1ｇを測る。323は鏃身長1.6cmの三角形鏃、324は鏃身が菱形もしくは紡錘形を呈するものである。その他は箆被から茎にかけての片で、329のみが茎端部片となっている。

**馬具**

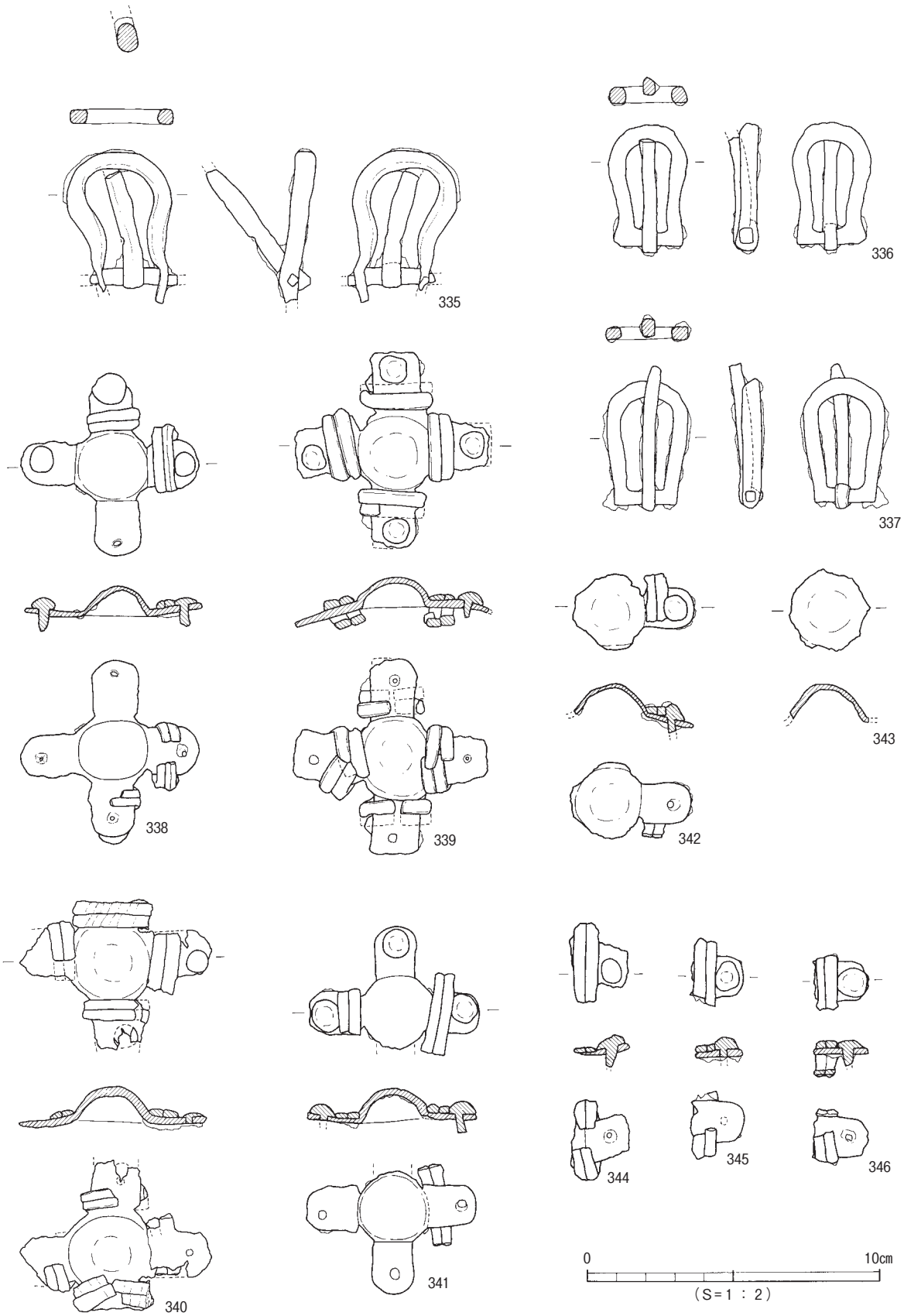
轡（330） 引手と銜が３つのパーツの破片となって出土している。引手はともに引手壺および銜先環部分が銹着した状態である。復元される引手全体の長さはそれぞれ18.7cm、19.6cmと若干の長短がある。

鏡板（331） 鉄地金銅張の鏡板片５点である。ｆ字形鏡板となるものと考えられ、図のように配置した。遺存状態が悪く、細かい拵えは観察しにくいが、縁金にも緑青が被っている部分が僅かにあるところからみると、地の鉄板の縁に縁金を置き、金銅箔を被せて縁金の下に折り込み、縁金と鉄板の間に挟んだ後、鉄鋲を打って留めたものと思われる。鋲は0.6～0.8cm間隔で打たれている。

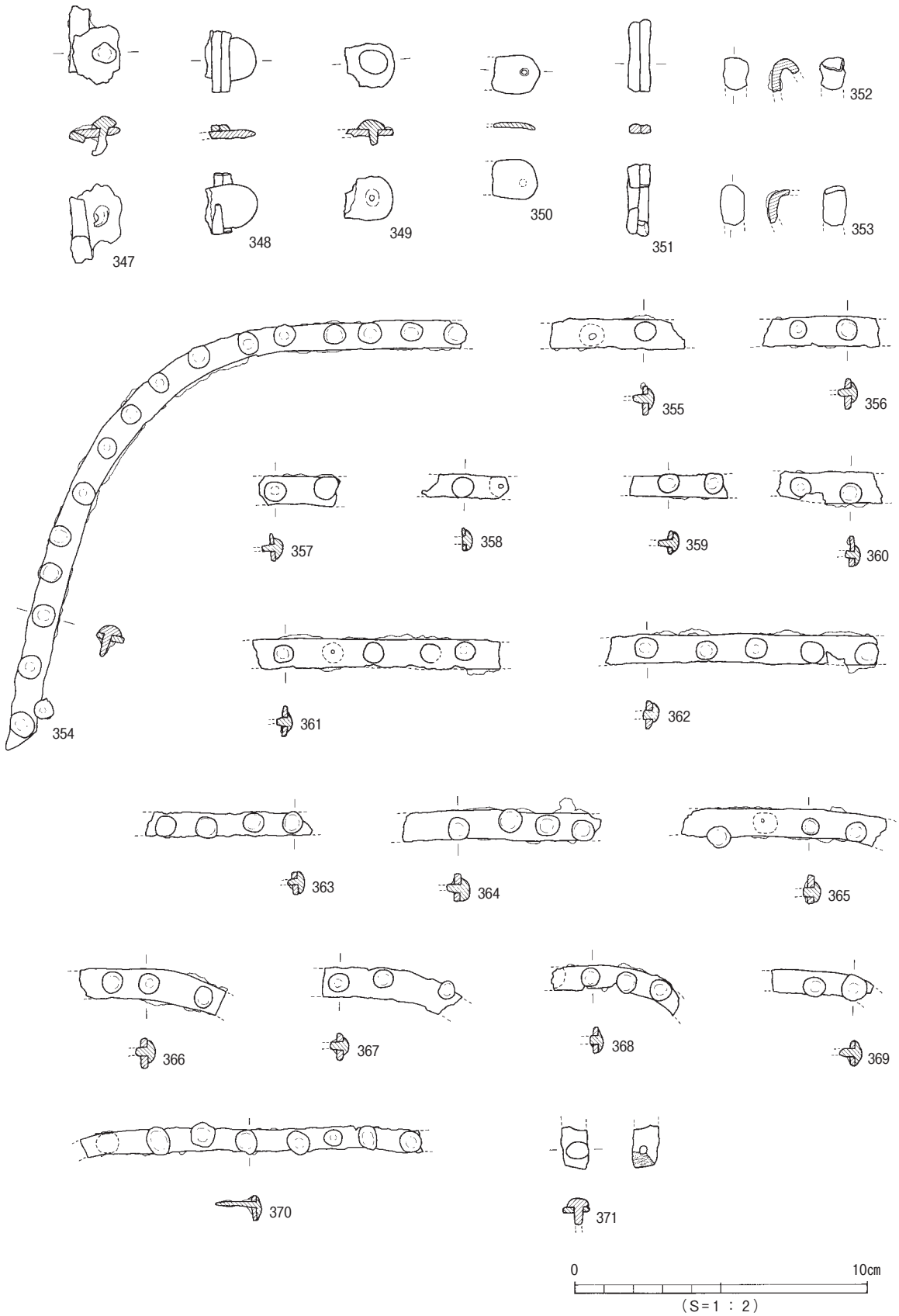
釣舌金具（332） 釣手部分が破損している。幅1.7cm、長さ5.4cmの鉄板に釣手部分が突出して作り出されるもので、厚さは0.3cm、２列並列で３個ずつ、計６個の鋲が打たれている。鏡板に組み合う




**第66図　1号墳横穴式石室出土遺物（3）**




**第67図　1号墳横穴式石室出土遺物（4）**




**第68図　1号墳横穴式石室出土遺物（5）**

ものかもしれないが、金銅張の痕跡はない。

釣金具（333）　馬具のどの部分を構成する部材かはわからないが、鋲孔を持つ幅1.7cmの鉄板の端部に近い部分の孔に、幅0.7cm、厚さ0.3cmほどの鉄棒を通し折り曲げて何かの部材を釣ったものと思われる。折損しているが、現況で鋲孔は図示した位置に４ヶ所確認できる。

立聞(334)　鏡板もしくは杏葉の立聞部分と思われる鉄板部材と折り曲げられた鉄棒が銹着している。

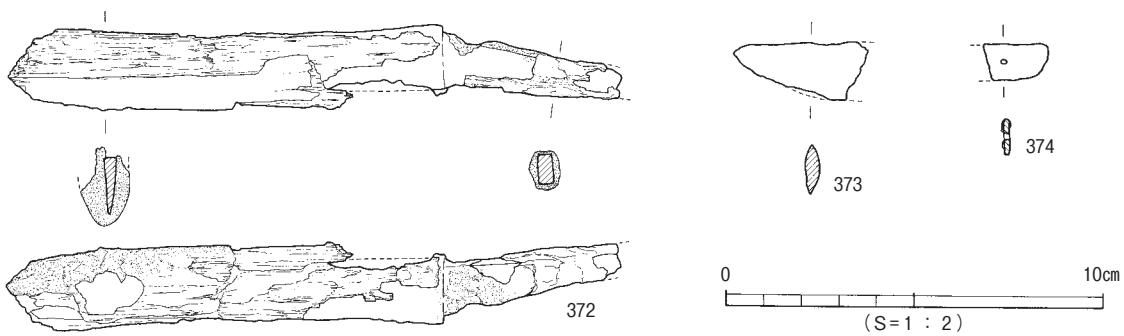
絞具（335～337）　鉄製のものが３点あり、336・337はほぼ同大、335はこれらよりやや大きい。形態からいうと335・336が似た形で、輪金の形状がややくびれた瓢箪形となっているのに対して、337は単純な馬蹄形である。

辻金具（338～353）　有脚半球形辻金具で、鉄地金銅張である。状態のよい338～341でみると、鉢は断面半球形、脚は４脚で舌状を呈する。組み合う責金具は２条一組となっている。340の責金具には刻み目が確認できる。351～353の責金具もこの種の辻金具に伴うものと思われる。

縁金具（354～371）　鞍の磯金物に伴う鉄製の縁金具である。幅1.0cm、厚さ0.2cmの鉄板に1.5～2.0cmの間隔で鋲を打っている。354は、下端部からコーナー部を経て上辺に至るまでの片で、端部は斜めにカットしてある。371の裏面の一部には木質が付着している。

**工具**

刀子（372～374）　373は現存長16.3cmのもので、木製の鞘に収まった状態である。未分析のため鞘材の樹種は不明である。茎の長さは4.7cm、これも分析はされていないが、鹿角と思われる把が一部残存している。茎と刀身の境には棟側に区がある。373は鋒の片､374は茎尻近くの片で､目釘孔が１ヶ所確認できる。




**第69図　１号墳横穴式石室出土遺物（６）**

## （３）３号墳の調査

### ａ．経過

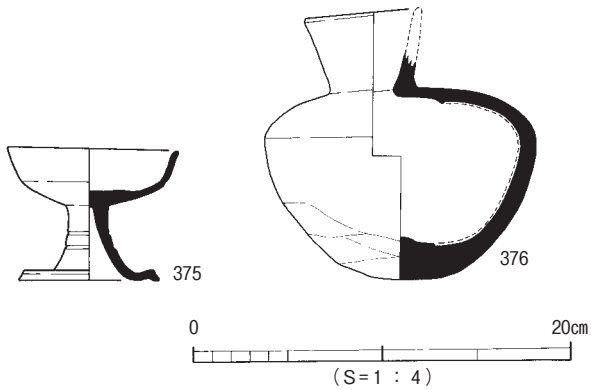
確認調査開始より間もなくの平成元年８月末、Ｃ区斜面に南北トレンチを１本設定して表土掘削中、後述する良好な遺存状況の須恵器平瓶と高坏を採集した。付近に人頭大の河原石数点も検出され、出土地点周辺に古墳の存在が予想された。トレンチ掘削は、この段階で一旦とりやめ、その他の区の確認作業終了を待ってあらためて調査を行うこととした。調査が開始されたのは、調査期間終了も近く、１号墳の調査が終了した後の平成２年５月中旬であった。

### b．試掘調査出土遺物（第70図）

**須恵器**

高坏（375）　器高7.1cm、口径9.0cm、脚裾径7.1cmを測る小型の高坏である。坏底部と口縁部境に１条、脚柱部中位に２条の沈線を持つ。脚裾部は大きく屈曲して外へ開き、端部に外斜した凹面を持つ。この屈曲部と裾端部の両方で接地する。

平瓶（376）　器高14.4cm、口径6.0cm、口縁部を一部欠失している。丸底で上位に張りを持つ胴部、やや偏した位置に直線的に開く口頸部を設けている。口端部は単純に丸く収める。底部はヘラ切り未調整のまま成形して丸く仕上げている。



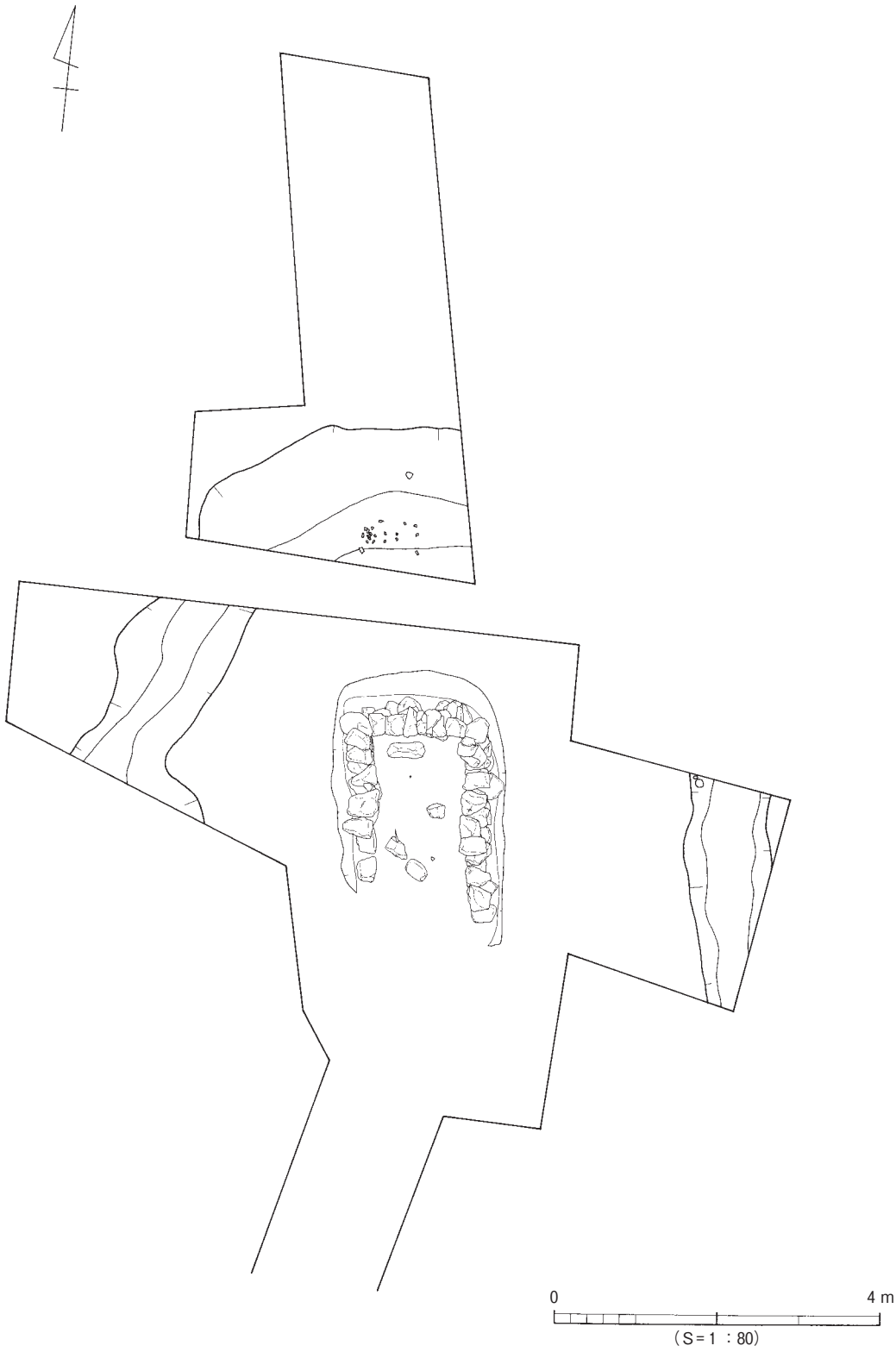

**第70図　試掘調査３号墳出土遺物**

### c．墳丘・周溝（第71・72図）

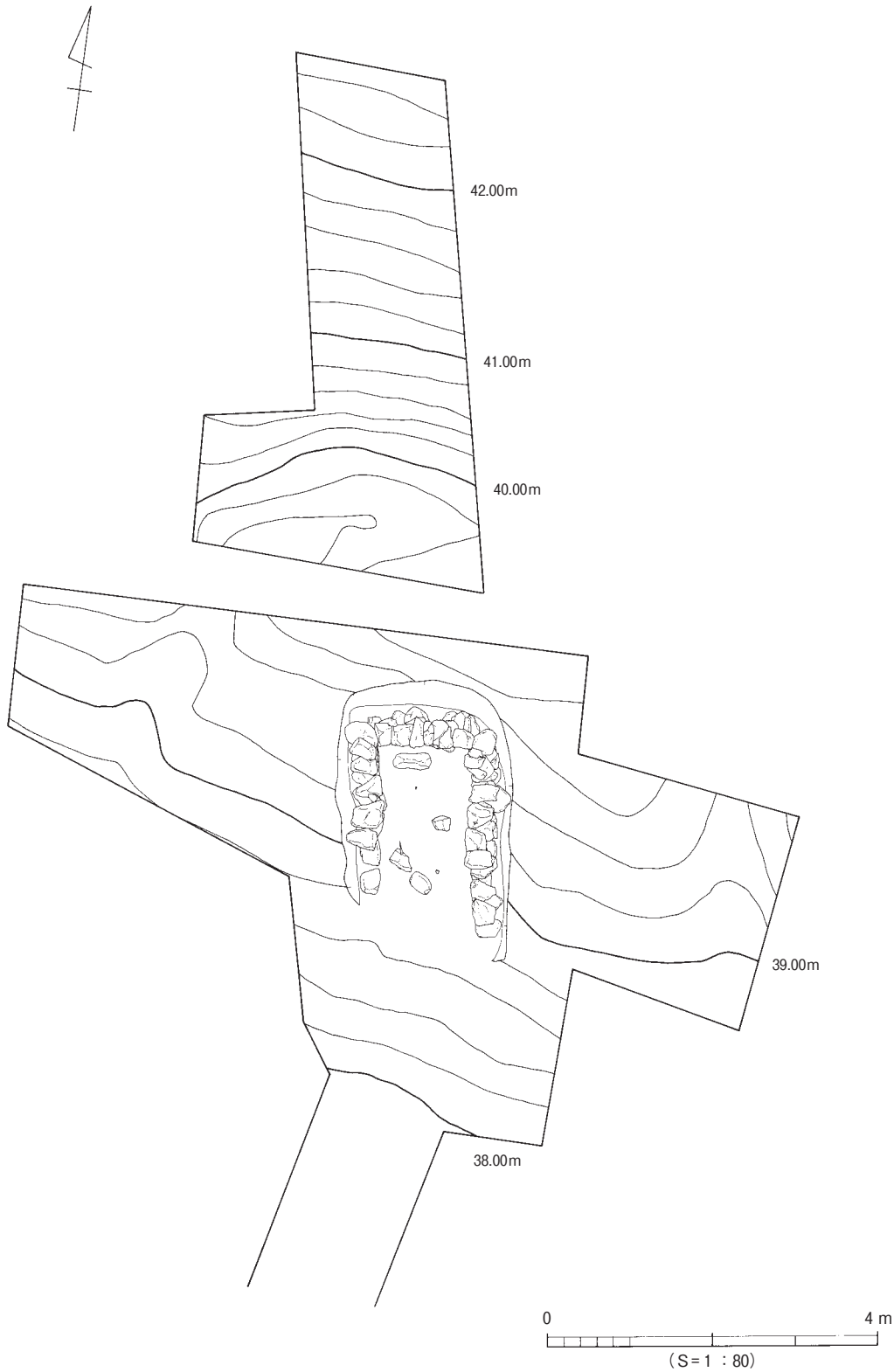
古墳はＣ区東西稜線を南にやや下った斜面、標高39m付近に存在する。日程上調査前の微コンター測量は行われなかったが、表面観察上これといった墳丘の盛り上がりはなく盛土も残存していない。たまたま設定したトレンチの地山面において主体部と周溝の一部が検出されたことにより古墳の存在が判明したものである。図示した発掘区での調査に終わっているが、主体部である南北主軸の横穴式石室とその北、東西で周溝が検出された。開口方向である斜面下方の南側では周溝は検出されていない。斜面上方にのみ馬蹄形状に周溝を設けた直径７～８ｍ程の小円墳であったものと思われる。

### d．主体部（第73・74図）

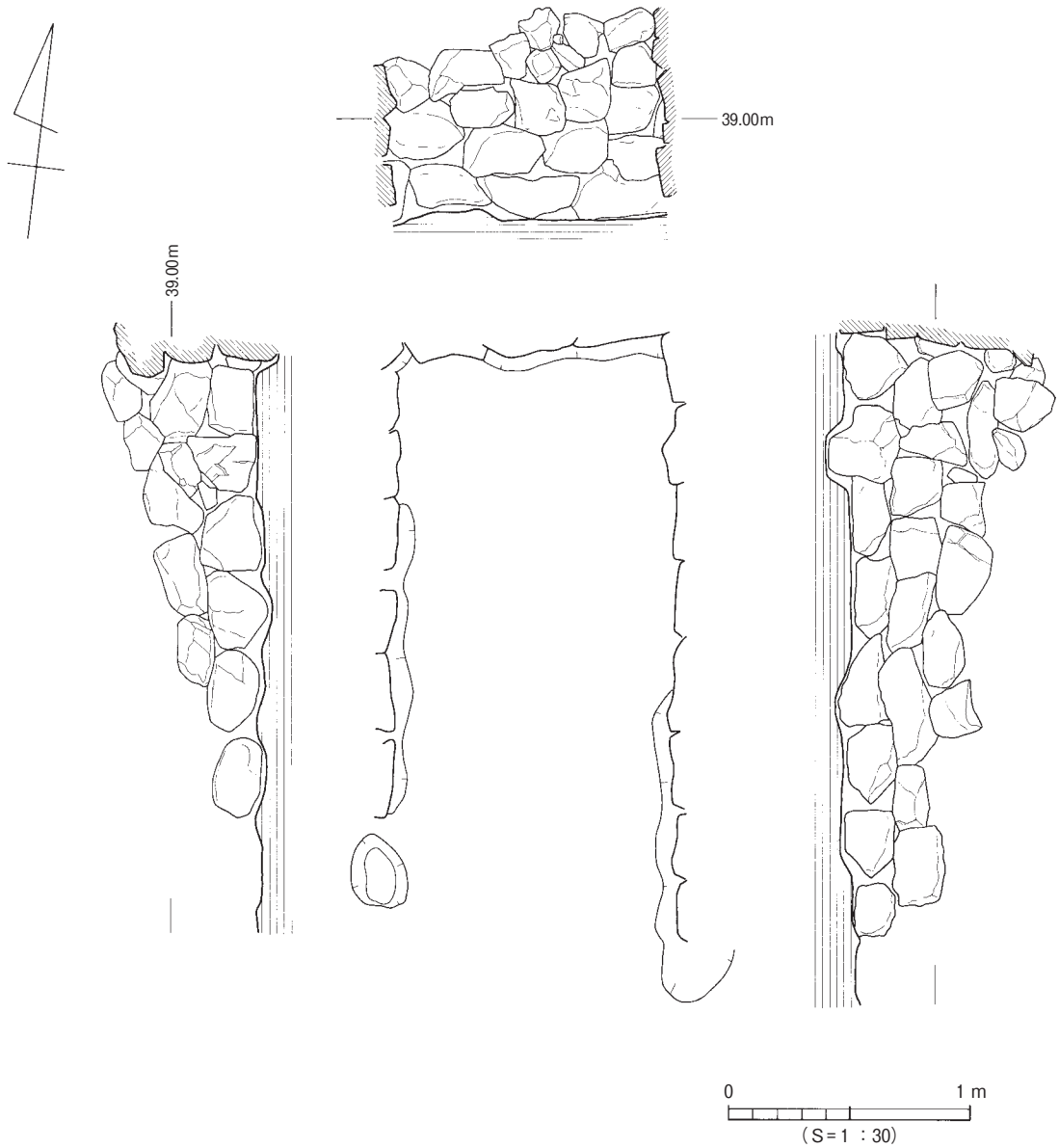
主体部は塊石積み上げによる横穴式石室であるが、斜面の傾斜に沿って北の奥壁側から南の開口部にかけて、墓壙・床面とともに斜めに削ぎとられたように削られている。石室残存長2.3m、幅1.0m、残存高は最も残りのよい奥壁部で0.75mとなっている。削平のため入り口部分の構造は不明である。主軸より西側壁寄りの床面に30～50cm大の自然石が４個分布しており、棺台として置かれたものと思われる。




**第71図　3号墳調査後墳丘測量図（1）**




**第72図　3号墳調査後墳丘測量図（2）**




**第73図　3号墳横穴式石室測量図（1）**

### e．出土遺物（第75図）

遺物については、周溝から出土したもの、主体部掘り下げ時に埋土から出土したもの、主体部床面あるいはその近くから出土したものなどがあるが、ここで一括して扱うことにする。

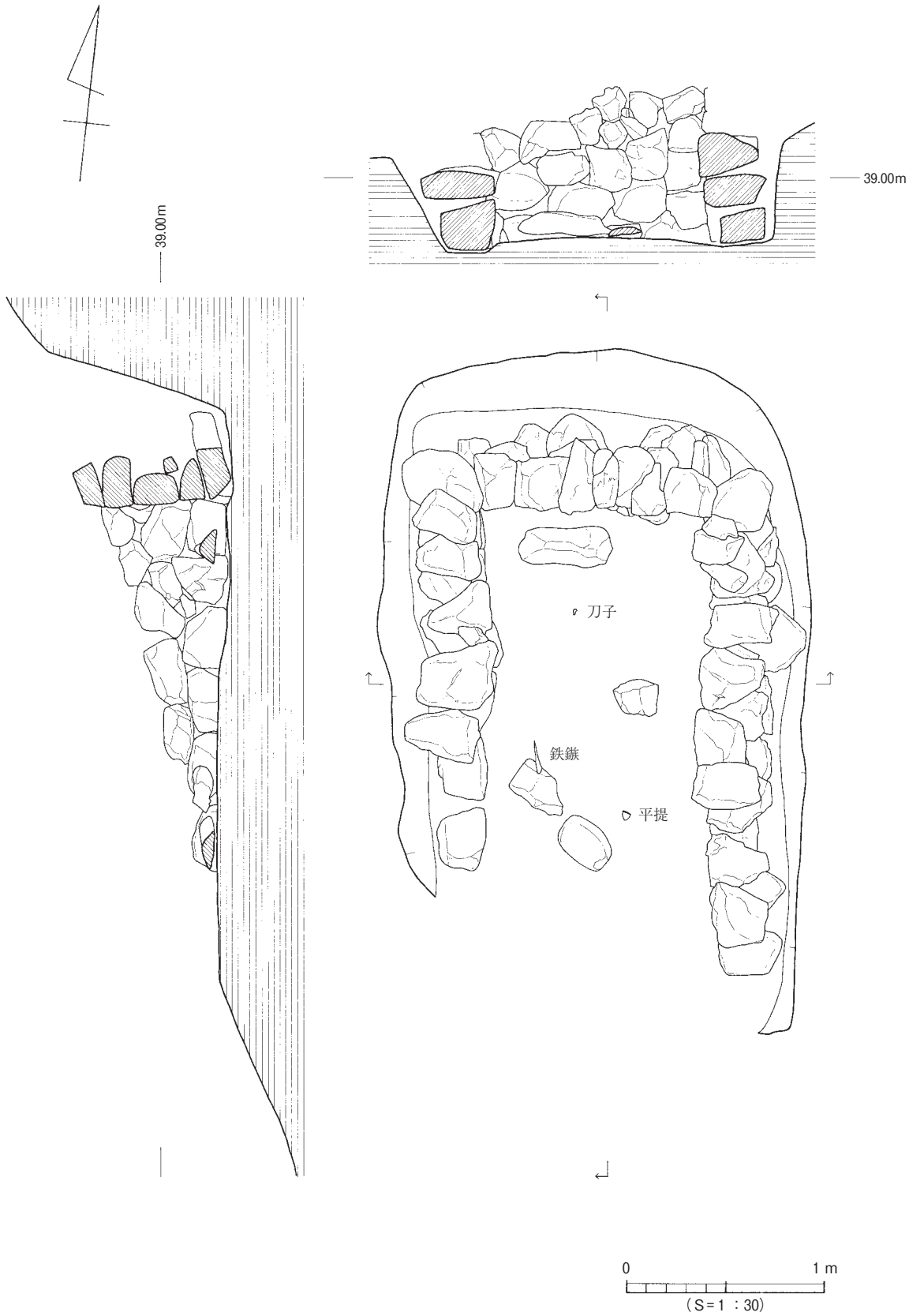
**須恵器**

短頸壺（377）　墳丘東側の周溝から出土した有蓋短頸壺である。器高8.1cm、口径6.8cmを測る。緩やかに外反しながら短く立ち上がる口縁部形態をなし、肩部に1条の沈線を持つ。焼成時に被っていた蓋の痕跡から、蓋の口径は8cm前後であったものと思われる。

平瓶（378）　提瓶であるかもしれないが、玄室入り口寄りの床面から出土した口縁部片である。やや内湾気味に開き、口端部を丸く収めている。復元口径5.8cm。

**武器**

鉄鏃（379・380）　379は玄室内入り口寄り床面の棺台石に寄りかかるようにして検出された。全長




**第74図　3 号墳横穴式石室測量図（2）**

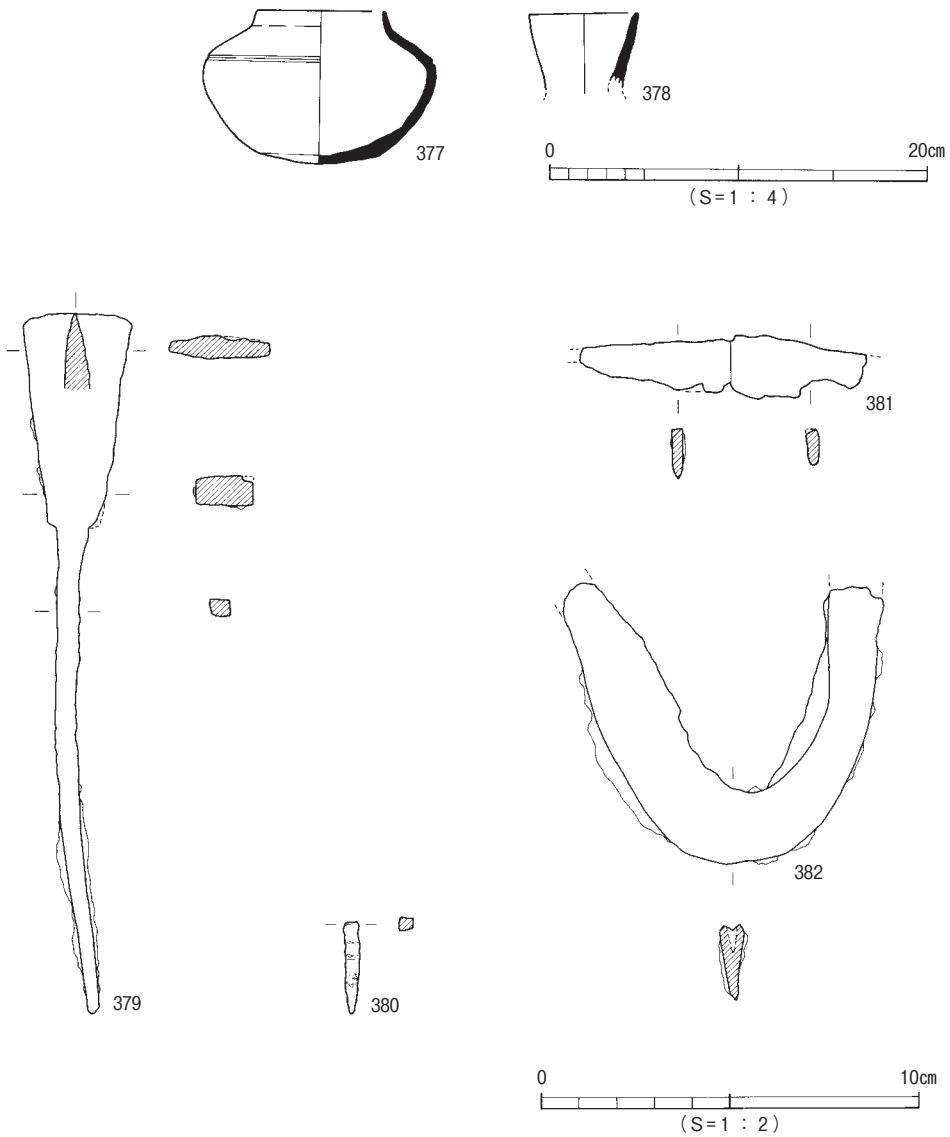
18.5cmの方頭鏃、鏃身長5.7cm、茎長12.8cmと茎部が非常に長いのが特徴である。現況重量28.6ｇを量る。380は埋土中から出土した茎部片である。

**工具**

刀子（381） 玄室床面奥壁寄りの棺台石近くで出土したものである。鋒と茎尻を僅かに欠いている。刃渡り５cm以下の小型のものである。

**農具**

鋤先（382） 片側の基部を折損しているが、おおよそ全長7.5cm、最大幅8,5cmの小型のものである。石室埋土からの出土。




**第75図　３号墳出土遺物**

# 第４節　まとめ

調査が行われてから25年が経過した。縄文時代晩期から奈良時代までの遺物を点的に確認・採集をしたが、部分的な遺物採集に終わってしまっている。本報告で資料としての遺物紹介を行ったことで責の一端を果たすこととしたい。

古墳は２基を調査した。１号墳は御産所古墳群の中にあって周知されていた４号墳に該当する可能性が高い古墳である。両袖形の横穴式石室を主体部とする直径14mの円墳で、墳丘や墳裾からは器財埴輪を含む埴輪片、石室内からは須恵器、土師器、馬具、武具、工具などが出土した。装身具の出土はない。人骨の出土もないが、棺台として据えられたと思われる自然石が入り口よりみて右側に分布しており、遺物はこのスペース以外の部分に配置されている。したがって、被葬者は組み合せ式の木棺内あるいは板状の葬具上に寝かされてこのスペースに安置されていたと考えるのが最も考えやすい。組み合せ式木棺であった場合、北梅本町所在葉佐池古墳１号石室のような緊結金具を用いないものであったと思われる。副葬遺物のまとまりは玄室奥と玄門袖側の２ヶ所にあり、いずれも概ねＴＫ43型式、６世紀後半代の範疇におさまるものである。同一器種を欠くうえ、子持壺・蓋のような特殊な器型のものがあったりと、細かい新古を云々するのは難しいが、袖側の長脚二段透し無蓋高坏や長頸無文の瓿と奥側の提瓶、広口壺とを比べると、袖側のもののほうが新しい様相を示しているように思われる。直刀二振の存在もからめて考えると、奥側の直刀一振と須恵器・土師器を副葬遺物に初葬が行われ、その後短期間を経て袖側の須恵器、馬具、それに棺側の直刀一振を伴った追葬が行われたものと考えられる。この場合、木棺もしくは板上から初葬者を片付けたうえ、これを追葬段階で再利用した可能性が高い。片付け先は北側壁寄りの初葬副葬遺物の手前のスペースへの平行移動というのが石室内の配置から読み取れよう。また、石室構築材のうちで最大の袖石のひとつ左袖石の基底面にはカキと思われる貝殻の付着があった。現地形での直線距離にして２㎞の海岸線付近で採取したものを運搬したものであろう。

３号墳はその存在が把握されていなかったもので、全壊に近い状態で検出された。出土須恵器からすると７世紀前半代のものである。1973（昭和48）年に調査された御産所古墳群内の円墳11号墳は、これに近い時期、６世紀末～７世紀初頭のものとされ、横穴式石室内に４体とも５体とも７体ともいわれる人骨が発見されている。この石室は当３号墳よりもひと回り大きい玄室規模で、採土により入り口部分を失っているが、図をみるかぎりでは無袖の横穴式石室と判断できる。当平野では、この時期、中小の古墳の主体部として小型無袖の横穴式石室が採用される例が多いところから、この石室にも無袖の形態を想定しておきたい。御産所古墳群内では、これら３基のほか10基程度の古墳が存在、あるいはかつて存在していたが、そのいずれもが墳丘規模の比較的小さいもので、主体部がわかるものには横穴式石室や箱式石棺があったとされている。これらのことや本報告の２基の古墳を総合して考えると、御産所古墳群は古墳時代後期、この丘陵周辺に居を構えていたある程度有力な一族の墓域であったとするのが適当であろう。

**文　献**

森　光晴　『埋蔵文化財報告書 御産所11号古墳・忽那山古墳・久万ノ台古墳』
松山市教育委員会・松山市文化財協会 1976

栗田茂敏ほか　『葉佐池古墳』松山市教育委員会 2003

栗田茂敏　『葉佐池古墳－３・４・５次調査－』松山市教育委員会・㈶松山市埋蔵文化財センター 2010

# 写真図版

写真図版１～５：福角２号墳

写真図版６～19：永塚古墳

写真図版20～36：御産所権現山古墳

# 写真図版データ

1．遺構は、６×７判・35㎜判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影している。また、35㎜判カラーネガフィルムも保管している。

2．遺物は、４×５判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材:

カメラ　　トヨビュー45Ｇ
レンズ　　ジンマーＳ 240㎜Ｆ5.6他
ストロボ　　コメット/CA32・CB2400
スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　　白　黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材:

引伸機　　ラッキー45MD・90MS
レンズ　　エル・ニッコール135㎜ Ｆ5.6Ａ・50㎜ Ｆ2.8Ｎ
印画紙　　イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．製版　　写真図版175線
印刷　　オフセット印刷
用紙
製本

【参考】『埋文写真研究』vol.１～20・『報告書制作ガイド』・『文化財写真研究』vol.１～３

［大西朋子］

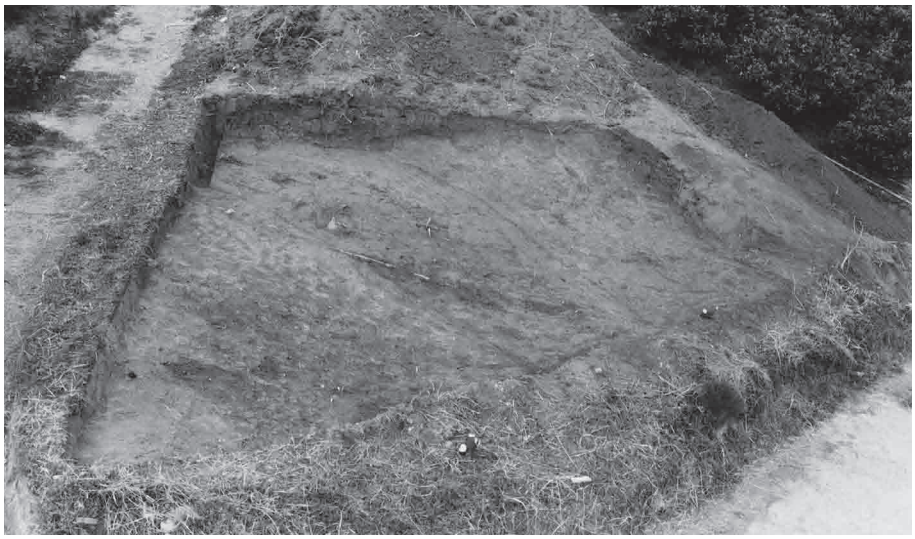
**調査前の調査地遠景**
（東より）

**調査前近景**（西より）

**果樹伐採後の調査地近景**
（西より）

図版２

**調査作業風景**（西より）



**周溝検出状況（１）**（西より）

**周溝検出状況（２）**（東より）

**周溝遺物検出状況（１）**
（西より）

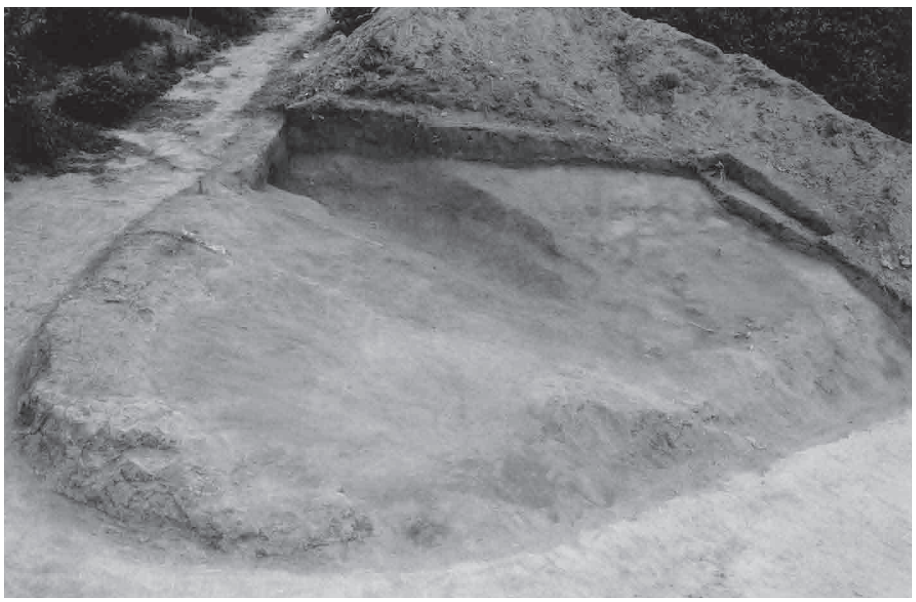
**周溝遺物検出状況（２）**
（南西より）

**周溝遺物出土状況（３）**
（南より）

図版4

周溝遺物出土状況近景

周溝完掘状況（東より）



完掘状況全景（西より）

周溝出土遺物

図版6

調査前墳丘伐採作業風景
（西より）

伐採・清掃前の後円部の状況
（南より）

伐採・清掃前の主体部の状況
（南より）

**伐採・清掃後の墳丘遠景**
（北東より）

**伐採・清掃後の墳丘（1）**（南より）

**伐採・清掃後の墳丘（2）**（南西より）

図版8

主体部遺存状況（1）

主体部遺存状況（2）
（南東より）

主体部床面の状況

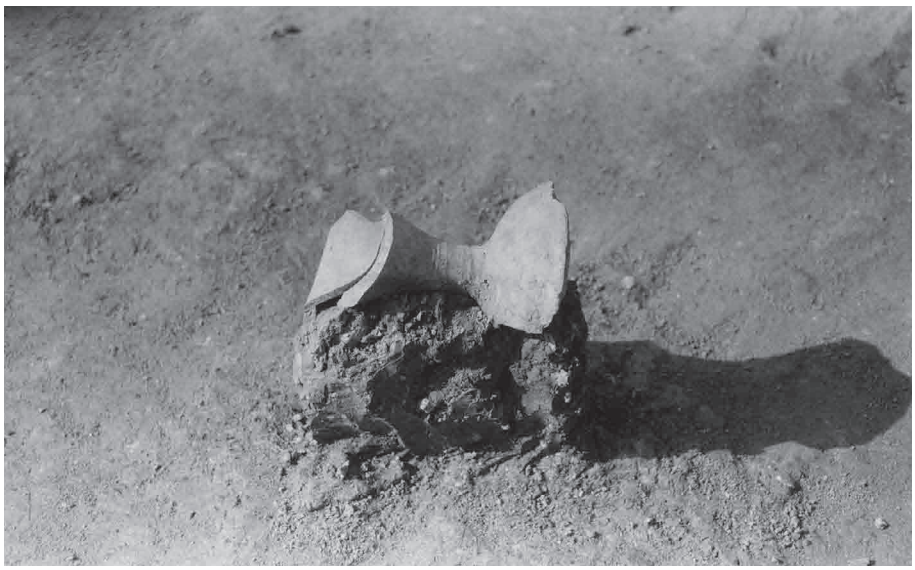
南側くびれ部地山整形痕
ＳＸ１検出状況(南より)

ＳＸ１遺物出土状況（１）(南西より)

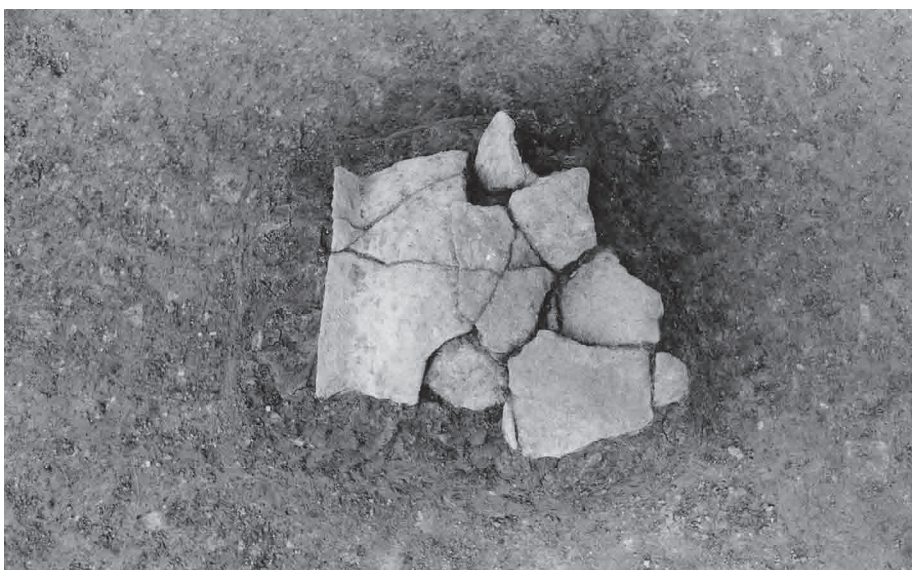
ＳＸ１遺物出土状況（２）

図版10

ＳＸ１遺物出土状況近景（１）
（北より）



ＳＸ１遺物出土状況近景（２）
（北より）



ＳＸ１遺物出土状況近景（３）

ＳＸ１完掘状況（北西より）

北側くびれ部地山整形痕ＳＸ２
調査作業風景（南より）

ＳＸ２遺物出土状況（１）（北より）

図版12

ＳＸ２遺物出土状況（２）
（北より）

ＳＸ２遺物出土状況（３）
（東より）

ＳＸ２完掘状況（１）（西より）

**ＳＸ２完掘状況近景（１）**
（東南より）

**ＳＸ２完掘状況近景（２）**
（西北より）

**前方部横断土層**（南東より）

図版14

**前方部縦断土層**（南西より）

**前方部～くびれ部縦断土層**
（南西より）

**後円部～くびれ部縦断土層**
（南西より）

34

42

35

43

41

ＳＸ１出土遺物（１）

図版16

ＳＸ１出土遺物（２）、ＳＸ２出土遺物（１）

95

96

97

98

ＳＸ２出土遺物（２）

図版18

99

100

137

102

127

ＳＸ２出土遺物（３）

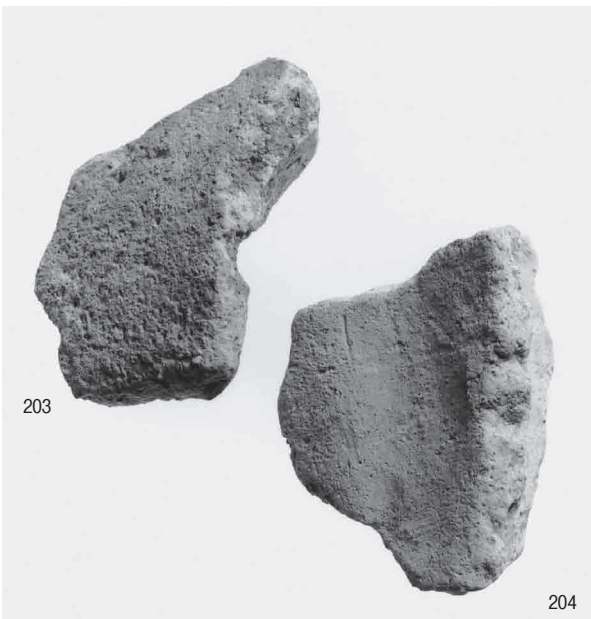
138

181

139

180

179


203
204

ＳＸ２出土遺物（４）

図版20

**E区1・2号墳遠景**（北西より）

**2号墳丘より望む伐採前の1号墳丘**（北より）

**伐採後の1号墳丘（1）**（東より）

伐採後の１号墳丘（２）（南より）

１号墳丘上石材集積状況（南より）

１号墳横穴式石室の検出（西より）

図版22

1号墳横穴式石室閉塞状況
（東より）

1号墳横穴式石室左袖部
副葬状況（北東より）

1号墳横穴式石室副葬状況（西より）

1号墳横穴式石室奥壁部副葬状況（西より）

図版24

1号墳横穴式石室床面
馬具検出状況

1号墳横穴式石室奥壁
（西より）

1号墳横穴式石室開口部
（東より）

1号墳横穴式石室全景（1）
（西より）

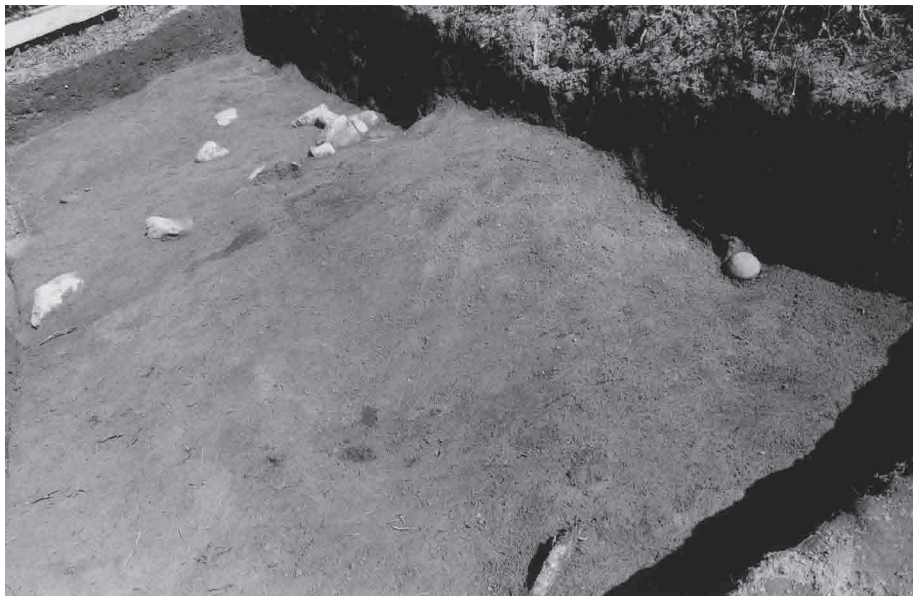
1号墳横穴式石室全景（2）
（西より）

図版26

1号墳横穴式石室墓壙掘り方検出状況（西より）

左袖石基底部貝殻付着状況

左袖石基底部貝殻付着状況近景



**試掘調査３号墳横穴式石室**
**および東側周溝検出状況**
（南東より）

**試掘調査３号墳横穴式石室**
**検出状況**（南東より）

**試掘調査東側周溝須恵器**
**平瓶出土状況**（南東より）

3号墳北側周溝遺物出土状況（西より）

3号墳横穴式石室鉄鏃出土状況

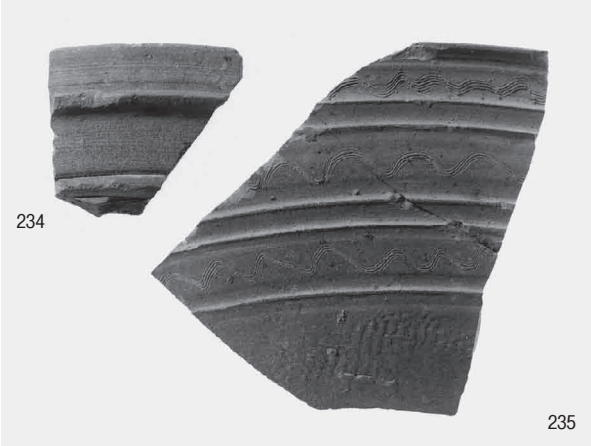
3号墳横穴式石室棺台石配置状況（南より）

3 号墳横穴式石室完掘状況
（西南より）

3 号墳横穴式石室完掘状況
（東南より）

3 号墳横穴式石室完掘状況
（南より）

図版30



試掘調査Ｂ区・Ｄ区出土遺物

1号墳丘・周溝出土遺物

図版32

313

314

313
314

309

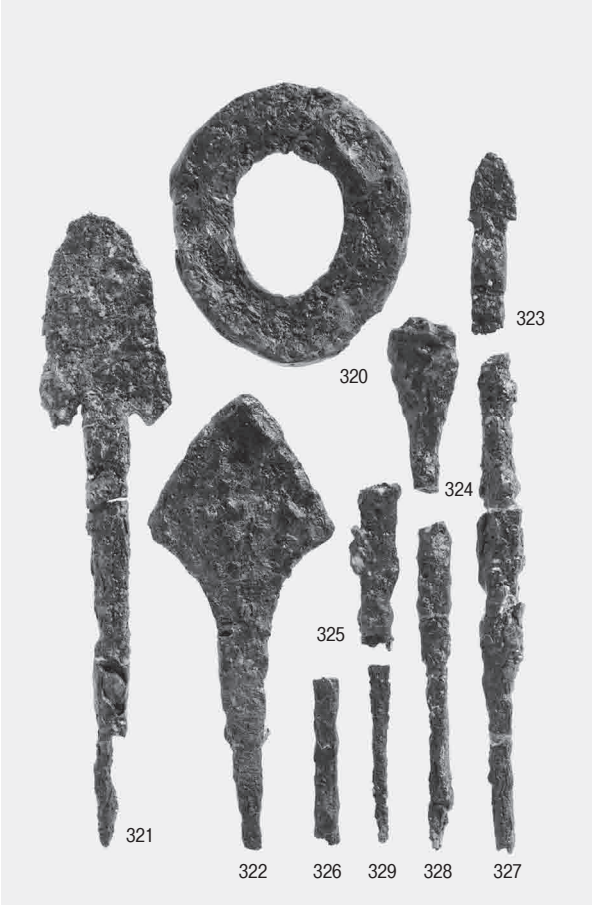
311

312

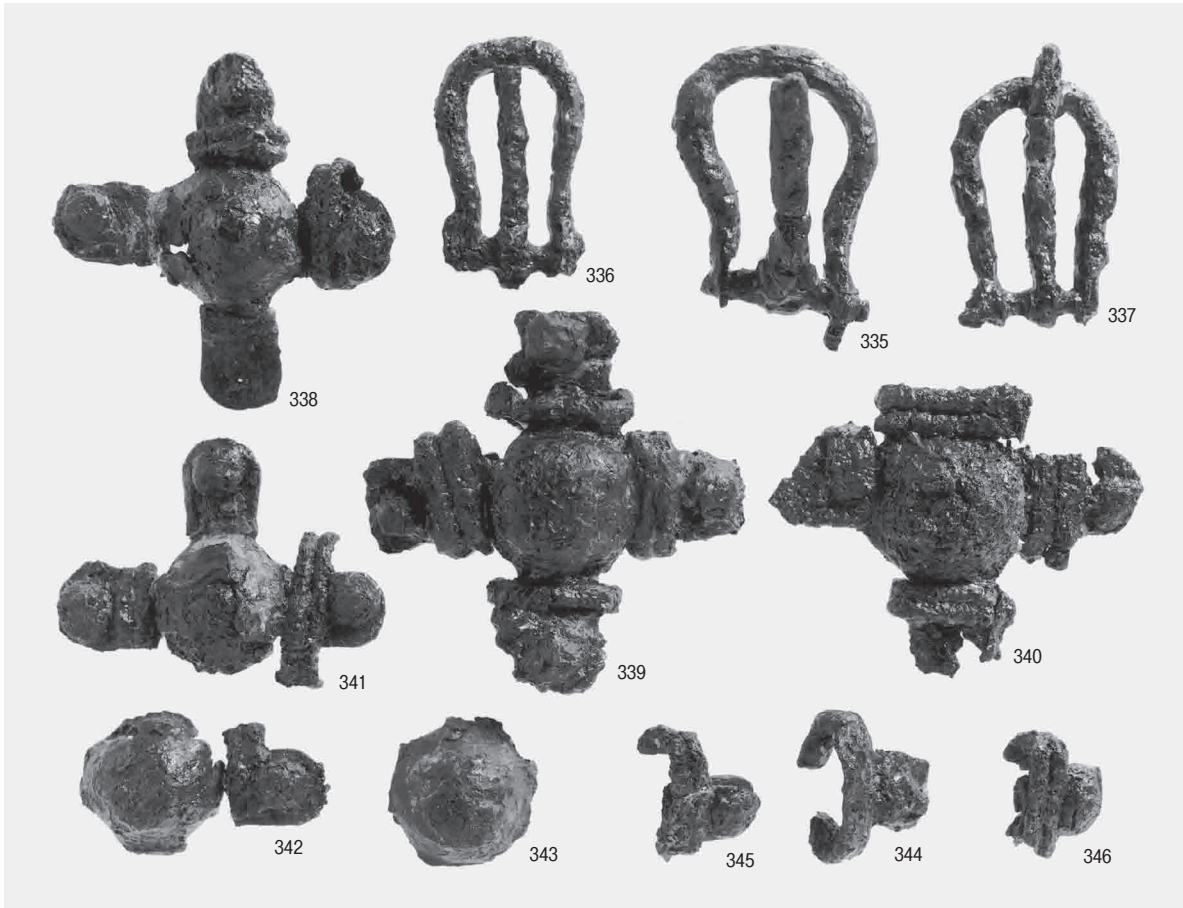
1号墳横穴式石室出土遺物（1）

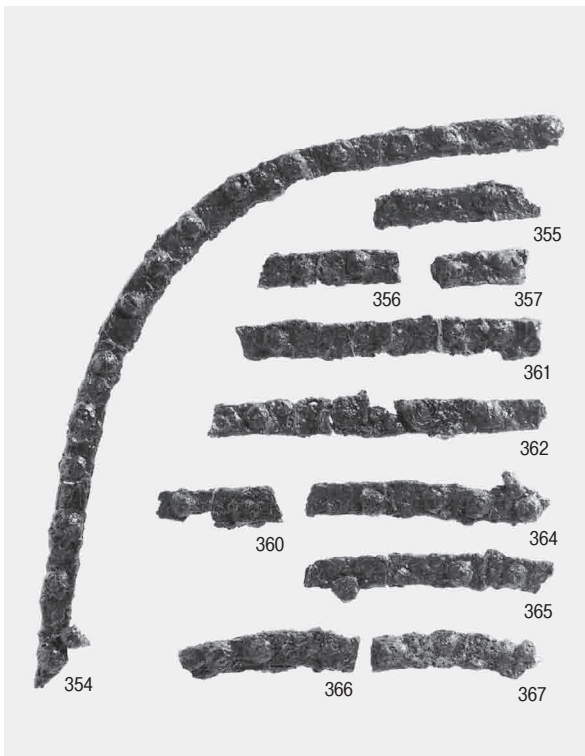
1号墳横穴式石室出土遺物（2）

図版34



1号墳横穴式石室出土遺物（3）



1号墳横穴式石室出土遺物（4）

図版36

1号墳横穴式石室出土遺物（5）、3号墳出土遺物

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | ふくずみにごうふん・ながつかこふん・ごさんじょごんげんやまこふん |
| 書　　名 | 福角２号墳・永塚古墳・御産所権現山古墳 |
| 副 書 名 | |
| 巻　　次 | |
| シ リ ー ズ 名 | 松山市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第160集 |
| 編 著 者 名 | 栗 田 茂 敏 |
| 編 集 機 関 | 公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター |
| 所　在　地 | 〒791－8032　松山市南斎院町乙67－６　TEL089－923－6363 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦2013年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所　在　地 | コード | | 北　緯<br>°　′　″ | 東　経<br>°　′　″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ふくずみにごうふん<br>福角２号墳 | えひめけんまつやまし<br>愛媛県松山市<br>ふくずみまち<br>福角町 | 38201 | | 33°54′20″ | 132°45′41″ | 19840402<br>～<br>19840417 | 179.55 | 電力鉄塔建設 |
| ながつかこふん<br>永塚古墳 | えひめけんまつやまし<br>愛媛県松山市<br>きぬやま<br>衣山 | 38201 | | 33°51′16″ | 132°44′32″ | 19850108<br>～<br>19850206 | 660 | 宅地造成 |
| ごさんじょ<br>御産所<br>ごんげんやまこふん<br>権現山古墳 | えひめけんまつやまし<br>愛媛県松山市<br>やまにしまち<br>山西町 | 38201 | | 33°50′50″ | 132°40′50″ | 19890801<br>～<br>19900531 | 69,400 | 農地形状変更 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主　な　遺　構 | 主　な　遺　物 | 特　記　事　項 |
|---|---|---|---|---|---|
| ふくずみにごうふん<br>福角２号墳 | 古　墳 | 古　墳 | 周　溝 | 須恵器、埴輪 | 円墳、５世紀末 |
| ながつかこふん<br>永塚古墳 | 古　墳 | 古　墳 | 墳　丘<br>主体部 | 須恵器、埴輪 | 前方後円墳、６世紀後半 |
| ごさんじょ<br>御産所<br>ごんげんやまこふん<br>権現山古墳 | 古　墳 | 古　墳 | 墳　丘<br>周　溝<br>主体部 | 須恵器、埴輪、<br>武具、馬具、工具 | 円墳２基、６世紀後半および７世紀前半 |

| | |
|---|---|
| 要　　約 | 松山市北部域で1980年代から1990年代初頭にかけて行われた古墳の調査３件。いずれも調査後消滅。永塚古墳は松山では最も新しい段階の前方後円墳で６世紀後半のもの。伴う埴輪も当地方最終末のものである。 |

松山市文化財調査報告書　第160集

# 福角2号墳
# 永塚古墳
# 御産所権現山古墳

平成25年3月31日　発行

編集　公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL(089)923-6363

発行　松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町6丁目6番地1
TEL(089)948-6605

印刷　不二印刷株式会社
〒790-0054 松山市空港通2丁目13番30号
TEL(089)973-1266